



新井石禪師講述

禪學之綱要

鍬川佛教講習會出版

緒言

身心を決擇して安心立命を確立するには禪定に若くはあし而して其の禪定あるものは行證を左右にする修證不二の法門なり。ち證は能く宇宙人生の立理を證得し、修は常に其理を實踐躬行するにあり。されば其の證悟を得るには大悟三返小悟其數を知らずといふが如く漸く入れば漸く深き幽玄高妙の立旨あるも其の能く之を實踐躬行するや利人鈍者を擇ばず八歳の女流も等しく信得及せらるゝ最も微妙の法門あり。故に古來より武人は之れに依て能く武術の蘊奥を極め文人は之れに依て能く宇宙人生の立旨を發揮せり。然れば則ち之を武に文に教育に政治に法律に實業に道德に家庭に其他有らゆる方面に其理を應用して實踐躬行せば自ら其の妙處に至らざるはあきなり。實に吾人の身心を訓練するには一日も之を等閑に附すること能はざる無上の法門あり。依て

48.12.14
内交

我々等簸川郡内曹洞宗寺院心を合せ佛教各宗諸師の協賛を得て夏期講習會を開き、禪定に堪能なる新井石禪師を招聘して禪定の實踐的方面に關する通俗的講話を請ひ聊か禪定を學ぶの指導を得たり。依て此に其の速記を上梓して普く大方諸士と共に禪定を學ぶの業を爲すこととせり云爾。

明治四十三年十月

編輯主任

密應謹識

凡例

一、凡そ禪學を講ずるに自ら二種の方法あり。一は提唱にして、他は講義若しくは講演なり。前者は専門的にして後者は通俗的なり。而して其の講演なるものも亦二種に分かる。一は禪理を悟らしむる學理的説明にして他は禪定を學ぶ實踐的修養の講話なり。本書は主もに其中の最後の方法たる禪定を學ぶ實踐的修養の通俗的講話を請ふて編輯上梓したり。そは成るべく一般の人をして禪を學ぶの業と爲さしめ、之れに依りて能く身心を實際に訓練して社會文化の基礎を益々鞏固に確立せんと欲すればなり。

一、本書は新井講師の校閲を経たるものなるも或は其中に誤字脱字等なきにしもあらず。其の責めは筆者の過失若しくは活字の誤植に歸するものなれば讀者之を諒せよ。

一、本書の各章に項を分ち若しくは文段を劃し、及び引用語、詩歌俳句等を別行と爲して編輯したるは是れ全く閲讀の便利を圖りたるものなり。其の責は編輯者にあり。讀者之を諒せよ。

禪學之綱要目次

緒言	一
第一章 佛教の歸趣	二
(一) 佛陀の意義	二
(二) 各宗の發展及び其歸趣	一一
第二章 禪の本領	二七
第三章 禪の信仰	三九
第四章 禪の人生觀	五一
第五章 禪の倫理觀	六四
第六章 禪の實踐	七六
第七章 修養の標準	九六
(一) 修養の四病	九八
(二) 功勳五位の徳	一〇四

禪學之綱要

講師 新井石禪講述

細田興巖筆記

紹慶密應編輯

緒言

此に「禪學の綱要」といふ題について禪の大要を御話し申したい、依て説明の便宜上第一章より第七章まで七個の章に分け略ぼ系統を立て、御話して能く領解できる様にしたと思ひます、即ち

第一章は佛教の歸趣、佛教全體に通じて教理の皈着する所を述べて置く必要がある、尤も具體的に説明する程の時間はないから極めて抽象的に大略を御話して置きたいと思ひます、

第二章は禪の本領、禪とは何ぞやといふことに付て其の大綱を御話する積りです、

第三章は禪の信仰、禪宗も決して信仰を度外視にはせぬ、固より宗教であるから信仰を以て入門の第一となすのである、依て其の信仰について述べねばならぬ、即ち禪宗に於ける信仰は如何様なものであるかといふ問題を述ぶるのです、

第四章は禪の人生觀、禪理の上から人生を如何見るべきものであるかと云ふことについて御話するのです、

第五章は禪の倫理觀、禪の上から吾々人間の倫理道德の問題に對した場合は如何なる觀念を以てすべきかといふ所謂禪の見地より觀たる道德上の問題です、

第六章は禪の實踐、即ち皆さんが禪を實行してゆく方法を御話申すのである、

第七章は修養の標準、禪であるからといつて坐禪ばかりしてをるわけにはゆかん、唯だ朝から晩まで吾々が常に禪的に精神を鍛練し、縦ひ坐禪をしない時でも坐禪をしてをる時と同一の精神を繼續してゆく方法です、現今の語にいひ換へば所謂精神教育である、此の精神教育の一番基礎となるべき心得を修養の標準として御話したのである、

是れだけ御話したならば大概禪といふものはどんなものであらうかといふ事が御分りにならうと思ふ、尤も佛法の總府とも稱する深遠な禪門の教理を僅々五日間位の内に稍や遺憾のない説明を盡くすといふことは私共の力では甚だ覺束ない、縦ひ出来る丈の腕力ある御方でも限りある時間の内に御話することは随分困難であらうと思ふ、況や私の如き微力では斯様な演題を擧げて十分説明を盡くさずには擧ることも多少あらうと思ひます、殊に僅か一部分の説明として他は詳しく話さず置くことも間々あれば若し進んで質問をしたいとか、或はもう一步進んだ點までの話を聞きたいといふ思召の御方があれば拙稿の宿所へ御尋ねをして下さいませれば力の及ぶ限りは御問ひに應じて御答ひをする積りです、されば是れから上に述べた如き順序で御話いたしませう、

第一章 佛教の歸趣

(一) 佛陀の意義

釋尊が説き給へたる四十餘年の大法輪は積んで山を爲す程です、併しその佛教の大精神の歸着は何處にあるか、所謂佛教の本領はどこにあるかといふことを研究して置かねばならぬ、元來佛教は八万四千の法門とも稱して無量の衆生に對して無量の化門を開かれたのであるからその法義は無論一様では無い、それ程法門の數が澤山にあるのであるから従つて之を信ずる人の上にも種々の宗派の生ずべきは自然のことといはねばなりません、現今日本佛教の上に付て申しましても宗の數よりいへば十三宗、派の數よりいへば殆んど五十派もある、實に澤山なものです、禪宗といふ上に於いても大きく分つて三派に分かれてをる、即ち臨濟宗、曹洞宗、黃檗宗です、これらを細かに分けると曹洞宗と黃檗宗とは一宗一派であるが臨濟宗の中では妙心寺派、建仁寺派、天龍寺派、東福寺派、南禪寺派、建長寺派、圓覺寺派等で其他にも派が分れてをる、けれども禪宗の如きは唯だ法脈相續の上から派が分かるのです、即ち支那の達磨大師より六代目の大鑿慧能禪師から以下に至つて師資傳授の關係(所謂師弟相續の關係)で宗派が分れてをる丈で、其の根本に至つては毫も異なる所はない、併し淨土門に於ける淨土宗、眞宗等、又法華宗其他諸宗に於ける各派の分立の如きは大體が所依の經典等の教義の扱ひ方の違ふ所より分れて居る、中には一見反對の解釋を互に固守して居るかの如くに見えてをるものもある、即ち一方には御念佛を唱ひて往生淨土を願ふ、他方には御題目を唱ひて即身成佛を期する、一寸表面から見ると氷炭相容れない様な觀がある、それであるから北越地方なんぞに於いては人事に屬する縁組の上に迄もそれが非常なる關係を及ぼしてをる、私は淨土宗であるから日蓮宗の家には嫁にやれない、私は日蓮宗であるから門徒宗の方へは婿にやれない、なんといふ様に宗教の信仰が社交上に迄及ぼすといふ結果を呈してをる、所が其の源は唯だ御一人の釋迦牟尼如來が御説きになつた法門であるからその根源は唯だ一である、其の一の源泉から流れ出た同源一味の法水を汲む佛教信徒でありながら今日では前申した如く縁組に迄も差支へるといふ程に安心起行の上に衝突がある、若し斯様な次第が本義だとすれば釋尊は自語相違で、ツマツ二枚舌を御使ひになつたものと申さねばならぬ、されど釋尊は決して其様な自語相違のことは仰せられぬ、即ち大般若經の中に我は「如語者、實語者、不誑語者、不異語者」なりと明かに説かれてあつて吾れ一代の説法は始終一貫の妙理を説く、少しも相違したことは説かぬ、四十餘年の説法は初中後一貫して同一法味である、決して昨日と今日と又始と終りと丸で違つて居る様な教は一返たりとも致しはせぬぞよと仰せられてある、之を不異語者といふのである、併し一寸表面から見ると大違ひのやうに思はる、

三

も無理はない、一方には此世に於て成佛は出来んぞよと仰しやるかと思ふと、他方では即身成佛が出来
るぞよと説き玉ふ、是れ唯だ皆衆生を誘ひ導かるゝ應病與樂の慈悲方便で四十餘年間縦横無尽に御説き
下され、どうも八萬四千通りもある法門の數が出来たのである、併しながら釋尊は不異語者である、
異つて居るかの如く見えても其實は異つた事は説かぬと仰しやつてある、して見ると唯だ向ふの相手に
依つて種々様々な教を施しに成つたものに過ぎぬ、釋尊の本懐に至つては徹頭徹尾唯だ一である、其の
佛の本懐はどんなものかといふのが是れ佛教の歸趣であります、古歌に

分けのぼる麓の道は多けれど同じ高峯の月を見るかな

とある如く例へば伯耆の大山に登るに登り口は澤山あらうが登りつめてみるご一つである、又家庭に於
て子供を育てるにもさうです、夏になると子供に單物を着せる、冬になると綿入を着せる、子供ばかり
でない、大人でもさうだが大暑になれば暑いから帷をも着せる冬になるとそんな薄着をして居ると風を
引くぞといふて無理にでも暖かい袍を着せる、寒暑の時に應じて衣服の着け方も夫れ／＼違ふて行くに
極まつてをる、が唯だ子を思ふ親心になつて見ると一寸とも變りは無い、唯だ子供の身體を安樂にして
長く健康にしてやりたいといふ丈けの精神である、頭が痛むといふ人に向つては頭の熱を冷す所の水を
授ける、腹を痛む人にはサア温石が宜かろうといふので手もつけられぬ様な熱い温石を與へる、是れも
子の苦惱を救はんと思ふ親の慈悲方便である、手のつけられぬ様な熱い物を以て温めるも冷たい水をも
つて冷すのも子を思ふ親の精神には少しも變りはない、即ち其目的は唯だ一である、畢竟子供の健康を
慮りてどうか安寧安樂ならしめんとするより外はない、果して親の精神も目的も唯だ一つであるとする
ば釋尊の御本領も化導の御目的も唯だ一であらねばなりません、斯く一切衆生を思ふて下さる唯だ一つ
の佛様の大神を究むるのが佛教の歸趣といふのであります、
是くの如く教義の根本は唯だ一であつても向ふの相手に依つて種々の法門を開演せられたのが八萬四千

の法門であつて、之が爲めに根據となしたる經論の如何に依つて佛教各宗派が分れて来たのであるから
之れを委しく御話するには自然佛教各宗の經典から歴史やら開山方の経歴迄も説明するの必要が起つて
来る、それには法華經を引張り出したり、或は三部經を引張り出したり、大日經や華嚴經等をも引証し
て色々な方面から御話をせにやならんが、それでは肝腎な禪の御話が充分出来んことにならなから、
通佛教の方面は総合的に大乘小乗の二方面から釋尊の本懐を御話して見やうと思ふ、佛教には御承知の
通り小乗と大乘との二つがあります、釋尊が最初に華嚴經を御説きになつたといふ説は別として、印度
の摩竭國にて始めて御説きになつた四阿含等の教を小乗と云ひます、小乗とは小さい乗りものといふ義
であります、是れは其の目的も結果も佛様の精神の一部分を達するに過ぎない所から後の大乘に比較
して小乗と名づけたものです、大體佛教の目的は轉迷開悟即ち迷を轉じて悟を開く、之れが佛教全體を
通じての目的である、之れを情の上から申すと離苦得樂といつて苦みを離れて樂みを得るといふことに
なる、之を意志の上からいふと、止惡作善といつて惡を止めて善を作すといふことになる、迷に依て惡
業を造り、惡業に依て苦みを受く、迷と惡と苦みと此三つの者は離るべからざる關係をもつてをる、現
今の學術的用語を以てすれば哲學的方面からいふと轉迷開悟、宗教的方面からいふと離苦得樂、倫理的
方面からいふと止惡作善といふことになる、釋尊が一切衆生の根柢を見給ひしに衆生は尽く迷に沈み苦
みに陥り常に惡業を造りつゝある、此の三種の状態に向つて熱心に迷を離れ苦みを脱し、而して惡業
を止めしむる法門を開示せられた、此三法門を消極的に説かれたのが小乗教であります、故に小乗教で
は銘々の頭に降りかゝつて居る迷執苦惱を解脱するに忙はしく他は兎も角も先づ第一に自身の迷を離れ
て悟を開き獨り苦みを脱して安樂を得、惡事を止めて善事を行ふことが當面の目的となる、是れは最終
の目的ではないけれども迷人の上よりすれば必然の方法です、故にツマリ自己中心主義で佛法を修學し
て行くから自他平等利益衆生の大法門に對して小乗教と稱するのである、固より始めより小乗教と稱す

べき筈はない、釋尊が小乗教を説かれし頃はその小乗教が無二の眞宗教であつたのです、古へ刈責道心が高野山へ登つて出家したのは何んの爲めかと云ふと自分の家庭が紊亂し情欲嫉妬の煩惱が其身心を苦むること甚しく人生の状態が如何にも淺間敷い所から有爲轉變の世とはいひながら實にあぢき無い極みと思ひ、遂に世を厭ふて高野山へ上り妻が来るも面會せず、可愛い小供が尋ねて来るも名乗りもせぬといふ程の修行をせられたじや、是れ皆な自らの迷を離れ自らの罪惡を止めて先づ以て自分一個の大解脱を勵まれたのであるからツマリ是等の類は小乗的なのであります、所が段々其修行が進んで来るに従つて自分の苦しみは既に解脱するを得、自分丈の悟は既に開かれたに依て此眞寂なる境界に腰を落着けて獨り永久の樂みに耽らんとする者が出来て来た、ソコで釋尊は此等を小乗根性と稱して叱りなされ自分獨りが悪い事をしない、自分一人が苦しみを離れたからそれでよいと云ふ様なものではならぬ、それは自調解脱といふて佛の精神には背いて居る、マウ一步進んで普く一切衆生を濟度せんことを期し、飽まで此社會人世を救ふてゆく場合によれば己れ一身を犠牲として衆生を濟度するといふのが佛敎の大本領である、即ち佛佗の御心である、自調解脱は決して本當の佛法でないぞと説かせられた、元來眞の自利は必ず利他に依つて全ふせられるものです、例せば家庭の上からいふてもそうです、自分一人でよいといふ自己中心であつたならば家庭が治まるものでないのみならず、自分の安寧を成就するとは不可能であります、況んや自己中心主義では國家の發達を謀り社會の文明を進む事は尙更出来ぬ、商人が商賣するのは何んの爲めかといふに唯自分の爲めのみを考ひて他人を眼中に置かなんたならば決して満足に商賣の目的を達する事は出来ぬ、其外奉公人にせよ主人にせよ銘々に利己を中心として至も他を顧みないといふやうでは断じて自己の本分を保つことは出来ぬ、従つて一家の中は一日も治つてゆくものではない、自分の内には老人があるから御飯が硬くては困るだらう、内の旦那は甘いものが好きであるから甘く料理をせにやならんといふやうに總て他人の幸福と満足とを中心としてゆけばこそ御飯一つでも全體の人

が満足する様に炊けるのである、若し自分一人を中心として御飯を炊かれた日には硬飯の様な御飯を炊いたり、粥の化物の様な御飯を炊く女中があるかも知れぬ、それでは御飯一膳も家庭風波の元となるものです、故に自分だけの解脱自分だけの安樂では如何程立派な修養が出来たにせよ半文の價値もない、是の如きは皆な小乗根性であるぞと佛様は叱りになつたのであります、さすればツマル所は自覺覺他覺行圓滿これが佛敎の歸趣であります、而して其の自覺覺他覺行圓滿とは佛のことです、故に要する所佛敎の歸趣は成佛といふことの一事に歸するのであります、

然らば其の佛とは如何なる意義かといふに、佛とは印度の語で具さには佛陀耶といひ、或は單に佛陀とも云ふ、翻譯すれば覺者の意味と智者の意味とがある、併し餘り翻譯の數が多いと却つて感えますから覺の意味で此に少しく解釋して置かう、覺とはサメルと訓じ、煩惱の夢醒めて菩提の眼開け、又衆生煩惱の迷夢をも覺醒し玉ふが故に覺と稱するので、之を日本語ではほとけと呼ぶのである彼の有名なる國學者の契沖阿闍利の如きは佛とは浮圖貴である浮圖とは佛佗の代名詞で、ケとは貴の意義じや、佛佗は天地の間に最も貴ぶべきものであるからそれで浮圖貴と我國で稱するに至つたのであると斯様に説くある、されども多くの學者達は之を以て充分の解説とはして居らぬ、又ホトケとはほとけの異語であるといふ説もある、欽明天皇の拾三年に百濟の聖明王が始めて我國へ今の善光寺如來の尊像と幾種の經卷とを御献上になつた、ソコで我國では君臣共に初めて見たのであるから是れは天竺の神様じやさうな何でこしらいたのであらうかと云つて一同がこう手を以て撫でて見ると閻浮陀金と云ふ温りのある性質の金であるから、コラ妙じやこんな寒い時分でもほとけがあるから活きてござるやうじや妙な神様じや、其時分には未だ人智が開けて居らんから、是はほとけがある、ほとけがあるかと云つたのが遂に中畧してホトケと呼び、佛佗の代名詞に成つたと云ふことです、モー一つは佛と云ふは器物の名である、陶器の如き物の名である、ほとけと稱する器物に佛像を載せて傳へたから、ソコでホトケと

稱するに至つたと云ふ説もある、そう云ふ風に詞の上からは色々の説明がありますが、佛陀智徳の根底を表明すべき意味の上から申すと曹洞宗の有名なる天桂禪師の歌に

佛とは誰が結びけん白糸のしづがれたまき線へかへし見よ。

です、尤も此歌の意味は天桂禪師が始めての解釋ではない、天桂和尚以前から此解釋は在つたのであるが、天桂和尚がそれをかやうに國歌に詠れたのである、ホトケと云ふ意味に付いては餘程適切な解釋である様に思はれます、抑も佛陀即ち覺といふは全く解脱の徳號です、解脱といふは身も心も從來縛ばられて居た者が今ほごけたといふ意味です、先づ第一には精神上的の束縛をほごくことが必要じや、釋尊發心の第一義はコ、に在る、併し心ばかりではない吾々の身體にも束縛がある、健康を缺くのも品行の修まらぬのも皆な束縛です、故にそれをも解脱する、社會の上にも惡風習、惡風俗等の束縛がある、それをも解脱する、是の如く内外一切に就て總ての束縛を解脱して迷執煩悶の根本を離れたのがホトケ様であります、例へてみると不圖苦しいツライ夢を見て居た者があるとするか、夢が覺めさへすれば苦もなく惱もない、吾々衆生は今日迄は迷執の爲に種々の束縛を受けつゝある、夢を見て居た其迷執の夢が覺めてしまえば吾は本來の佛であるのである、故に世間出世間に於ける總ての迷の夢、苦しみの夢を覺め盡して眞の解脱を得たのが佛様である、解脱は原因で覺は結果です、斯く一身の迷夢を覺した境界が自覺である、所が次の覺他といふのは唯自分のみの解脱を求むるのみでない又社會人類の解脱を得させるのみでもない天下國家に所有物柄は一切の動物一切の山河草木に至る迄も大解脱を得て大安樂に住せしめやうといふのが覺他の目的です、されば大變大きな仕事大きな希望である、限りなき範圍と限りなき時間とに充滿せる大行願である、元來眞の安心安樂といふものは自分獨りの力で得られるものでない自他交通の上に生ずる筈のもので、西洋の或る豪傑が國法に觸れた爲めに囚人となつて獄に投せられた時、斯うして毎日何事も爲すことなく唯だ坐つて計り居てはさうしても生きて居ることが出来ぬ、何か仕

事を見附けようと思ふても仕方がない、牢番の人に頼んで紙を少々貰つて長さ凡そ一寸位の紙捻を幾本も拵へた其れをマア活きた人間と假定して其紙捻に足をつけて相撲をどらせる、そればかりじや面白くないから後にはそれを引き伸して空へ投げ上げてはバラバラと板の間に墮す、又コウ一つに集めては空へ投げてはバラ／＼と下に墮す、到頭さう云ふやうな事を六年間もやつたのであらうといつたさうである、紙に語つて若しアノ時に紙捻が無つたならば我は疾に死んでしまつたのであらうといつたさうである、紙には神經も何も無いが自分の友達と假定しそれを相手として辛うじて生命を繋いだのであります。是れを見ても他人は自己の活力を資くるものであることが明らかではないか、夫れを自分一人が悟ればよい、自分丈が苦しみを離ればよいと云ふ様な利己一點張りでは決して利己といふ目的にも達せられぬ、己れが可愛いからとて他人を度外視したならば却て自分を愛するといふ目的に反對した結果が現はるゝことはキマツてをる、それであるから自覺と同時に覺他といふ事が必要になつて参ります、詩を作てもさうです、自分では大分佳い詩が出来たと思ふても自分獨りでは決して樂みはない、他人に見せて善いとか悪いとか評せられて始めて面白味も樂しみも出来るのである、終には見たがらない人に迄見て貰ひたくなる、私の友人に謠曲の好きな人がある、その友人を訪ふて御馳走でも出た時には御飯が濟めば何つとも一時間位は謠はれる、行き合せた者も忙しい時などには頗る迷惑する、それも上手なればじやが特別に下手じや……………、(大笑)さればごんなに謠曲が好きでも聴手がないと面白くないと見ゆる、人間といふものは妙なもので癩癩持が腹を立てると何んの關係もない人に迄向つて怒鳴つたり、訴いたりする、兎に角怒鳴つてしまえば後は氣がサツパリする、相手は誰でも關はん唯だ腹の中の穢りを漏らし怒鳴つてさげすまへば氣が濟むといふならイツン野原へでも行き一人で怒鳴つたならば、當り障りがなくて宜さそうなものじやが、それではドーも氣が濟まぬ、矢張り怒鳴るにも聴手が無けらにやならんと見ゆま

す、何れの方面から見ても吾々は社會的であつて孤立的ではない、自分が悟りを得たならば天下の人に

之を分ち、自分が教を得たならば天下の人に之を施し、遂には自分といふことを打ち忘れて唯だく國家の爲め國民の爲め人類の爲め一切衆生の爲めに盡くすといふのが覺他の精神であります、此の自覺と他覺とが満足に具はつたのが自覺覺他覺行圓滿の佛様といふのであります、此自覺が段々進んで來たのを吾々の宗教的解脱とも安心ともいふので覺他の成功したのを慈悲心とも光明遍照ともいふのである、即ち自覺は智の方で覺他は徳の方になります、之を今日の詞でいふと智識と道徳とである、尤も世間にいふ智識道徳なるものは其の範圍が狭いがそれを最も廣義にして無限なる智識と道徳との完全に具つたのが佛様である、世の中には自分は御寺參りはしたとは無いが教育は好きであるとか、佛法は大嫌いだが慈善は好きであるとかいふ人がある、苟くも知識道徳の進歩發達に志す人ならば矢張り覺の一部分は具へてをる、即ち佛性の一分は矢張り具へて居る、されば吾々はドーしても宗教特に佛敎の力に依らんければ完全に精神の統一は出來ぬ、無宗教主義の教育家慈善家も統一の少き自覺と覺他とは行つてをる、此點からいへば今日いふ學者でも教育家でも皆佛敎の御仲間です、唯だ佛敎中の一部分を持つて居るのであるから小さい佛様じや、即ち小佛様だ、奈良の人が關東の人に向つていふには奈良の大佛様は坐つて居なさるも高さ五丈三尺ある、大變大きなものではないかと自慢をする、負け嫌いの關東の人がいふには、あれ程名高い奈良の大佛様も僅か五丈三尺しかない、ソレハ實に小さなものだ、關東などは小佛でも三里はある、即ち甲州街道の小佛様は上り下り三里もあるじやないかといつて大威張りに威張つたそのうである、(拍手大笑)吾々は皆小佛です、それを益々修養を加へて完全なる發達を遂げ、さうして吾々の理想通りに智徳圓滿の域に達するのが佛様であります、今日佛敎を信ずる吾々は自分一人が佛に成ればよいといふ様な考へではならぬ、大日本國乃ち國民全體を擧げて佛様にせにやならん、更に進んでは世界全體をも佛様にせにやならん、之れが佛敎の目的です、然らば吾々御互が自覺覺他といへる大方針に向つて進んで行くにはどうすれば善いか、コ、が當面の大問題です、哲學者は哲學的理想を以て進ま

んとして居る、而して能はず、實業家は實業の力に依つて理想を達せんと欲す、而して能はず、仲々六つかしいです、聖人も尙ほ病むといふのが此關門です、然るに哲學上の智識もない、實業上の力もない、何等の才能も方針もない、殆んど世の中の最下層に在るといふ様な愚夫愚婦の連中に至る迄悉く自覺覺他といへる大理想に向つて悠々進んで行かれるのみならず、其理想を知らずの間に實現し得べき万古不易の方法を確實に授けて行くのが即ち佛敎の特長です、又宗教者の本務であります、成程今日の哲學的學理でも一部分の安心は得らるるかも知れん、中江兆民などは無神無靈魂即ち神も靈魂もないといふ唯物的確信を持って居た、所謂哲學の唯物論的安心をして居た、幾分小佛の仲間入りをした人である、惜い哉其小佛は小さい計りかキズ物の小佛じや、併し無神無靈魂で何んにも無いといふ一つの確信に依つて一種の安心は得て居たらしいが、是の如きは中江兆民にして始めて出來たのである、ダガ無神無靈魂で何んにも無いといふ臆斷的信仰を以て御婆さん御爺さん達に之を勤めてコレデ安心をせよといふてもそれは出來ない、自分一人丈ならばドンな信仰でも自由であるとしても兎に角國家の上社會人類の上には最も必要なりと稱する宗教上の安心を以て普遍的に人心を指導し愚夫愚婦までも一聞の下に安心を得る程の力がなければ五千萬人の全體に幸福を與ふことは出來ぬ、況や人類社會全體の安寧を期するといふことは望まれない、要するに佛敎は念佛から入つても御題目から入つても落ち着く處は自覺覺他である、若し此の自覺覺他に背いたものならば佛敎ではない外道の敎である、釋尊は吾々の爲めに此自覺覺他の標準を最も分り易く御示し下されてある、依て少々休憩の後ホンの一部分だけでも御話し致さうと思ひます、

(二) 各宗の發展及び其歸趣

凡て佛敎は煩惱を解脱して涅槃に入るを以て目的として居る、依て解脱は道に入るの要門でありますから釋尊は五停心を御示しなされた、即ち

- (一) 多貪の衆生には不淨觀
- (二) 多瞋の衆生には慈悲觀
- (三) 愚痴の衆生には因緣觀
- (四) 多散の衆生には數息觀
- (五) 多障の衆生には念佛觀

是等を五停心と申します、尤も天台宗の四教儀には是等を小乗の部に入れてある觀法ですから禪に於ける關係は極薄い様ではありませんが佛敎に於ける禪の位地如何といふことを御承知を願ふのには勢い通佛敎の大躰だけを申し上げておかねばならぬ、それには小乘大乘の二門に分ち佛敎發達の状態を觀察すれば自から敎理の根本精神を窺ふことが出来やうと思ふ、特に佛敎の歸趣たる正覺成道、即ち自覺と覺他とによりて覺行を圓滿成就して佛道を成する關係は元來自然の理である、自覺だけでは小乗の様なるも眞の自覺には必ず覺他が伴はねばならぬ、例へば親が子を受するといふのも亦朋友相親むといふのも皆天性自然の情で所謂愛の發動である、然るに此天性の至情を妨げて我利我利主義とか獸慾主義とかいふ恐ろしい根性が出るのは皆一種の病です、故に此の病を除いて健全に本性の發達を期するのが宗敎上一番大切なることで所謂先決問題です、其精神上の病を癒す所の妙藥を釋尊が御説き下されたのが八万四千の法門である、其法門の端緒とも見るべきものは此五停心であります、即ち五つの法を以て五種の心の過ちを停むるから五停心と申します、吾々の精神の病を停め精神の煩悶を停止して行く方法が種々の種類に應じて異なりますが、之を要約して五つ通り説かれたのである、此五停心は大躰は小乗敎に於いて説く所であるが、此五停心が段々發達して立派な大乘の佛敎といふものが出来あがつたものとして見ることが出来る、ソコデ斯く一番見易い且つ適切な此五停心について佛敎の法門の分かる、所以を研究して見て戴きたい、即ち上の多貪多瞋等とあるは皆吾々の心の病である、下の不淨觀等とあるは其觀

法の標準である、ツマリその煩悩の病を除く所の消極的方法であります、
 第一多貪の衆生には不淨觀。此の多貪といふは貪欲の多い者、物事に執着して食ばかり求めて飽くことを知らず、見るもの聞くものが欲しくてならぬといふ實に厄介な奴である、今日新聞の三面記事を見ましても十中の八九は貪欲の爲めに色々な厭ふべき悲しむべき事件が起つて居る、此貪欲を佛敎では財色食名睡の五つに分けてある、之を五欲といひます、一寸茲に注意していただきたいのは佛敎が制欲主義を教ふるのを見て、それは怪しからん話した、それだから佛敎は大嫌いだ、人間は欲心が在つてこそ活動ができる、若し人間が無欲になつたなら世の中の活力、人間の元氣は無くなつてしまふ、それだから佛敎を信仰すると人間が弱くなつて活潑な氣性を失つてしまふ、無欲主義は社會發達の原則に反對したる印度思想の惡弊であるといふ御方もあるかも知れぬが、それは一應は御尤の様に聞かれますが、未だ充分に佛敎の理を知らぬからです、ツマリ極端に佛敎が此五欲を制すると思はれるから此の恐れを爲さるゝのです、決して誤解である、能く此の多貪といふ字を玩味して見ねばならぬ、貪欲とはムサボル欲といふも大事である、身軀の健康を保つことも大切である、そういふ欲望は寧ろ適當なる條理の下に大々的に獎勵すべきである、身軀生命が大切であるから自然衛生上に注意して長壽を謀る様にもなる、名譽が大事であるから場合に依ては髓を碎き身を粉にして死すとも名譽を重んじ忠節の譽れを末代に揚げるが男子の本領であるといふ様な勇氣も出て來るのです、されば是等は益獎勵して其發達を期せんければなりません、併し若し人間の欲望を悪く不規律不合理に働かしてゆく時は世にこれ程恐ろしき危険はない、例へば不完全なる軌道の上に流車を運轉さす様なもので非常に危ないです、流車は二筋のレールが完全であればこそ一日に數百里の道も安全に走ることが出来ます、若し万一少しでもレールが破壊して居つたならば忽ち脱線して顛覆り何んの罪咎もない流車中の人々が惨死し若くは負傷をすることになり非常

なる災厄を被むることになる、人間もその通りです、吾々が天性の欲情より色々の希望を起しそれが爲め種々の活動を爲すのであるが、ソレには必ず一定の守るべき軌道があつて凡て百行の根據となる、若し其軌道を守らざる時は常に自分一身を害するのみならず家庭にも社會にも損害を與へ、國家に迄も大なる危害を與ふることになります、その軌道とは何んぞやといふに之を通俗的にいふと正義と人情との二本の軌道です、故にその正義に背き人情に反むて制裁なく欲を起したならばそれが即ち貪欲といふことになり、正義と人情といふ二つのレールを踏んでさへ行けば人道を進み行く上に於ても少しも危険といふものはありません、涼車に乗つて島根縣から鳥取に行くにも下の關から東京へ行くにも縦ひ其の途中に山があらうが川があらうが完全なる二本のレールを脱せず正しく進み行けば必ず安全に目的地へ達せられる、吾々が人生といふ道を辿る間にも變化は随分ある、好運に處することもあり、不運に遭遇することもあらうが正義と人情との二つ丈は如何なる場合にも始終一貫して履み行かねばなりませぬ、此二つを脱したのが即ち貪欲です、或は財産に對して貪欲を起して詐偽取財等を爲し、或は色情に溺るゝ貪欲を起し、或は妄りに食物を貪りて身軀を害ひ、或は虚名を貪りて惡事を働き勉強せず好成績を得様とする様な者も少くない、次に睡眠欲これは少し無理な様で睡眠は欲とは違ふではないかといふ小言をならべた人もあるが、併し佛様はチャント五つの欲の中に列ねて置いて堅く縛められてゐる、それは睡眠欲だからとて強ち眠る事ばかりでない、意志の働きが鈍くなつて物ごとに決斷力がなく遂行するの勇氣がない、即ち精神がドコトなくウツトリとしてグヅグヅになつてをる昏沈の状態になり、活潑の氣性を失ふのも睡眠と同じい、古歌に

朝寝坊ひるねのすきな、夕寝坊ときき起きて居睡りをする

とある、吾々の精神が不活潑で、さうして意志が不強固であるとき眼は醒めて居ながら心は眠つて居る、されば勉強の氣が無いとか、精力が鈍いとか、努力心に乏しいとかいふのは矢張り一種の睡りである、

若し國民に惰氣がありて活潑雄壯の氣力がない様なことがあれば則ち國民が睡つて居るのである、若し國民が睡つて居たならばソレソレ大變で國家の發達は到底望まれない、斯かる五欲の中にて最も制し難いは財欲と色欲とです、是等を制するに不淨觀といふ觀念を與へられたのです、尤も不淨といふのは専ら肉體の執着を離れしむる觀法じやが財も亦不淨觀に攝せられるのである、

越後國の勇士に直江山城守といふ人があつた或時徳川公の殿中に於いて天下の諸侯が集つて居られた處で伊達政宗公を困らせたといふ話がある、伊達政宗公は非凡の英傑で幾分か世界の大勢にも通じ世界的識見を有し其當時密かに伊太利の方へ使節を派遣して伊太利あたりと始終交際をして居られた、徳川時代は其時分既に耶穌教は國禁であつたが、政宗の領地たる仙臺丈は或る意味に於いて特別に默許して居つた様である、ソコデ仙臺には其當時から十三軒の天主教徒があつて今日迄繼續してをる、尤も敢て天主教を信じたといふ程では無からうが外國の國狀を知らんが爲めに特に彼等だけ伊太利の羅馬法王と宗教的交通も致し、又それを秘密に許して居られたのである、それ位の伊達政宗であるから色々珍らしい外國の品物を手に入れてをられた、ソコデ諸侯列席の所に於いて一箇の外國錢を出しこれは羅馬の錢であるが如何で御座る、御一同は伊太利の錢を御覽になつたことあるまい、參考の爲めにイザ御覽あれど、自慢そうに示された、ヌルト列の諸侯は是れは御珍らしい能う貴殿の御手に這入たものじやといつて田舎の人が始めて都に出て獅子でも見物するやうに何れも珍らしがつて見て居る、所が上杉景勝の代理として列席せる直江山城守の順番になると、手に持つて居た扇子を擲つて其上に之を載せて見てをる、それを一隻眼を以て遙かに見て居た伊達政宗ハコリヤ何んだ自分は陪臣の分際である、今日は御代理として出て來たにもせよ諸侯と同一の振舞は不敬なりと心得、謙遜を以て態と之を手にはせずして扇子に載せて見てをるのだと、サスガハ上杉家の大忠臣、禮もあり義もありといふのはアノ山城守であらうと、早合點をせられたから、コレコレ直江ドノ其様に遠慮するには及ばぬ、タカが錢じや、苦しふな

い手に載せて仔細に見られよといはれますと、直江山城守兼繼は折角の御詞では御座るが、此の錢と申すものは失禮ながら如何なるものであると御思召か、錢の出處は或は伊太利と申す國でもござらうが、併し貴殿の御手に這入る迄には、どの様な者の手を経て来たのか分からん、或は不正な奴、不忠な奴、或は非人乞食の手を経て来て御貴殿の手に入つたかも知分らん、謂はば甚だ汚らはしき物で御座る、武士たる者は縦ひ外國の錢にせよ、何程珍らしきものにもせよ、斯かる汚らはしきものは武士たる者の手の平に載せべきものではござらん、天下の大亂を治め天下の奸賊を滅す所の日本刀を握る所の我輩の手でござる、其の手をもつて非人乞食の手を經廻つて来たやうな物を載せて見るなんといふことは相成りません、此手に對しても拙者は輕々しく受け取ることは出来ませんと斯様いつた、伊達政宗公は片眼をピカ／＼させて怒つて見たが、其時代の武士氣質としては一理あるに相違ないから如何とも仕方なかつたといふ逸話が残つて居ります、古の武士氣質としては廉耻を重んじ潔白を貴ぶといふ点から金銭に對しても一種の不淨觀を實行したのであります、所が是等は極端なる不淨觀で、或意味に於いては甚だ清廉潔白で宜いが、其の人にして始めて行ふべきもので一般に通ずべきものでは無い、昔の御寺さんなんぞは算盤を知らんのが難有がつて居たのであるが、併し錢の計算が出来ん位では到底人生の研究なんといふことは出来る筈がない、御釋迦様などは錢の勘定どころか須彌山の高さ四大海の廣さ迄計つて居られた位である、今日では數理を以て百科の學問の基礎として居る位です、故に金錢其物やそれを計算することが悪いのでは無い、唯だ金錢に執着して所謂正義と人情との軌道を忘れ一身を擧げて金錢の奴隸となることを最も忌み嫌ふのである、随分世の中には金錢の爲めには義理も捨て恩誼にも背き遂には社會の秩序をも破壊し自分の精神をも根本より痲痺さしてしまう者が多い、故に吾々は是等を見ること糞土を見るが如き觀念を懐く必要がある、之れに由て能く金錢の爲めに志操を曲げず能く正義人道を全ふすることを得るのです、次には色情乃ち男女相互の身分に執着する欲です、これに對して釋尊は肉

體の不淨觀を示して此欲情を停止する方法となされた、人間は多く男女間の容貌について迷ひを發すもので、アノ人は美しいとか、此の人は立派だとかいふ所から癡情を起すのです、これは青年時代に多くあるから古へ聖人も之を戒むること色に在りといふてある、一度人の姿に迷ひ出すと之を離るゝことは中々困難で大概はそれが爲めに遂に情欲の奴隸となり、モ一義理も耻も打忘れ自分一身の滅亡をも顧みない様になる、金銀よりも名譽よりも一層猛烈に進んでくのが色情です、併し色情には大抵一定の期間があるが、財欲には期間がない、八十に成つても九十に成つても矢張り財欲は捨てない、色情はそう長くはない其の代り一時發生した時は其勢ひは恰も火の燃ゆ立つ様に最も猛烈を極め、此期間に於いて一生涯の運命を悲惨の境遇に陥れることが多い、ソコで釋尊は不淨觀を説き給ひて此肉體は表面より見れば奇麗にも觀ゆるが此皮を一枚剝いで見ればどうである、美しいとか醜いとかいふのも薄皮一枚の上に現はれた假りの姿じや、美しいも可愛いも畢竟息の通ふて居る間の事で、モ一息が切れてしまつたらどうであらう、親兄弟夫婦でも傍に寄りつくことも出来ず、其容貌とても目も當てられん様に變つてしまふ、ソレを此不淨觀に依り能く觀念をしたならば肉體愛執の欲は自然に制し盡すことが出来るのです、此の觀念は佛教者ばかりでなく佛教者ならざる人にも随分實行した者がある、支那の歐陽明といふ先生は佛教者の手に成りたる九想の圖といふを青年の時代に常に懷中に入れて不淨觀を爲して情欲の妄發を制したといふことです、即ちその九想の圖とは人間が一朝死んでしまへば縦ひ如何なる美人でも忽ちの間に身體が糜爛して終には白骨に化し去る状態を九段に分けて描き出したものであります、斯く不淨觀といふ觀念力で欲情を解脱して其の解脱の徳が段々鞏固に進んで来れば後には縦ひ七珍万寶の間に在ても一厘一毛を私するの心なく縦ひ媚妍窈窕たる顔に綾羅錦繡を纏ふた姿を見ても又絲竹管絃の音を聞ても少しもその束縛を受けぬ様になる、彼等を見たまま聞いたまま解脱して所謂火に入つても焼けず、水に入つても濡れんといふ眞箇の大解脱は此不淨觀の段々に發達し来た成果です、

第二に多瞑の衆生には慈悲観、此の多瞑とは妄りに腹を立てることです、大勢腹を立てるといふは全く精神上に急性なる一種の發狂です、或場合には腹を立てるといふことも必要なこととありますが、多くは腹を立て、爲した仕事は失敗に終るのです、此方が怒り出せば相手も亦怒る、此方が人をた、けば相手も亦此方をたたく、ツマリ五分五分で一向に利益が無い、尤も人間には反撥性といふ物に反抗する力を天然に有して居る、腹を立てつのも亦此性の發動です、人間のみならず何物でも反撥力はある、此松でもこうやると直ぐにハチ反へる、(瓶裡の松を壓して示す)、こういふ風に總べて反抗する力を持つてをる、勢力の強いものには據ないから負けて居るが、五分五分の者であると直ぐ「たのれ」といふ負けぬ氣性がでる、兎に角此のたのれといふ氣があるから腹が立つ、自分の氣に入らない者に對するこムカと腹を立つ、優れた者に對しては嫉妬怨恨の心が起る、此の心が家庭の和を破り朋友の情を害ひ喧嘩口論打ち合ひ撲り合ふといふ種々の罪惡をも造り出すのである、「集め草」といふ書物に人間は冷かに自分の志をねさめてゆくことを習はねばならぬ、一生涯の間に堪忍を守ること能はずして事毎に腹を立てるとそれが爲めに何程損をするか分らぬ、腹を立てると其時の人間は丸で心が暗になつて其振舞も盲目的になるから何を仕出すか解らぬ、故に常に自分の精神に警戒の力を備ひ自ら己れを制すれば従つて間違ひがない、それには一つの善い方法がある、布袋様の眞言といふのがあるからそれを讀むが宜い、布袋様の眞言なんといふものは御經の中には無いが、誰かこしらいたものと見ゆる、其眞言は

ねんにここにこころ腹立てまいそはか
だ、腹が立つたら此眞言を三返も五返も讀め、さすれば腹の立つたのも治まる、腹の立つた時直ぐ饒舌ると言ひ損ひがある、此の眞言を讀むと間違がないといふことが書いてある、又深草の元政上人の曰つた語に「人間は障子の開け、たて、下駄の脱ぎ、さし、で其人の一代の運命が分る、亦其人の精神の居所も分る」といふて居るが、實にさうです、人に向つて無暗に腹を立てる位の者は俗に八ツあたりとか

申して罪もない草木に至る迄手荒くあたつたり、答のない雨戸や障子までもガラ／＼と恐ろしい音をさせたりする、誠に淺ましいものです、さういふ腹の立つた時分には慈悲観を行ふのが宜いです、向ふに行き届かん所があつて自分の氣に入らぬ時は自分は親になつた心持ちになり、又は兄弟朋友の觀念となるのです、佛は一切衆生は皆な是れ吾が子なりと仰せられたが、吾々も一度は佛教に依りて因果果報の理を觀じて見れば世の中に他人といふものは一人もない、自分より年の多い者は親とも兄弟とも思ひ、年の少ない者は子ども弟妹とも思ふて所謂四海は皆兄弟、万法は皆吾れと同體なりといふ大なる觀念を起してゆくと無謀な腹の立ちかたは自然と出來ぬ様になる、天皇陛下が會て露國と戦を交へられたはツマリ陛下の御腹立ちであるが、併し元々大慈悲心の上から發しなされた御腹立であるから露國の無道を御責めになつたはなつたもの、一旦敵意を捨て降伏した者や戰鬥力を失つて捕虜になつた露兵等に對しては少しも御憎しみ遊ばさせられず、着物のないものには着物を着せ、食物の無いものには食物を與へられ、其外娛樂的の物迄も御與へ下され御愛護あらせられた、なんと有り難い大御心ではありませぬか、國家の大目的として自衛上萬已むを得ず宣戰の御詔勅を御發布になり露國を膺懲あさせられても既に捕虜となつた者は罪を惡みて人を惡まず、日本臣民と同じ様に愛護して下されたのである、故に縦ひ戰爭と雖も仁義の師、道ある軍は或意味に於ける最も偉大なる一種の道德的行爲であるといふことが出来る、其の當時の御製の歌に

四方の海みなはらからと思ひしに、なごあた波のたちさはぐらん、

此の御製の歌を拜見し奉りましても廣大なる慈悲心から東洋の平和を維持し帝國の安全を確保する爲めに遊ばされた實に立派な文明的人道的戰爭を爲し遊ばさせられたのです、故に吾々の平生も要するに慈悲心の開發と發展とを主とすれば眞善の罪は自然と消滅して却て天性の勇氣が發揮されるのであります、

第三に愚痴の衆生には因縁觀、愚痴といふ中には誦らめのわるいものと、道理の解からんのとの二つがあります。誦めんげりやならんがどうもといふ之れが第一の愚痴なんです、死んだ子の年を數へていつまでもクヨクヨ思ふて居る、是等も愚痴である、總べて過去の事に執着して無益の煩悶を抱くのは皆な此の御仲間です、原坦山和尚が後に越前の大本山の永平寺の貫首となられた環溪禪師の二人で修行せられし頃一緒に道中をせられた、坦山和尚は磊落な質で然も青年時代であるから頗る面白い同參である、恰も大井川にかかつた、或説には天龍川ともいつてをる、丁度其時分は川の水が浅いから徒歩涉りをしようといふので、二人が涉らんとすると、一人の器量のよい娘が川を渡らうとしては躊躇して居る、坦山和尚之を見て傍に行き、御前さんそのかわい體で川を渡る事は出来まいから私しが負ふてあげよう、こんな美しい姉さんを負つてあげるは自分も嬉しい、生れてから始めてこんな人を背中に負つたが、イヤドーモ好い心持ちじやわい、かういふて其の婦人を負ひながら法螺を吹きつゝ渡つた、所が環溪禪師は非常な豪傑肌の人で先年伊藤公爵を一言の下に勦破したといふ程の人だ、天皇陛下より曹洞宗の御開山道元禪師へ承陽大師といふ大師號を賜はつたときに、東京の芝の青松寺を會場として盛大なる御證嚴法會を營んだ、其の時の伊藤公は内務卿であつたから招待に應じて居られた、環溪禪師は伊藤公に向つて貴公は………(伊藤)私は伊藤博文………(禪師)ア、伊藤博文といふのは貴公か、大變に名高い御方だが見ると何んだか粗末な人物だ、聞いて千金見て一文といふのはこのことかいなといはれると、伊藤公苦笑して居られた、岩倉公が傍からヒヤヒヤといふて拍手されたことがある、其位氣宇高邁な環溪禪師であつたが、坦山和尚の振舞を見てニガニガしく思はれたか、大井川を渡りきつて路の二三里も行きたと思ふ頃に環溪禪師がいはれるには坦山和尚たれはモ御前と一緒に行くのは止めたと、(坦山)何せそんなことをいふのか、(環溪)かりそめにも修行者の身分として年頃の娘を負つて川を渉るのも宜いが、アノ口のきき方はどうじや、若し人の見聞に觸れたら耻かしいではないか、(坦山)

それは一體何んの事かい、(環溪)何んの事ツて先刻大井川で娘を負つたんじゃないか、(坦山)そうだつたかいな、(環溪)そうたつたかいなもないもんだ、現在今しがた自分が負つて渡したんじゃないか、(坦山)成程々々思ひ出した、己はあの時負つてやつたがモ一とうに下ろしてしまつたんだが、御前さんは未だアノ女を懷に抱いて居るのか、イヤそれは、御苦勞千万といはれたそうじやが一寸面白い問答です、吾々は一體何んの爲めに修行するのだ、總てのものに執着するのが一番悪い負ふ事は實際負ふてやつたり、餘計な口もきいたが皆其場限りで今では胸中に一點の心残りはない、御前は今でも娘に執着して居る位いなら一層一緒に行くことは却て此方から御断りをしたい位いだといふ意味の挨拶であつたので流石の環溪禪師も坦山和尚の一種の警語に感じて仲々御前は旨い事をいふ、それじや一緒に歩いてやらうといつて二人が同行せられたといふ話があります、今日の御互はややもするとつまらぬこと事を腹の中へ貯へて居てどうしても誦らめることが出来ず、それが爲め細なき心を縛り狂げて煩悶の淵に沈むものが多い、商賈に於いて損でもすると其の損をしたのを何時迄も腹の中に貯へてをる、又人に氣に入らぬ事でもいはれるとそれをイツ迄も根にもつて居る人もある、終には精神に異状を來して發狂することもある、それであるから今日の世の中で堂々たる人物中にも精神病を來して發狂錯亂するものがあり、神經病は殆んど近頃の流行の様な有様です、無教育の者が精神錯亂するかといふに寧ろ教育のある人に多い様な風です、又それが爲めに第二の愚痴と謂ふべき精神昏昧の狀を呈して理非善惡の判断をも失つて來る、是れ皆み愚痴の病です、之を誦らむるにはどうすれば宜いか、即ち精神の知識を明白に養ふにはどうすれば宜いかといふに因縁觀に依るのが最も近か道です、元來吾々の全生涯に於ける一切の出来ごと及び天地の間に生存して居る總べての万事万物は必ず原因結果の理法に依つて現はれ且つ變化して行くものである、依て一身の順境に處する運命も逆境に立つ境遇も其他苦樂得失は一として偶然なるものは無い、皆悉く因縁果報の作用である、故に吾々は深く此因縁の道理を觀じてさへ行けば何事も立派に歸

めらるゝものです、既に過ぎ去つた事はスツカリ諦めてしまい、総べて利害得失の由て来る所以の因縁果報の關係を考ひ以て現在及び將來の目的と方法を確立いたせば自ら現在及び將來に向つて益々確實なる精神上の活動が出来る様になります、例へば人から悪口を曰はれた場合の如き悪口を曰はるべき因縁あるを觀じて人を恨みず、唯だ只管我身を顧み、人を咎めずして我が行ひを慎み以後は悪口をいはれぬ様な方法を探るが因縁觀です、故に因縁觀は既往を諦らめて精神を慰安すると共に今後の大活動を現はす源泉となります、然るに一度何かで失敗でもするとイツ迄も諦めることが出来ず益々愚痴を深くして遂には生命を捨てる様な連中も随分多い、愚痴の爲めに貴重なる生命を捨てるなんていふのは全く國家の耻辱といはねばならぬ、日本は外國に比較すると自殺者が多いそうである、平均一年に一万人以上の自殺者が生ずる、殆んど豫算を立てたやうに毎年の自殺率が相似て居るさうだ、其の自殺の原因はどうかといふに其の大半は家庭の不和が主因となつて居る、それから男女の戀愛痴情の果てから情死する、又自分の身體が弱くなつたといふ様なこと、非常な心配をした結果精神に異状を呈したものの、或は財産上の事から氣苦勞した結果さういふ様なこと、等は皆其の原因を究めたならば矢張り愚痴が本になつて居るに違ひない、又彼等の多くは皆諦らめの悪いのも大部分ある、故に能く物事の關係を知りて諦らむる所の良樂は因縁觀である、此の因縁觀が一般に行はれて發達して行くと遂には國民の精神界に一大光明を放つ様になる、尙ほ進んで此因縁觀により宇宙の本質万物生起の原因結果等を究めると今日の西洋哲學者でも宗教學者でも否定することの出来ぬ因縁果報の原則が明かになつて所謂佛教哲學たる大乘佛教の宇宙觀人生觀等となるのです、今日の天台宗や眞言宗其他の諸宗の教理は皆此の因縁觀により發達し組織した結果です、故に此の因縁觀は學理研究上凡ての愚痴を離れしむるに餘程必要な觀法であります、

第四に多數の衆生には數息觀、多數とは心が散亂して落ち着かぬ病です、仕事をしても書物を讀んでも心が落ち着かぬ、従つて昨日と今日とは思想が變つて来る、去年と今年とは方針が變つて始終一定せない、常にウカ／＼して心が定らぬ、から節操も安心も極まらず、何事も成功は出来ぬ、今日御互ひはドも精神の落ち着きが出来にくい爲めに遂には五欲六塵等の欲情に誘惑されて一生涯を煩惱の中に送り大概は此の多數といふ御仲間に入り易いのじや、古歌に

心ころ心迷はす心なり心に心ころゆるすな

といふてある、實に心とはころころの義じや、吾々の心は断れず何處へでも轉が／＼行つて行く、玉の盤に走るが如く彼方へもころ／＼、此方へもころ／＼塗盤の上を球が回轉する様に四方八方へころ／＼まわるからコ、ロじや、クルクルまわるから車、ころころと排入るからトロロといふに同じい、無形なる心が有形なる物と一體となり其の精神の優勢なる作用が物を支配して種々の業を現はし、善にも移れば悪にも移る、少しも油断のならぬは凡夫の心です、此の動き易い心を落ち着かせて大磐石の如く不動なる心に停まらしむるが數息觀で、之れが取りも直さず禪定の端緒であります、數息とは息を數ふことです、此息を數ふるといふ事は禪宗の方では餘りやりませんが極々初心の人を導くには随分宜しい様に思はれます、其方法は入る息と出る息とを合せて一息とし、身體の姿勢を正しくして坐はり、出る息なら出る息ばかり、入る息なら入る息ばかり數へて一息、二た息と一より十に至る、十一となるまで數が多くなつて却て數へる方へ心を奪はれるから、十になれば亦元の二より始めて十に至るのです、之を三回も五回も乃至八九回も十回も繰り返へして息を數へて居ると自ら其生理的作用によりて息が調ふて来る、息が調ふに従つて自然に精神が調ふて泰然不動の状態となる、是れが精神安靜の法じや、之を數息觀と申して眞實の坐禪を修する入口ともなるのです、併し之を段々と練習に練習を重ねる内に散亂の病を療じ盡くして終には息を數へんでも心が調ふ様になる、所謂坐禪の状態に進んで来るに至るのです、マア皆さんが平常何んと無く心が散りて落ち着かぬ時分には夜分寢て居つて宜しいから少々下ッ腹に力を入れ深

呼吸をする様な心持で息を数へる事三四回或は五六回も續けて御覽なさい、終には自ら禪的狀態になつてくる、此の數息觀が段々發達して後には禪宗正傳の坐禪即ち三昧王三昧となつて來るのです、尤も禪宗の坐禪は單に此の數息觀のみの系統によりて發達したのみではありません、其他に種々の教理的關係もありまして餘程深い根據に因るので、幾分此の數息觀が發達し盡せば自ら不思議不思即ち非思量の禪の狀態に入ることが出来るのです、乃ち吾々の煩惱の根本を斷ち切つて天性の膽力を練り、火に入つても焼けず、水に入つても溺れんといふ不動の精神に鍛へ上げ、終には禪の本領たる吾等本來具有の佛心佛性の光りを現はす大悟の境界に自ら進み來るのです、此点より觀ますれば多數の衆生に數息觀といふ消極的禪が今日の大禪定に發達し來る土臺となつてをるといふてもよいのであります、

第五に多障の衆生には念佛觀、多障といふは吾々が世の中にありて種々なる事故や境遇の爲めに障られて爲めに煩悶を來す時は何程精神を安靜にして安心を得やうと思ふても如何しても安靜ならしむる事ができぬものです、所謂境遇逼迫の障礙の爲めに益々自分で自分の精神を苦しめ終には此の身體のれき所さへ無い様になる、今日流行の煩悶などは多くは是れです、平重盛が「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、重盛の進退維に谷まる」といふて父清盛を極諫した如く斯かる場合には如何なる英雄豪傑でも大煩悶に陥るので、さういふ様な場合には何を以て其の煩悶を解脱することが出来るかといふと此の念佛觀こそ實に最上の法門である、その念佛觀とは佛様の御慈悲の深きを念じ、佛様の功德の廣大なるを念じ、佛様の智慧と道徳との勝れた結果等を念ずるのです、譬へば床の間に清き花を挿してあるのを見て何んもなく心地が快く暫しは苦悶を忘るゝ様なものである、況んや万徳圓滿の佛體を信仰の對象として其の慈悲光明を心に觀念し之を信仰する時は實に不可思議の妙味を感ずるのは明らかじや、實に大慈大悲の御姿である佛様の御心は限りなき智慧と限りなき慈愛との結晶體である、故に己れを忘れて佛様を念ずる時は身は自ら佛陀大悲の中に住すること賤が伏屋を離れて金殿玉樓

に移つた様なものです、故に此の念佛觀に依る時はドノ様な辛い苦しい境遇に在つても佛様の大光明に照らされて立ち處に人生の苦悶といふ闇黒の暗を破り此身此儘安心して且つ樂しき境界が得られるのである、茲が宗教の最も味のある所であります、此の念佛觀の發達したのが今日各宗に於ける禮佛及び淨土門に於ける念佛である、念佛にも觀想念佛、觀像念佛、稱名念佛、實相念佛等種々の區別はありますなれど現今淨土門の念佛は主にも稱名念佛を指すのです、即ち佛の本願力を信じて佛の御名號を稱へば善惡男女の凡夫が極樂淨土に往生を遂げるといふ教へど、眞宗の如き偏へに彌陀の本願方に隨順する信心を專要とする他方信心の一念に於て既に極樂淨土の往生を得るは定つてしまふから徒らに口にのみ任せて念佛を唱ふるにも非ず、亦行人の意を勵まして稱名の効果を頼みするにも非ずと説く等である、斯様な風に誠に單純にして入り易く行じ易い信心を先と爲して如實に修行する道理を能く盡くしてあるツマツ吾々が煩悶苦惱の汚れた心を打ち捨て、佛の光明赫々たる大慈大悲の懷の中へソツクリ飯入してしまふのです、譬へば鐵瓶の熱い湯を冷やすには二つの方法がある、一つは其の熱い湯の中へ水を入れ湯をさますと、もう一つは其の鐵瓶を火の上から下ろして置くこと今まで煮へてブツ／＼沸いてをる湯も自然に沈まつて冷へて來るのとす、是等と同じ様に御互の心もそんなものです、種々なる事故や境遇の爲めに束縛せられ苦しめられて自分の精神が煩悶狂亂する場合に何程自分の力を以て静めやうと思ふても容易に其煩悶に打ち勝ちて眞の安心を得られるものでない、其の場合に吾々は自分の身心の煩悶苦惱する鐵瓶を人生以上の最も尊き智力と廣大無邊の徳ある佛様の光明赫々なる慈悲の本願力の中へソツクリ此身を下ろすと同時に自分の腹中の煮へかへる煩悶の中へ信心歡喜の水を注ぎ込むのです、その時には自然と其の煩悶を解脱する効果が現はれます、詩を作る人でもさうだ、心が無茶苦茶してならんといふ時に詩の中へ心を入れると陶然としてその心の苦悶を忘れられる、御茶の好きな人は茶に心を入れ、花の好きな人は花に心移すと心機忽ちに一轉するものです、吾々が佛様を念ずる時には自然に

其の心が安靜に治まつて來るのみならず、信仰の中には必ず一の大希望と精進力とが具はるに依りて自づと高尚なる大理想に向つて向上進歩するやうになる、かうなつて來ると凡ての境遇に打ち勝つことが出來て大丈夫の安心立命が得らるゝのである、これが所謂念佛觀でありまして之れが段々進んで今日の所謂淨土門に於ける念佛、其他各宗に於ける觀佛三昧となつたのであります。

以上御話した通り吾々の心には多貪多瞋等の五通りの病がある、此の心の病が總べての苦しみの本となり佛敎に所謂三界六道生死の根本ともなるから此の病を除くには不淨觀慈悲觀等の五通りの觀念を要するのであります、此等の觀念が段々進んで行けば所謂不淨觀は發達して大解脱の法門となり、慈悲觀は佛陀の大慈大悲の徳となり、因緣觀は佛敎最上の哲理となり、數息觀は禪宗の王三昧、即ち煩惱の根本を斷じて提善の本體を現はす最上乘の禪となる、念佛觀が發達して圓滿なる宗教的大信心と大安心とを得る各宗の大信仰となるのです、而して此の五つのは互に脈絡貫通して居つて不離不即の關係をもつて居る、故に此の五種の觀法を總括して圓滿具足する時は吾々の此身此儘が佛と一軌の功德體となる、乃ち眞の解脱を得れば自から慈悲の源が開けて宇宙の眞理が現はれる、其の眞理を土臺として精神を金剛不動の地に落ち着け佛と吾れと一體に感應道交するといふ宗教的大信心を得るのである、今日の所謂禪といふは禪宗といふ一種の宗派上のことと考へるから何にやら狭い様に思ふが、元來は印度にも支那にも其始めは禪といふ別種なる宗旨は無かつた、日本でも曹洞宗の開祖承陽大師の如きは未だ曾て禪宗といふことを仰しやつた事は無い、禪宗の名稱は後世に至つて附けた名である、元來禪は佛法の究竟した三昧であるから各宗ともに禪を有せざるはない、念佛の上にも念佛三昧若しくは念佛定といふて念佛の究竟した所へゆくと矢張り禪定である、其外天台宗にせよ眞言宗にせよ日蓮宗にせよ各々其宗旨の蘊奥に達すると何れも禪ならざる宗旨は無いのであります、何故ならば禪は佛の心である、佛敎の精神であるからです、さすれば禪は禪宗の禪にあらずして佛敎の禪である、乃ち念佛の中にも禪があれば

題目の中にも禪がある、といふことを御承知を願はねばならぬ、獨り佛敎の禪のみにあらずして宇宙の禪である、之れに關する委しきことは禪の本領といふ題にて次に御話することにいたします。

第二章 禪の本領

此に禪の本領と云ふ題で講演を致します、先づ禪と云ふ意義を一通り話をしてくれなくては必要があらうと思ひます、禪とは禪那と申して印度の詞であります、是に對する翻譯は澤山有ります、其中普通に用ひて居る翻譯は靜慮といふのである、即ち靜に慮るといふのです、これが最も意味が適切であるかと思ふ、原始時代と云ては少しく釋かでないかも知れぬが未だ佛敎の起らない時代に於ける印度にも禪はあつたその頃は禪は極めて消極的なもので、唯だれ互の精神を靜めてゆくと云ふだけが禪の本領で在つたらしい、所が釋尊が始めて尊貴なる御身分を犠牲として出家せられ、俗に申す觀特山に登つて六年の間御修行をなされて遂に世界に比類なき佛敎を開發せられました、其御修行といふのが所謂坐禪で有りました、釋尊は坐禪の力に依て數千年以前に開けた印度の婆羅教徒に於ては未だ嘗て夢にだも知らなかつた一大眞理を發見して遂に世界の大聖人と御成りになつたのです、ここに於て禪が非常なる發達を致して世界無比の法門となつたのであります、此の靜慮といふ文字の意味は甚だ深遠であります、今之を最も解り易く解釋して見やうなれば靜とは大無我の義になる、吾々れ互が我といふものを執する自我的觀念を離れ、己れが我れがと云ふ執着心を離れたのが無我である、尤も只だ己れがと云ふものを無くして丸で死人の如くなつたのを眞の解脱と云ふので無い、昨日も御話申した通り佛の徳は所謂自覺々他覺行圓滿であつて、畢竟自他の間に隔たりの牆壁が取れてしまひ、天地自然の徳なる一體平等の理に合ふたのを眞の無我と云ふのです、故に無我にして始めて大我が現はれる、所謂無我の大我である、然るに凡夫のれ互は兎角この小さい自分と己れと云ふものを中心として自分と他人の間に甚だしき隔てをつけて

居るから我と云ふものが渺たる滄海の一粟にも及ばぬ程極く小さなものになつてしまふ、これが儒道で申すと所謂人欲の私です、即ち私意私情の妄想煩惱であります、此の人欲の私が總ての土壌となりて來るから貪欲をも起し瞋恚をも起し愚痴をも起してこれが欲しい、己れが口惜い、己れには諦めがつけられぬ、己れには承知は出來ぬと云ふように常に私欲私情を中心として種々の煩惱を起し、それからして色々な罪惡を作るのである、ソコで釋尊は第一に此無我と云ふ眞理を發見なされた、而して御自身が徹底その無我の境に證入されたのである、是れが佛陀の清淨法身の根本で道德の基礎であります、次に虚と云ふのは審慮と熟字して審かに思ひ慮ることです、道を究め道を感じ理を照し理に通ずる、即ち照理見道の義である、それであるから虚の一字は正しく大智慧の意味になる、禪は大無我の境界に達して始めて大智慧を發する、大無我の境界に達するが故に天地自然の理に一致する、天地自然の理に一致するが故に公明正大なる大智慧を現はすのです、之を禪門の語句で大死一番大活現成と云ふのであります、ソコで古人の確實なる解釋を引いて説明の證據として置くの必要があらうと思ふ、達磨大師から六代目の祖師を曹溪大師と云ひます、(畧して六祖とも云ふ)、此曹溪大師が壇經といふ本に禪の本義を坐禪の二字に分けて説かれた語がある、

於一切善惡境界。心念不起。名爲坐。内見自性不動。名爲禪。

これは禪の一字の説明を解かり易く坐禪と云ふ二字に割付けて解釋を致されたもので、凡そ天地間に於て自分の相手となるべき外境一切を善と惡との二つに分けて苦樂迷悟等の總てを網羅し、其の善の境界若しくは惡の境界に對して少しも精神を亂さぬ、乃ち大無我となつたのが坐の義になる、坐と云つても唯坐ることばかりじやない、臨濟宗の大徳寺の開山大燈國師の歌に、

坐禪せば四條五條の橋の上往き來の人を深山人にみて

とある如く、吾々は深山幽谷の間に在て寂靜なる樹木の色を眺めたり或は溪流に耳を澄まして不寐の翠

を聞いたりして居ては妄念も執着も起らぬが、丁度その如く京の四條五條といふ様な賑やかな橋の上で多くの人が絡繹として往來する閑しい所に居ても毫末も心念が動揺せぬ、所謂枯木寒巖に倚るの境界だ、之が即ち坐の意味である、されば今日修養に志してござる御方々が各々本分の職務を執て社會に活動するに當ては常に鐵石の如き堅固なる精神を持して縦ひ數万圓の金銀を取扱ひ致さうが、又數万人の人々と複雑なる交際をして行かうが、又如何なる順逆の間に處することがあらうが、少しもその精神が動亂せぬと云ふのが乃ち坐である、吾々の本性は元來不動體であるが、水上の波の如き心念は物に對して始終動搖して止まぬ、吾々の身體とても其實體は不生不滅であるが、因縁和合の相は常に生きたり死んだりして生滅變化を免れぬ、併し唯だ假相の上の變化で元來その實體は不動であるから變化即不變である、佛教に於ては常に體相用の三大を説きます、例へば此水瓶の如き其體は何んで有るかと云ふと土です、土の體には水瓶だの茶碗だのといふ自性は無い、それが或る因縁に依て水瓶とか茶碗とかと云ふ種々の姿が現はれる、これを相と云ふのです、既に相であるから因縁に依りて或は成立し、或は破壊し、或は集り、或は散じ、變化窮り無いのである、水瓶とか茶碗とかと云ふ姿が現はれば必ず之れに應じたる働きを起す之を用と云ひます、用は相に依て發し、相は體に依て現はる、相に於ては生れたり死んだり出來たり壞れたりする變化があつても、體に於ては所謂不改性であるから少しも變化は無い、

雨霰雪や氷とへだつれど落つれば同じ谷川の水

或る因縁に依て暫く雨となり雪となり氷となりなつて其姿は様々に異つても、其本性に至つては同一平等の谷川の水で、決して差別は無い、差別のまゝが即ち平等である、故に吾々の本性は万古不變で、吾々といふ自性も無い、其萬古不變なる自己の本性を徹證してゆく之が禪である、故に禪は自己の本性を發明する大智慧であります、以上述べた如く大智慧と大無我との二つが全く具はらねば本當の禪那と云ふ事にならぬのでございます、併し禪僧が禪を修するに當て多くは此大無我と云ふ境界にのみ力を入れ

て大智慧の方を忽がせにしなければと思はるる弊がある、それでは一隻眼である、能く古今の禪僧を点検して見るとやゝもすると大無我の境界には達しても大智慧を欠いで居る人が多い様に思はるゝ、尤も傳燈録にある祖師杯は兩方完全であるは勿論じやが、然るに今日の禪僧は之れと少しく反對で大智慧の方面に力を入れて大無我の修行が甚だ足らぬ様な感がある、故に見識の高い人でも品行が修まらぬか、立派な學者であつても精神の鍛錬が出来て居らぬとか云ふのは大智慧の一方にのみ進んで大無我の方が出来て居らぬのであるからだ、本當の禪者には必ず兩方が完全して居らにやならん、之を天地の原則の上から申すと動靜の理と云ふ事になる、動とは字の通りうごくこと、靜とはしづまることである、物には必ず動靜二ツの理が具つて居る、水瓶の如きも此通り動きはせぬ、ジツト靜にして居る、靜にして居るから水でもなんでも入れて置かれる、又時に臨んで自在に使はれる、若しこれが動きどうしに動いて居たなら水を入れることも出来ず、使ふことも出来ぬ、動かないのは大活動の基礎となるのである、吾々が道を修養して行くにもまづ退いて己れの精神を靜めて無我の境界に至る之を禪宗では退歩の工夫と云ひます、向へ〜と走り廻る心をジツト後へ引き戻して精神を不動の地に置き大磐石の所へ安住する之を退歩の修行と云ふのである、進む事を知て退く事を知らぬのは徒に其の花のみを愛して其實を忘るゝ様なものです、それであるから禪は禪宗の禪にあらずして天下の禪である、今日國家の精神的文明を發達せしむる上から申せば、吾々國民の精神を開發して完全なる修養をなすべき一番の根柢となるものは則ち禪でなければならぬ、故に佛教各宗共に恐らくは此禪を離れたものは一つも無い、斯様に申しあげると淨土門には禪は無いじやないかと云ふ方もあらうが、淨土門にも天台宗にも眞言宗にも皆禪がある、それを極簡單に話してみると、先づ天台宗には止觀と云ふがある、是が天台宗の禪です止と云ふのは大無我の境界になるのです、觀と云ふのは大智慧の源泉です、眞言宗に禪は有るか無いかと云ふに弘法大師は禪を以て安心の基礎として居られる、弘法大師の性靈集の中に「禪を心と爲す」と仰

られてある、禪は寂黙の法であるから禪黙といふ、その禪を以て我が心とすると云ふが弘法大師の御修行である、殊に高野山と云ふ御山は天子様から賞ひになつて弘法大師が眞言の大道場を開かれたのじやが、是れは修禪の道場として拜領せられたのであります、夫れであるから御自分は言ふに及ばず眞言の御弟子を集めて俱に禪を修し禪を行はれたのです、言ひ換へば高野の御山は専門に禪黙を實踐せられた禪的眞言宗の一大學校であります、若しこれが今日の普通の語で申したならば眞言宗としての禪の専門學校だ、夫れであるから結果を劃して此れより内へは不淨の者を入れない、女人は入れない、結果の道場には女人禁制である、然るに女人は罪障が深いから大師の教化に接することが出来ぬといふ様な考を起したのは大師の大慈悲心に反するのである、女人が女人堂迄は往ても後へ戻らにやならんといふ嚴格なる結果を設けたのは修禪の道場であるからじや、弘法大師は日本國中に眞言秘密の妙法を弘通しやうと云ふ大本願なのである、日本國民の一半は婦人である、其婦人を排斥して大師の慈悲に接せしめぬと云ふ様なソナナ狭量な宗旨では無い、ツマリ禪を行ふべき専門學校であるに依て風紀上實踐上女人の入門を禁制せられたのである、修禪の神聖を保つ爲めなのである、丁度中等教育の學校に於て男女を別にしてをる、女子師範學校には男生徒を入れぬ、男子の學校には女生徒を入れぬのも同じ事でありませぬ、男女の別に於て成佛の權限を定めると云ふ様な事はない筈であります、女人不成佛とか女人を不淨の身とかいふのは方便の説で佛祖の大慈門は本來平等利益であります、それから日蓮宗の上から云つたら如何であるか、日蓮宗に於ける信仰觀念の究竟した所亦た一種の禪である「妙法の心を以て心の妙法に歸す」是れが日蓮宗の安心である、妙法とは題目じや、此題目は諸佛の本源萬徳の源泉である、此妙法の大功德が吾々の心に具はれる妙法の中に歸依するので、此時妙法と一如となる、即ち歸依する心も歸依せらるゝ妙法も圓融妙合だ、さう無ければ法華經の光りも現はれぬ、ツマリ大無我三昧である、佛身は法界に周遍して天地間佛の光明に漏るゝ所は無い、眞理の顯現が佛である、佛は眞理である、學問上

の詞で云ふと所謂無限絶對である、無限にして絶對なる宇宙の大真理と自己と一致して始めて大無我の境界が現はるゝ、其時始めて妙法が全身全地全宇宙に活動する、即ち真理の活動じや、日蓮宗の教義は高尚にして且つ緻密であるが其着する處は「妙法の心を以て心の妙法に歸す」、乃ち心法一體といふが安心の根據である、此心法一體是れ動靜一如の禪であります、それから淨土門の念佛の上に於ても禪がある、請觀音經の中に念佛定と云ふ語がある、禪宗より見れば之が全く禪である、自己の安心妄情を解脱して光明無量壽命無量なる阿彌陀如來の御慈悲の光明の中に飛び込んで自己と佛と一致してしまつた所で始めて念佛宗の大安心が決定する、此安心の端的が即ち禪である、先刻御話した六祖大師の語を標準として禪の本領を究むれば此等も皆な禪といふことが出来る、御念佛を唱ひても念佛定、即ち念佛禪の所迄進んで行かねば本當の安心は現はれぬ、法然上人のね詞に

たとひ一代の法を能く／＼學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、厄入道の無知の輩に同じて知者の振舞をせずし、只一向に念佛すべし

と云ふ所に無限の妙味がある、「たとひ餘事を營むとも念佛を申し／＼之をすることを思ひをなせ、餘事をし念佛すとは思ふべからず」此の中に禪旨は凜然として輝いで居る、或る一人の念佛宗の信者が在て自分の教を受けて居る上人に向て、私は貴師の御教化に依て大分念佛の行がすゝみました、毎日自分の常務を執る上にも念佛、道を歩くにも念佛、茶を飲むにも念佛、算盤を弾くにも念佛、と云ふ具合に何事をするにも念佛を申す様になりました、ソリヤ結構だがモー一と息進んで勵みなさい、賞められるだらうと思つたに賞められん、ソリヤ結構だがモーチツトやりなさいとはどうも解らん、此位寝ても覺めても念佛を申しても未だ十分でないの有りますか、そうじやね前の念佛は阿彌陀様が何つでもお供になつて居る、自分が算盤弾くその後から南無阿彌陀佛が御供をして出て来る、歩く後から南無阿彌陀佛が御供をなさる、いつでも阿彌陀様はね前のね供計りなされてござるでは無いか、それじや本當の御念佛には

ならん、同じ事でも御念佛を唱へながら算盤を弾く、御念佛を唱へながら道を歩く、御念佛を唱へながら茶を飲む、イツもかも此全身が南無阿彌陀佛になりきつて彌陀の光明の中で仕事をしてゆくのである、そうならねば未だ念佛三昧の行者とは云はれんと申された、そうである、今日吾々が道徳的情操の上にしてもそう無ければならん、全身が忠孝仁義の道になりきつて忠孝の心で算盤をはたく、忠孝の志で學問をする、仁義の心で實業を營む、仁義の心で政治を執る、それでなければ眞の道徳とはいはれん、學問をして其力で忠孝を勤め、業務を働いて其力で忠孝を勵むといふ内は何つも忠孝が後から御伴をしてくつついてゆく、その様なことではマダ々々眞の忠孝はできるものでない、佐藤一齋と云ふ幕末の大儒が云はれた、

眞忠は忠を忘る、念々これ忠、眞孝は孝を忘る、念々これ孝、

でなければならぬ、これから孝行をするとか、今度こそは忠義を盡さうとか、今日は佛の命日に依て精進の御靈供でもそなへやう、今日は神の祭日に依て赤飯でもたかう、そんな事では眞實の忠孝、眞實の供養とはいはれん、念々が維れ忠、念々が維れ孝、ならば別に思ひ出した様に孝行をするとか、忠義を盡すとかと云ふ改まつて考を起すの必要も無い位のものじや、思ひ出さずに忘れずにと云ふ様に、断らず吾々の念頭に忠孝仁義の道を置くやうにせねばならん、念佛も亦たその通りで、吾々の精神が始終念佛に成り切る、換言すれば佛の道ご一つになり切つてしまつたのが念佛定であります、法然上人や親鸞上人などは全く此念佛定を立派に得て居られた方です、法然上人は曾て他力往生念佛の法門を唱ひ出したと云ふので、四國の土佐に流され玉ふた、實に壓制な仕方であつた、其時法然上人が云はれたのには、實に有り難い、罪無うして配處の月を觀ると云ふ事があるが、計らず朝恩によつて、四國くんたりの邊鄙に赴き、往生の大事を勤めることの出来ること云ふのは阿彌陀如來様が邊土の衆生に濟度の縁を結ばせ玉ふ御仰にやあらんといふて非常に喜ばれたと申すことじや、親鸞上人も法然上人の御弟子であ

られし爲め、越後の國へ流刑に處せられた、誠に有り難い此身が流されし爲めに、圖らずも越後あたりの邊鄙の人々に我が信心の喜びを分ち、選擇念佛の弘通が出来るといふは、是れ全く師匠法然上人の賜ものであるといふて喜ばれました、是の如きは金剛不壞の信念、即ち火に入っても焼けず、水に入っても濡れぬと云ふ大信仰の活現と云はねばならん、あしかけ五年の間、配所に居られ、終に赦免の御沙汰に逢ひましたから、越後の國を去て常陸の方へ參らんとして越後の柿崎と云ふ處へ迄參られた、今では親鸞上人の御奮蹟として常福寺と云ふ立派な寺がある、其寺の出来ない以前であるから、随分さみしひ海岸の一筋の川があつて、濁流が漲つて居る、仲々容易に渡られん渡るには舟は無し、徒歩渡りするにも深さは解らず、殊に日は西山に沈みて最早暮れかゝつて居る、幸ひ扇屋といふ家があつたから、其家へ一夜の宿を頼まれた、然るに此家の女房といふが邪見な者で、殊に坊さんは大嫌ひだ、そんな方は泊められんと云ふて、ピツタリ斷つたのです、マサカ一宗の開祖とも仰かるゝ様な名僧とも知らないから、どうしても泊めて呉れない、夫れじや庭の隅でもよい、夫れもいけない、それでは軒の下をと云はれると、軒の下迄貸さないと云つたら、あんな坊さんに若しや七代迄も崇られちやならんと思つたでもあらうが、溢々ながら軒下を貸して呉れた、上人は軒下に於て雨に侵されてれいでたが、傍にあつた石をかきよせ、しばしそれを枕として睡らうとしても、吹き荒む五月雨の飛沫、風の吹き廻しで、法衣も何にも皆ズブ濡れとなりて、眠る譯にはゆかぬ、其時上人が思ひなされるには、斯う云ふ處へ一夜の宿を定むると云ふのも深き夙世の因縁でもあらうか、ア、解つた是れは御佛が修行を勵まし下さるゝ御慈悲の御誘いであらう、斯かる處に信心を凝らしてこそ、幾分か古への佛様や祖師方が我等の爲めに難行苦行あそばされた御跡を慕ひ參らすることも出来る、此所の主人は態と斷つて修行を勵まし呉れたのかもしれない、さすれば斷はり呉れしこそ實に有り難けれと云つて、一心に御念佛を唱へて居られた、如何なる悪人に對し

ても逆順に處しても、信心の方はそれを變化するの徳がある、同じ水を飲んでも蛇が飲むと毒になり、牛が飲むと乳になるやうなものだ、そうして上人は益々有り難い々々々々と思ふて感涙を絞つて念佛稱名してござつた、こちらは親鸞上人の斯くも偉大なる信念に感激したと見れば、彼の扇屋の亭主が飛んで出て、上人の手を執て家の中へ御入れ申して、直ぐに焚火をして濡れたる衣を燥かし、且つ上人へ今迄の無禮を御詫を申しあげた、雨に降らるゝの夕べに、宿はなし雨具も無い、それを恨みとも思召さず、却て有り難いといつて喜んでござるなんと云ふは凡人ではない、今迄は佛法に因縁うすき夫婦の者が、とう々々上人の徳に感じて御弟子となり、夫れから後に非常なる大信者になつた、其時の上人の御歌に

柿崎にしふ々々宿をとりければあるじの心熟しとぞなる

一夜の宿はれるか、庭の隅さへも貸さぬと云ふ位で、仲々よつてもつけない程の佛法嫌ひも、上人の信念の力に依て、煩惱が變じて直ぐ菩提となつたのじや、其時の親鸞上人の御心はどんなであつたかと能く考へて見ると、徹底無我大解脱で、身も心も唯々偉大なる信仰に充たされて居つたのじや、信仰の外には何もない、叩かれても有り難い、軒下へ突き出されても有り難い、雨に降られても有り難い、唯だ有り難い々々々々と云ふ遍照法界の佛陀の大光明のみありて、其外には何にも無い、これが親鸞上人の念佛定で、乃ち念佛の上の大禪定です、此念佛定にはいらぬ中は本當の安心は出来ぬ、我が禪宗に於ては如何にして眞實禪那の境界に達するかと云ふに、正身端坐即ち打坐の上から大無我大智慧の境界を現はしてゆくのが禪宗の特色で、且つ専門として居る所であります、併し禪と云ふものは決して獨り禪宗にのみあるべき禪では無くて、佛教全體に通じてその奥座敷に這入て見ると盡く唯一の禪定に歸すべき道理のある事を以上一通り説明を致したのであります、それであるから達摩大師時代には別に禪宗と云ふ一種特別な宗旨は無つた、唯だ釋尊から以心傳心血脈相續して佛法の全體を直傳し來つた祖師方が今の所謂禪宗の祖師であるのである、故に禪宗の祖師にして眞言の教の開祖とも云ふべき又淨土門の

中興の祖師とも稱すべき龍樹菩薩のやうな方もあるのです。ツマリ禪は佛教の大精神を證する法門であるから達摩大師が支那へ御出でになつた時には一經一論をも携へず、空手で御出でにあつた、印度を發する時に荷物は最早トツナリ届いて居るから別に持參には及ばぬ、我れは荷主であるからコレより荷物の取扱方を傳ふるのじやと仰しやつた、要するに佛教全體を一貫したる佛の大精神を悟つてゆくのがこれ禪門の大本領であります、曾て釋尊が印度の靈鷲山に於て、拈華瞬目の大法輪を轉せられた、これが以心傳心の最初の本義です、乃ち釋尊が靈鷲山と云ふ山に御弟子を集めて説法の座に御上りなされた、斯く釋尊が特別に一般を招集して高座に御上りになつたから今日は如何なる稀有の妙法を御説きになるか知らんと思ふて一同目を聳て拜んで居ると、唯だ一本の花をとつて拈しあげあそばされた、之を釋尊の拈華と云ひます、大勢の大衆達は佛が何にをして御のたまはるのであるか、其眞意が少しも解らん、唯だどうなさる事であらうかと不思議そうに見て居つた、サアコ、が吾々の研究すべき所です、釋尊四十余年の其間大乘小乘頓漸半滿と縦横無盡に御説法遊ばされたとは云ひながら未だ佛の悟り玉へし天地間の大眞理に至つては其一小部分だも説明し盡すことが出来ないのである、今日の所有學者先生が舌を爛らして説いたからとても目の上にある眉毛一本の説明でも本當に説き尽すことが出来ぬのです、或る程度迄は説明が出来てもそれ以上は出来ない、實驗推理の及ばる最も根源に至つては矢張り確實には分らぬ、分つて居つても分らぬ所がある、曰く言ひ難しじや、夫れは眞理の本源は不可思議であるからです、故に佛法でも常に不思議と云ふ事を説くが、不思議といふても妖怪や幽霊の事では無い、眞理の根源は人知の及ばざるをいふたのである、世間の學者も亦たト、のつまりといふ處に至ると不可知といふ、即ち不思議と云ふより外は無い、世界は物質より成る、その物質の元素はどんなものであるか、理學者は立派な説明を施すやうになつて來た、併し其所謂元素なる物は何に依て生ずるであらうか、何の意味で生じたであらうか、佛教でも極微分子と云ふことを説き世界萬物は皆此の極く小さい分子から出來る

と云ふてあるが、其又極微分子なるものは何にから生ずるかと問へば、其れは實驗の範圍で無い、假りにそれは天然自然の作用であるといはうか、然らば其天然自然のはたらきとはどう云ふ譯であらうか、斯くせんじツメて見ると、到頭しまいにはそれは解らん、即不可知的じやと云ふ事になる、實驗の範圍外は到底現今の人知では及ばざる所であるから學問といふものゝごんづまりはマアこんなものであらうかと假りに定めて置くに過ぎぬ、即ち假定である、或はモット人智が進んだならば今日で不可知といふことも立派に説明の出来る時節があるかも知れんが、併し山に上るも天の在るありて、進んでも々々々々矢張り先方に解らぬものがあるに相違ない、吾々の心これは誰れでも持て居る、この心と云ふものが分らん、心理現象は説明も出來やうが、心體といふと矢張假定である、神經作用に依て色々のはたらきを現はして居る心、これは有ることは有るに相違ないが精神現象以外に心の本體を認めるといふ事は出來ぬ、天下の心理學者が集つても現在の心理學說以上になるとハツキリとは解らん、して見るとどうしても結局は解らんと云ふのが正直なのである、これは自覺に待つより外に仕方は無い、釋尊が之れ迄汗を絞つて御説法を遊ばされても不可思議の妙處は冷暖自知じや、言語道斷じや、されば今迄の説法は証悟の道中記であつた、都へ行く道中記を諳んじても都に至つたとは許されぬ、到底説明の及ばざる不可思議の眞理の本體を見んと要すや、眞理は遠きに求むべからず、此一本の華を見よ、一本の華は實に是れ宇宙の眞理であるぞ、と云ふ御旨意で華を拈せられたものと見ゆる、サア八萬の大衆は何がなにやらサツパリ解らぬ、所が迦葉尊者と云ふ一番高弟の御方が獨りズツと立て、破顔微笑と云ふて、ニツコリと御笑になりました、今日は有り難い、説法や説明以上の説明を聞き申したと口には云はねどニツコリと笑つて應せられた、迦葉尊者は愉快で々々々々たまらなかつたと見えて笑はれた、すると釋尊が我れに無上の佛法あり今日摩訶迦葉に附屬すと、仰せられて所謂佛法の財産相續人を定められた、之を以心傳心の法と云ひます、斯くの如く以心傳心に依て相續し來り迦葉尊者を第一祖として二十八代目が達摩大師

である此達摩大師が支那に來りて法を傳へられ、其の六代目の祖師曹溪大師の下に青原と南岳との二大禪師が出た、青原禪師より五代目に洞山大師と云ふがある、此洞山の門流が曹溪洞山二大師の名を取て曹洞宗と稱した、又南岳禪師より五代目を臨濟禪師と云ふ此門下が臨濟宗と稱するやうになつた、洞山大師と臨濟禪師は何れも其當時の禪門に於ける獨歩の大人物であつたから、洞山の門に入らねば臨濟、臨濟の門に入らねば洞山と云ふやうに天下の僧侶が殆んど此二人の御方の門に入らぬ者は無いと云ふ位に勢力があつた、此外に僞仰宗、雲門宗、法眼宗といふがあつて併せて五家と稱したが、今は略して置きます、我國では京都の建仁寺開山榮西禪師は臨濟派の法を傳へて歸られた、越前永平寺の開山道元禪師は曹洞派の禪を傳へて歸朝せられた、日本では此の臨濟曹洞の二宗だけが傳はつたのであります、其後支那の明の世の末に臨濟宗の傑僧隱元禪師が明清の戦亂を避けて日本へ來られた、徳川家綱將軍が非常に歸依をせられ、且つ後水尾上皇も深く道風を愛でさせられて道俗競ふて風に趨るといふ有様であつた、將軍の上意で山城の宇治の黄蘗山萬壽寺を建立して開山となられた、本より臨濟系統の方なれど山號に因んで其門流を黄蘗宗と稱するに至つたのである、我國には斯く禪に三宗ありと雖も其宗趣は一如にて二致は無い、唯だ宗乘の取り扱ひ振り、接得の手段、修行の方式等に多少の變異あるに過ぬ、明治の初年には政府の方でも臨濟曹洞黄蘗之を合併して一の禪宗としてあつたが、どうも本山が各々別であり系統も歴史も夫れ々々特殊の點もあり、且つ多少宗旨の儀式も異つて居る所から明治七年に至て又三派に分けたのであります、曹洞宗の宗祖は道元禪師承陽大師で、即ち越前永平寺の御開山です、夫から四代目が靈山紹瑾禪師常濟大師で能登の總持寺の御開山です、此御方は後醍醐天皇の御歸依を得て陛下より十ヶ條の教問に答へられたのが大層教旨に叶つたと云ふ所から賜紫出世の道場と云ふ教額を賜はりて大本山と成つた、之に依て越前の永平寺と、能登の總持寺とを曹洞宗の兩大本山と唱へて居ります、本山は二つであつても一宗一派管長は一人、兩山一體と云ふ制度になつて居ります、臨濟宗は數多の獨

立した本山があつて各別に管長を置き各別に宗制が布かれて居る、乃ち妙心寺派、建仁寺派、南禪寺派、相國寺派、建長寺派、圓覺寺派等十四派に分れて居ります、斯く曹洞、臨濟、黄蘗と云ふ様に單に系統の相違から宗門が別々になつて居る、併し歲月の久しき自づと參禪の仕方や禪機の鍊磨修行の方式等に多少相違があつて一長一短を免れませぬ、其根本に至ては寸毫も異なる所は無いのである、以上は禪の本領と宗旨傳來の系統談の大畧で有ります、要するに禪の本領はツマリ佛教全體を一團として其中に籠て居る所の佛陀の大精神を明め、そうして自己本具の心地上に佛教の精神を顯現して即心即佛の妙境界を實現するのが禪宗の所謂見性悟道と云ふのである、されば禪は外の佛教各宗派の教義を離れて別にあるのでは無い、唯だ佛教各宗派を一貫したる釋尊の統一的佛心を悟るのが禪であります、

第三章 禪の信仰

これより禪の信仰に就て御話致します、禪宗は兎角修證、即ち實修と大悟と云ふ事を重んずる所から、動もすると信仰を輕んずはせぬかと思はる、恐れがあります、信仰よりも禪機に重きを置く傾向があります、信仰と禪機とは離れぬものなれど、何となく別な物になりたがつて困まる、例せば臨濟和尚が師匠の黄蘗に向て如何なるか是れ佛法的々の大意を問ふた際に黄蘗は一言半句の答話もなくゆきなり三十棒を與へられた、臨濟は佛法の大意を質問したのであるから諄々と説明をして下さるのが當り前であると思ひしに黄蘗が頂上より三十棒を與へた、是れが却て大慈大悲の手段である、斯ういふふうにも最も奇特な且つ極はめて峻烈なる接得の仕方であるから、禪宗の教育法は一種特別で有ります、併し善知識は機を鑑みるの明がある、一棒一喝でも決して亂りにはせられぬ、表面から見ると唯だ知見をのみ重んずる様に思はれる處から、事に依ると至誠眞實に濃い感涙を流して佛の功德を喜ぶと云ふ様な信仰心が薄らぎはせぬかといふ恐れがある、所が禪門は寧ろ一層信仰の程度が深い位である、若し信仰が無けれ

ば縦ひ禪を修行したとしても唯だ是れ一種の學問たるに過ぎない、宗教としての價値は殆んど無くなつて、哲學を研究するのも同様になつてしまふ。「佛法の大海は信を以て能入と爲す」ともいひて佛教はどうしても信仰と云ふものを土臺としてゆかねばなりません、依つて今は禪の信仰に關する大要を御話致さうと思ふ、大體信といふ字の意義に就ては何う云ふ解釋をして居るか云ふと、唯議論には「心淨を性となす」といふてある、心淨らかなるといふ其の淨らかとは虚偽を離れ、私情私意を離れ、偏頗なる量見を離るゝをいふのである、字書にマコトと訓じてあるのがそれじや、それ故に信仰心を發せんと欲せば、第一に退て精神を淨らかにして中正穩健の心を持たねばなりません、少しでも蟻りが在つたり、虚偽りが有ては佛を信仰したからとて何等の効果も無い、又次に信は不疑なりと註してある、不疑とは疑はぬこと、人と人との關係に於ても肝膽相照らして互に相疑はぬと云ふのが家庭和合の本であり、又社會交際の源であります、併し心淨らかならざれば不疑の信は現はれぬ、内に心を淨ふし外疑惑の念ないのが、これが信の字の意義である、モ一少しく信のことを説明すれば、大別して二ツの方面がある、一には倫理的の信、即ち人間普通道德上の信です、之を分解すると又二ツに分れます、一には自己が自己に向つて信を守る、例へば忠臣孝子の如きは忠孝の道を固く信じ、此の道の爲めに一身の私を犠牲として厭はぬ、故に能く其道を守ることが出来る、楠正成公の如きは一身を擧げて忠義の道に捧げ、ただ其身は湊川の露と消れてしまつても、道を求めて道を得たのであるから毫も遺憾とする所は無い、又我國の軍人諸君が日清日露の戦役に於て危険なる戦場に臨んだ場合に於ても唯だ 天皇陛下の大御心を奉體して義勇公に奉ずると云ふ本分の大道を確信する事深きが故に、彈丸雨の如くに降る處をも辭せずして能く其の任務を盡された、斯様なものは皆な自ら自己の志に向つて鐵石の如き大信仰を注いだので、所謂自信力である、學者は學問の爲めに身を捧げて學理に反したことは一步も枉げぬが學者の信仰です、事業家ならば自己の事業に向つて一大信仰を持って居る、即ち己れの志しを自ら堅く信じ、自分の施行す

る事柄に對する結果を豫想し、斷々乎として勤勉力行して行く、是れ皆な自信力です、此の自信力が乏しかつたなら何事を爲しても到底成功を見ることは出来ないと云ふ事は勿論である、今一ツは自己と人との關係に於ける信で有ります、親子の間、夫婦の間、兄弟の間、互に相信用し合ふて行くのである、其他社會一般の人に對する上でも自分は他人を信じて疑はず、他人は自分を信じて疑はぬ、是れが實際の基なり平和の母なり融通の資です、併し前にも申した如く心淨きを性となすので即ち此精神を淨らかにせねば信の徳を確實にする事が出来ぬ、此方は如何に正直であつても向ふの相手が不正直であつては不疑の信は起らぬ、向ふはどんなに正直な人であつても、此方が不正直では矢張り他の信用を受けることは出来ぬ、双方共に精神を淨らかにして始めて自分と人との關係上毫も詐偽虚妄等は起らぬ、此の病が無ければ必ずや家庭も圓滿に治まつて行くに相違ない、社會も安全に治まつて行くに相違ない、然れば信の一字は家庭及び社會文明の根底となるのであります、曾に家庭や社會を圓滿にするの根本たるのみならず世の中の有らゆる事業の本も皆な之れに依て定まり人間幸福の基礎も備はるので有ります、ツマリ自信力の強い乃ち自ら正しき信仰を有して居る人で無ければ自己と人との關係に就ても本當の信義道徳を實現することは難いのである、天皇陛下は戊申の御詔書に於て「忠實業に服し勤儉産を治め惟れ信惟れ義醇厚俗をなす」と仰せられ中にも信義の二字に力を入れて御示し下されてある、之れはマア倫理的の信で有ります、それから更に宗教、即ち佛教上の信仰は何うかと云ふに、先づ吾々の境界如何と願みれば甚だ微力なものであつて、到底獨立して安んずることの出来るものではない、其身も其心も渺たる滄海の一粟、天地の大より眺めて見ると極めて小さなもので、吾々の肉體とても其壽命は夢幻泡影の如く、其方も限りがあつて、實に微々たるものです、而して其の精神作用は何うかと云ふと、善心生じ難く、妄念は起り易く、智といひ、徳といひ、何れも不完全千萬なものである、昔支那の唐朝時代に白樂天と云ふ有名な學者があつて、杭州の刺史を勤めて居られた、其地に道林禪師と云ふ禪宗の名僧が

あつた、後に白樂天の師匠となつた人です、此人は一名鳥窠和尚とも稱した、それは自分の寺の庭に長松の盤屈して蓋の如くになり、中間に又を生じて居る、師は其又の上に入り鳥が窠をかけた様に何つも坐禪をして居られた、そこで人が呼んで鳥の窠和尚と稱號をつけたのである、兎に角天下の大善知識あると芳名四方に名高かつたから白樂天がそれを聞いて、自分は支那四百餘州に於て第一等の人物だと自ら任じて居る、我れと肩を併べる者は恐らくは道林和尚一人だらう、彼は禪僧として獨り名譽を擅にして居る、依て彼の頭をひとつ抑へさへすれば己れはまう天下に敵なしだ、ひとつ往てやつつてやらうと思ふて、道林禪師の處へ駕を枉げて面會を求めた、取次の者が和尚は唯今庭前に於て坐禪をして居られるから此方へ呼びませうかと曰へば、白樂天はイヤ呼ぶには及ばん此方より參るであらうと云ふて老松の下へ往て之を見た、噂に違はぬ、成程鳥窠和尚であるわいと思ふて見て居る、道林和尚はそんな事とは知らず、老松の上で坐禪をしながら心持よく居睡りをして居られた、一丈も高い處でしかも木の又で居睡りをするなんと云ふは實に危険なことである、尤も居睡りをして禪宗の坊さんは禪坐法に依りて足を組んで居るから顛覆はせぬが、白樂天之を見て思はず知らず「危い哉々々々」あぶない々々々と聲を掛けた、禪師は其聲に目を醒して見ると立派な官員が多くの家來を連れて樹の下に列んで居る、ただならぬ服装を見てハ、これは白樂天と云ふ近頃來た知事さんで有るなと云ふ事が分つたから、禪師も亦た樹の上から「危い哉々々々」と云ふた、下からも危い哉上からも危い哉、尤で危い哉の掛合ひが始つた、すると白樂天が「某は頭に青天を戴き、足に大地を踏む、加之位亦た江山を鎮す、何んの危きことか之れあらん」と斯う云つた、尤で喧嘩腰じや、然るに御前さんはそんな高い所に上り、而かも居睡りをして居るから危いと云つたのだ、禪師はニッコリ笑ひながら、「薪火相交る、識浪停らず、險ならざるを得ん乎、」と曰はれた、乃ち山程積んだ薪でも火をかけたら直ぐに燃ゆるのでは無いか、其火といふは人生無常の火じや、無常の猛火は晝より夜に至るまで吾々の身に接觸して居るではないか、縦ひ如

何なる名譽ある位地に立ち、堅固に活動して居らうとも、決して永久の安心は無い、盛なる者も忽ちに衰へ、生あるものは必ず死あり、死して何れの處にか行く、是れ亦た凡夫智の能く知る所でない、殊に貴公は天下の學者で而も一縣の政治を取り扱つて居られるが、一人貪戾なれば一國亂を起す、上の好む所でこれより甚しきは無し、貴公の一行は實に一國の治亂興廢にも關して居る、而して凡夫の悲しさは動もすれば煩惱に縛せられ、外境に轉せらる、貴公の精神は果して如何、恐らくはグラ／＼して波浪の起滅停まらざるが如くならん、或は名譽に迷ひ、或は利に走り、名利の巷に奔馳して、自ら苦しんで居りはせぬか、名を得んと欲して而して名を得ず、利を得んと欲して而して利を得ず、爲めに自ら煩悶の淵に陥り、無明の暗に迷ふのが、惡ての人間の狀態である、宗教家の目から之を見れば實に貴公方の地位境遇は危険千萬である、薄氷を踏むが如く、深淵に臨むよりもまだ危いではないかといふ意味の挨拶じや、白樂天も驚いた、どうも口の達者な和尚もあつたものだ、豪い事を云ふわいと思つたから、更に語を改めて「如何なるか是れ佛法の大意」と問ふた、乃ち某は禪師と討論に來たのではない、佛法には無量の法門がありと聞いてをるが、その大體の主意は何處にあるか、餘り法門の名目や宗旨の數が多いから迷ひ易いにより釋尊一代の説法の歸着する所を一口に云つて下さいと請ふた、ソコで道林禪師の答に「諸惡莫作衆善奉行」惡い事をするな、善い事をせよ、惡い事を徹底禁止せば大解脱を得る、善い事を徹底行じ尽くせば大智慧を得る、極樂往生は何んの爲めかと云ふと惡い世界を離れて善い世界に赴き、惡い身體を脱して善い身體を得るのじや、ツマる所此外には無い禪宗の坐禪はなんの爲めかと云ふと煩惱を解脱して大菩提を證得する、迷妄を離れて悟を開く、ツマリ惡を離れて善を行ふと云ふの外は無い、佛法八万の法門も諸惡莫作衆善奉行に歸するぞと答へられた、ソコで白樂天は口を開いて大に笑ひ「佛法若し斯くの如くならば三歳の孩兒も尙之を諳んず」と曰つた、そんな事が佛法ならば憚りながら三ツ兒でも知て居る、禪師はビクトモしない、「三歳の孩兒之を諳んずと雖も、八十の老翁も之を行ふ

こと難し」と答へられた、眞箇の大安心と云ふものは必ずしも既に成つた佛教の力を借らなければならぬものではない、佛教とは釋尊の佛教でも佛教家の佛教でも無い、天地間の眞理じや、哲學者なら哲學と云ふものの上に於ても徹底研究し盡くして天地の大眞理に逢へば必ず佛教的大信念が起るべき譯である、唯だ之を一種の學問として知的一方で研究した分では固より信念は起りまいが、單に冷かに學問とせずして研め去り研め來つて天地の眞理に接觸しソコに大なる確信を決定し、更に自分の温き情緒を開發しこの哲學的確信を以て自己の進退動靜を左右し得ると云ふ事になつたならば是れ則ち本具の佛教が現はるのである、此に一種の信仰が現はれて或は眞箇の大安心が出来まいものでも無い、併しその様な事を以て吾々安心の標準としたならば全世界十五億萬人の上に於て十五億万分之一だも安心を得る人はあるまい、是れ宗教の人生に缺ぐべからざる所以である、宗教的指導に従へばよしや一文不知の尼入道なりとも、聖人君子英雄豪傑にも耻ぢざる程の立派な安心を得られ、健全なる覺悟を定めることが出来る、宗教なるものは學者の爲めに主にも設けたのでは無い、人間の情操の底に宗教的要素があるのであるから智恵利鈍を問はず皆眞正の大安心を得せしめ世界人類の幸福を増進するのが宗教である、ソコなら學者には不必要かといふに決してそうでは無い、前に申した如く、學問の力で大安心を得る人は少くないから佛教より見れば天下の學者も智者も皆な凡夫癡暗の御仲間じや、日本で云ふと三井岩崎と云ふ様な方が一番財産家であるから、衣食住は申すに及ばず何に一つ不足は無い、別荘もあれば娛樂場もある、併し是等は特別な資産家でなければ出来ぬ、普通の人が皆な三井岩崎の様な眞似をしやうとしても出来ないのです、それと同じことで拔羣の學者がよしや學問の力に依りて安心が出来たとしても、一般の人を律することは出来ぬ、況んや學問の力のみでは拔羣の學者と雖も眞の安心は得られぬ、よし得られたとしてもその安心には希望もなく、前途の光明も無い、ツマリ死安心である、佛教はいかなる人にも極く分り易い教を以て永久不滅の大信仰を與へるのである、その信仰力に依て喜び樂しみ乍ら惡

を離れ善を行ひ、現在の穢れの多き危険な人生を快樂無窮なる御淨土に改善して行くのが佛教の目的であります、ソコデ白樂天は中心より大に感服して遂に道林禪師の弟子となられたのです、普通の人なら一言で心服することも六かしかろうが流石は白樂天一言の下に解つた、丁度大相撲をとる様なもので、一番勝負じや、下手な相撲であると、軀中が土だらけになつても未だ勝負がつかんが、上根上機の者は一刀兩断です、故に唐朝時代の文人なり詩人としては白樂天が一番禪味に富んで居る、此人が避暑の詩を作てあるが、どうも面白い、ツマリ禪的避暑である、禪宗の和尚で恒寂と云ふ人の室中の壁に題したる詩であります、

人々避暑走如狂。獨有禪師不出房。可是禪房無熱到。但能心靜便身涼。

是は恒寂和尚の境界を見破りて自己の修養を表白した詩で有ります、今日の吾々とても避暑の根本義をコ、に据て置かねばなるまいと思ふ、俳句にもある、

來て見れば森には森の暑さ哉、

東京あたりから炎暑に堪へず箱根なんぞへ逃げて行いて却て暑に當てられ霍亂して歸て來る人杯が澤山ある、別荘へ病氣を作りにいづたり、海岸にクタビレまふけに往く連中も少なくない、但能く心靜かなれば便ち身涼しじや、所謂禪的避暑でなければ眞の避暑にはならぬ、ダガ心を静めて禪の妙處に入るには是非佛の教を有り難いと信じ、祖師の教訓に感激の涙を洒ぐ程の信念が無ければならぬ、薪火相交はり識浪停らざる凡夫に在りては是非精神の根據地を作らねばならぬ、それには徹底有り難いと云ふ一の確固たる本尊様が必要である、私が講演をするにも此水が無かつたならば一時間の御話しを繼續する事すら頗る困難である、演説には水が力である、今回の講習會を開くと云つても此講堂が無つたならば出來ない、講習會には此會場が大なる力である、斯様に吾々は何にか頼る處が無いと安心も獨立も出来ぬ、吾々の生立を見てもらうじや、初めは母の懷に抱かれ、稍長ずるに及んで師友の教育を受け、更に社會

の恩恵に浴し、そうして始めて一人前の者と爲ることが出来たのじや、然るにそれをも思はず、私は獨立獨行で他人の世話にはならん杯と云ふたならば大間違です、昔し東京に孝行酒屋と云ふ雑名をとつた酒屋がありました、此家の主人はもと捨子であつたさうじやが、或る人に拾はれ幼少の時から丁稚奉公杯をして到頭淺草で立派な酒屋を開業する様になつた、所が或時一人の老婦人が尋ねて来た、乞食同様な姿で憐れな風彩で、恐るゝ入つて来り妾は御身の母である、御身の父親は御身が生れると間もなく死なれ、女の手一つでどうしても養育する事が出来ず、已む無く涙ながら御身を捨てたのじやが、其の時の悲しさは忘れられぬ、幸に御身の成長を陰にてながめ居たが、今更ら妾は母なるぞといふて名乗るべき顔もなければ、追々に年老いて誰れに頼らんやうも無く、耻かし乍ら參つたのじや、昔の事を思へば腹も立つであらうが、どうか勘辨して妾を養ふて呉れよと、涙ながらに頼みました、酒屋の亭主之を聞いて、私の御母さんと云ふ證據も無い事であるが、ヨモヤ偽りははいはれまい、併し縦ひ私の母親にせよ、我子を見捨てるは我子を殺すも同然であるから、マウ親子の因縁は切れて居る、若し拾ひ手が無ければ私は死んでしまつたであらう、して見れば御前は子殺しだ、親と云ても親でないから、必ずれ前は私の親だと思つちやならん、折角来た者を追ひ返へす譯にもいかねば、私は唯だ奉公人を置いた積りで養つただけはやるからその積りで居るがよいと、堅く申し渡して母親を置いてやつた、それから丸で下女同様に使ふた、随分亂暴な話だ、母親は自分の身から出たサビだと思ひ明らかめ、涙を飲んで我慢をしてコキ使はれて居たが、何分親を召使ひ同様にして居ると云ふ所から近處の評判が激しいので、到頭酒屋の亭主は町内の自身番へ喚び出された、役人が亭主に向てれ前は親を虐待するといふ噂じやが全く左様か、イヤあれは私の親にして親では有りません、私があれを使つて置くのは全く私の慈善です、其譯はかやう々々の次第ゆゑ、本より親としての恩を受けた事は無いのでありますと答へた、ソコで役人はハハア無教育の爲めに親の恩といふ事を知らずに居るものと見へると思ふたから、夫れじやれ前は親の

世話には少しもならんのであるな、左すれば誰れの御蔭で今日の身分に成つた、ハイ私は此腕一本の御蔭で働き出したのであります、然らば貴様は其腕より外に誰の世話にもならぬと申すか、ハイ左様であります、此腕より外に世話になつた者はありません、それは洵に結構な腕を持って居て仕合せ者じや、そのやうな結構なる腕は一體誰れから貰つたのじや、ハイ………、(役人)ハイじやない誰れから貰つた(酒屋)ハイ何うも自然に軀に附て居る様であります、能う考へて見ると矢張りれ母さんから貰つた様な氣が致します、(役人)氣がするもせぬも無い貴様をして今日の身分に至らしめたる大恩人とも謂つべき結構な最も大切な腕は即ち母親の賜物であるぞどうじや、是を聞て始めて目が覺めたやうにれ役人様飛んだ事をしました、今迄はトンと考へ違ひをして居りました、早くそうと知つたなら疾うから親孝行をするのであります、サア大變一年計り親孝行を仕損つた、親孝行の借金が溜つた、是からは孝行の借金なしをせねばなりませんと云つて、大急ぎで役所を飛び出して家に歸り、大聲でれ母さんと呼んで、母の手を執つて上座に直し、自分は下にさがつて頭を下げ、此の私の二本の腕は矢張りれ母さんが下すつたでありますか、母親はナニガナニやら一向解らず、挨拶もせず魂消て居る、さうだ々々二本の腕どころか身體中がみんなれ母さんが産んで下されたじや、それとも知らず今日までの不孝の段、偏へにも稀れなる親孝行をした爲め、世間からは孝行酒屋と云はれる様に成つたさうであります、總て人はどんな人でも恩分を蒙むらぬ者は無い、父母の恩、國王の恩、衆生即ち社會の恩、三寶の恩、是を佛教では四恩といひます、此の四恩に依て吾々は人間として社會に立ち、又今生後世の安心をも得るのでございます、その中前の三恩は世間の恩、後の一恩は出世間の恩です、而して現世の肉體の根本は親の恩であるが、國家の上では 天皇陛下の御恩、社會の恩恵は衆生恩です、吾々の精神を指導し未來永久の幸福を得せしめ玉ふのが佛の恩であります、親の大恩も、御國の御恩も世間的の恩恵であるから、此身

を捨て此世を去りし後までは届かぬ、獨り佛恩のみあつて盡未來際無窮である、その無窮の恩分の主體こそ吾々の信仰の對象目當てである、モ一少しく委しく云へば信仰の對象を唯議論等によりて大別すれば三つある、第一が實有です、是は即ち宇宙の實在の眞理である、第二が有徳、これが佛である、第三が有能、これが法に當ります、實有とは永久不變の眞理である、吾々は信仰の基礎を此の永久不變の眞理の上に置かねばならぬ、併し實有實在の眞理は無形であるからそれにのみたよると云ふても頼るべき標準が定めにくい、例へば忠孝の道と云ふても、何にか人格的に表現した者が無くては忠孝の觀念を固める事は難い、何せなれば忠孝の名前だけでは一種の空論に流るゝからである、故に君又は親といふが忠孝の道に對する表現です、永久不變の實有なる眞理の代表者としてはその眞理に合同一致したる大徳を具有したものを信する、乃ちろの大眞理が人格上に一の功德聚と成つて現はれたのが有徳で、是れ即ち佛である、所が其佛様も既に過去世に現はれた御方であつて、今日は拜まれぬ、よしや今日現に極樂世界等に在すとすも、肉眼では拜まれぬ、故に現實に活動して行く有能の體を要する、ツマリ法と僧とが有能の代表じや、されば三寶を立て、法と徳とを以て信仰の對象とするのである、總て佛教に多數の宗派ありと雖も、その信仰の對象となるべきものは此の三つを離れませぬ、廣き意味でいへば外教の上から見ても此三つを離れない、實有の信仰に就ての適切なる教は曹洞宗の宗祖承陽大師が

佛道を信する者はまづ自己を信せよ

と仰せられたのである、天地同根萬物一體なる天地の眞理妙徳は自己心中に具へて居る、故に自己方寸の中に向つて天地の大道を究め、そを究め盡して見れば我等は實に是れ佛である、我等の全身は妙道の姿である、我等は決して凡夫でも無い、外道でもない、萬徳を圓滿に具足せる立派な佛である、神であることを信せねばならぬ、併し我等は實際に於て萬徳どころか一徳も無い、夫れ故に第二には有徳を信するるのである、佛様は眞理の權化である、吾々の身にとつては未來永久の父なり母なりである、殊に廣

大なる悲願は千方を覆ふて漏さず、無限の大慈は三世に涉つて息むこと無い、斯かる佛様の願力徳力に向つて信仰して行くのである、此信仰の力は能く五通りの徳を現はす、第一には大歡喜の念を生ずる、第二には不良な心を自ら抑制するの力を生ずる、即ち神様が見てござる佛様が見てござると云ふ觀念は知らず、吾々の邪念を抑制するの徳がある、第三には將來に對するの希望が遠大にして鞏固となる、現世一代に限るやうな小さな希望でない、縱ひ此身は朽るとも生き替り死に替り國の爲め衆生の爲め道の爲に盡くさうと云ふ生々世々に涉れる大希望を持つ様になる、第四には信仰力に依て道徳の根底が確立する、道徳は人の爲め名の爲め利の爲めにするので無い、自己本性の智徳顯現である、恰も泉の混々として自づと湧き出るが如く、自己の中心より無限に道徳行爲を現はすから道徳に根據がある、根據ある道徳は枯渴する事が無い、第五に信念の力は平常底常に反省力を増進する、普通人間の欲望以外に於て自ら願みて我が心に疾ましき所は無いか、行爲の上に不正なる點は無いかと始終反省して行く力を具へて来る、禮讚文にも有る通り

自ら佛に歸依したてまつる、當に願くは衆生と、もに大道を體解して無上意を發さん、自ら法に歸依したてまつる、當に願くは衆生とともに深く經藏に入りて智慧海の如くならん、自ら僧に歸依したてまつる、當に願くは衆生とともに大衆を統理して一切無礙ならん、

これは佛法僧の三寶に歸依し奉る上の發願回向です、まづ佛に歸依し奉り、次に法に歸依し奉り、僧に歸依し奉る上には更に自己一身の希望を存せぬ、衆生と共に此功德を共有するを念としますので、此中僧と云ふは印度の語で詳かには僧伽耶といひます、此に和合衆と翻譯致します、佛弟子相集つて同じく道を行ひ徳を修めて相争はざるの謂である、天皇陛下の勅語に億兆心を一にすと仰せられてあるが之が和合衆です、和合團結の力で無ければ日本の國力を鞏固に充實し發展せしむる事は出来ない、和合の徳を基礎として道を修するのが僧侶の本分です、御袈裟といふものは其和合の徳を表したのである、御覽

の通り長いきれ短いきれ太いきれ小さいきれ色々のきれを集めて一枚の袈裟に成つて居る、十人十色の人々が相依て幸福を興にし目的を同ふしていくが丁度この袈裟の如くでなければならぬ、家を建築するものも亦た同じで、柱もあれば棟もある、天井板もあれば、牀板もある、色々の材料が集つて斯う云ふ一箇の大講堂が出来て居る、天井板は上に居るからとて別に高慢もせず、土臺石は棟の下の力持ちだからとて別段に不平も訴へぬ、形を殊にし作用を同ふせざる種々の材料が集つて大講堂と云ふ一つの和合の大精神が現れて居る、家庭の上でもさうである、親有り子あり夫もあり妻もあり、兄弟もあれば弟妹もある、互に相依り相集て和合して居ればこそ一つの家庭がつくられてある、而して其中には酒を飲む人もあり、餅の好きな人もある、烟草を吸ふ者もあれば嫌ひな人もある、御互の勝手をいふたならば一日でも家庭を維持することが出来ぬ、然るに夫れが互に和合して居ればこそ同じ釜の御飯を喰べて老人も子供も皆な満足する、同じれつゆの汁を吸ふて一同が満足する、それでこそ一軒の家が鞏固なる實力を充たして居る、これが僧寶の徳です、此の佛法僧の三寶は本來吾々の具有して即心是佛の徳の發現に外ならぬ、故に之れを信仰するときは其信仰の徳がやがて自性の三寶を現はすこととなる、乃ち心の三寶を以て三寶の心に歸するのじや、之を「入我我入」と云ひます、吾々は最も神聖且つ善良にして又最も氣高い所の宇宙間の一大真理に一致融合して其天地の大徳を以て自己の妙徳として信仰するのであるから吾人の信仰の對象とする所のものは最も完全なるものを撰ばねばなりません、俗言に朱に交れば赤くなる云ふが如く、山の嵯峨たるを見れば自然に氣高い所の心が起る、海の浩渺たるを見れば自然に深遠なる心が起る、乃ち境遇と對象とに依りて精神状態に變化を來たすものである、教育者の所謂薰陶性といふも同一の理から出である、不良なる少年でも之を指導し薰陶する方法如何に依りては善良なる者となるものじや、信仰も亦た最も強大なる感化力を有して居る、「トルヌストイ伯」が「信仰は精神の方向轉換なり」と云ふたが、宗教的信仰は今迄悪い方向に在りし精神を善い方向に轉換せしめ、益々善良にし

五〇

て且つ氣高い理想に向て進歩せしめるものであります、所が信仰それ自身が何程眞實至誠であつても之れが對象となるべきものが龜末であつたり偽せ物であつたりしては効果は無い、之れを四句に分列すれば境妄心眞と云ふ、次には境眞心妄と云ふて向の對象たる神佛は完全であつても信仰する此方の心が私欲私情より出て居るの類である、東京杯でも深川の不動尊とか淺草の觀音に參詣して私は盗みをしたがそれが知れぬやうにとか、私は勉強は嫌ひじやが金持になれますやうにとか、随分無理な注文をして信仰するやうな連中には神も佛も手の出しやうがあらせられぬ、第三には境心俱妄之はもう丸で話にならん、此方の量筒も錯まつて居れば信せられる向ふの相手も更に價値が無い、妄想邪欲の心を以て狐や狸を拜む、甚しきは生殖器まで拜むのがある、こんなものに利益があつてはたまらぬ、佛教杯にて稻荷様を祭るが如きは決してこんな意味のもので無い、第四「境心俱眞」これではなければ本當の信仰とは云はれん、此方の信念も正しく又向ふの目當てとする神佛も眞實で心境俱に眞實にして始めて大利益が現はれる、之れが本當の信仰であります、此の境心俱眞と云ふ處まで信仰が進めば最早大丈夫で信仰上になれる無限の功德と妙味が感ぜらるゝのです、而してそれが禪の根底になるのである、坐禪をすると云つても信仰なき時は無意味の坐禪となる、坐禪を習ふに當つて猛烈なる勇氣を起して生死の魔軍を粉碎するも、寛雅なる生涯を具へて物外の天地に逍遙するも、皆な信仰が素地を作つて呉れるのである、それのみならず同情大慈悲の心も矢張り信念に呼び起さるゝ場合が多い、故に正しき信念は能く正しき情を生じ、正しき情は能く正しき智慧を發し、それが進んで確固たる意志を養ふに至ります、茲に於て能く眞實大道と我と一體になりて大無我の境界を得、同時に本性露現の大智慧を得るのじや、斯く解脱と智慧と並び全ふして始めて活動的禪の力を發揮して行く事になります、

第四章 禪の人生觀

今日は禪の人生觀の大要を御話致します、此の人生觀と云ふ事は頗る緻密な説明を要する事で有りますが、委しく御話申しあぐる餘裕がないから唯だ大綱だけを話いたします、凡そ此の人生觀に於ける一般の觀察を概括すれば厭世觀と樂天觀の二つに歸するので有ります、尤も近世に至りて進化論杯が益々開られて來て餘程精確な理論の根據に基つて人生觀を研究する人の有る事は云ふ迄もないが、大體に就ては矢張り厭世と樂天と云ふ此二大主義に收まるだらうと思ふ、然らば我が佛教は人生に對して如何う云ふ觀察を有して居るか云ふに、厭世と云ふ主義も無論含まれて居るが、樂天と云ふ主義も主張されて居る、ツマリ一方に偏しては居らぬのである、厭世主義とは申す迄もなく人生は厭ふべきもの、悲むべきもの、甚だ頼み少いもの、苦しみ多きものと觀じて行くのが厭世觀です、抑も人の心といふものは境遇に依て種々の變化を來すもので有ります、人間が生れて慈愛の深い母親の懷に抱かれて居る時分は天眞爛漫で何等の苦痛も感じない、併しや、長ずるに及んで自分の身に責任と云ふものが生じ、義務的關係が現はれ、種々なる周囲の事情が其身に逼て參りますと、昨日迄は非常に樂天的生活をして居た人もマウ今日に至ては様々な浮世の交際人情義務責任等の爲めに束縛せられて、思想も觀念も色々に變化を來たすと云ふ事は免るべからざる人生普通の状態である、茲に於て世の中は實に苦しみの多い、悲みの甚しい、あじきない浮世である云ふ觀察は自ら起て來るやうになる、所が會て有せる何等かの希望を満足し、退ては己れの家進んでは社會の事情の上にて少分でも障りも無く滞り無きことになると、人生の趣味を頗る面白く楽しく感じて參ります、さうすると自然に其人が樂天思想を起して來るものです、尤も人間は多くの場合に於て自分の精神觀念が萬事の基礎となるものでありますから、同じ人生を眺めるにしても人生は苦しみには相違ないが其苦しみの中にまた樂しみが必ずある、又樂しみのいふ中にも必ず幾分かの苦痛を感ずる事がある、併し其苦といひ樂といふも概して境遇の支配を受ける事が多い、されば絶対に苦しみの世とも樂しみの世とも断定すべからざるもので有ります、夫れ故古今東

西の學者智者又は聖人賢人達が人生を以て甚だ厭ふべきものとなし、又は最も樂しきものと認めて、種々の所信を主張して居られるが、公平に之を觀察する時は兩方共に必ず一面の眞理を道破して居るものと思ふ、ソコで佛教の觀察も亦た前に云ふ如く兩様共に存して居る、併し佛祖の遺蹟に依る時は申す迄もなく人生は厭ふべきものとして之れが解脱を求めのが佛教入門の一着手となつてを、併し厭世主義杯と云ふは詞が第一面白くない、何んぞなく此人生に恐怖心を抱いて此世に堪へずして逃げ出すと云ふ様な意味に聞ゆる、殊更ら活動を主とする世の中に在りてドコ迄も進歩主義を取らざるべからざる吾々人類が厭世と云ふ様な詞を口に出すと云ふ事が今日の進歩して息まざる社會の趨勢上から見ても甚だ面白からんやうにも思はれる、ソコで動もすると近頃の佛教家は頻りに佛教は厭世教にあらすと云ふて辯護して居る、成程佛教は本來厭世教では無い、厭世と云ふのは固より佛教の眼目でないのは知れ切つたことだから佛教は厭世教にあらすと云ふ意義を結論とするのであらうと思ひます、尤もこれは佛教の根本義から申せば當然の説には相違ないが、佛教に入るべき發足點は理論にあらざりて實際を主とせねばならぬ、その實際から申せば先づ第一の動機としては何うしても此の厭世的觀念を起すべき必要があると思ふ、釋尊が檀特山に御登りなされ、國王の位を捨て、妻子の愛を絶ち、苦行林中に乞士の身と成て御修行なされたる動機は、所謂厭世的觀念から出て居る、人生の状態は衆苦充滿して變化常なきに感せられ、生老病死のさまを見るに及んで益々一大悲觀に入り給ひ此苦痛を度せんが爲めに遂に出家遁世の志を御起しに成つたのは事實である、然れば釋尊出家の御目的は其の他にも種々有りませうが直接の原因は全く一種の厭世觀に出たのである、元來宗教家は云ふに及ばず苟も人世の救濟社會の改良を以て任ずる程の人は一たびは立派に此の歴世思想を起してゆかねばならんものと思ふ、左もなくは熱烈なる信仰は發し難いものです、ト云ふても私は敢て厭世思想を鼓吹するのじやない、唯だ人生の缺陷を憂ふるのであります、抑も佛教の通説として惑業苦の三道といふことを説きます、惑は迷惑と熱字して吾々

の迷心をいふ、業とは作業即ちなしわざです、即ち身口意の三業といふて御互の精神若くは身體及び言語の上に働を現はすものが業で有ります、苦とは云ふ迄もなく人生の苦痛である、先づ此の人生を大観して人生の事實に就て觀察して見たならば疑ひもなく苦しみの世界といふことが出来る、更に宗教的見知の上から之を觀、或は道德の上から之を觀たならば無論樂しみもあるには相違ないが、大部分は苦しみで持ち切つて居る、苦しみと云ふても必ずしも怪我をするとか火難水難に遇ふとか、病に侵さるゝとか、生き別れ死に別れといふ様なことのみをいふのではありませぬ、第一には吾々が本來具て居る智能を啓發せんとするも容易に能はず、道德を成就せんとするも立志の如くなる能はず、マウ一步進んで申せば現在の人生を其儘立派な御淨土たらしめんと欲するも能はず、吾々の理想界から見下しますれば此人生は實に不満足不完全にして缺點と苦惱に包まれて居るものであらうと思ひます、諸君は此世界を以て果して満足すべき世界であると思召すか、能く々々考へて見ると滿場の諸君は恐らくは満足すべき人生で有るとは仰つしやるまい、今日我が日本に於ける精神界の有りさまは何うであるか、果して現在の状態に満足が出来ませうか、仲々できないです、満足が出来ればこそ各地方に於て或は勤儉主義を奨励し或は精神教育を奨励し或は社會教育の發達を計り或は風紀改善の方法を講じ天下の有志が攻々吸々として國家及び社會の爲めに心配して居るのである、是れ精神界が不満足な證據ではありませぬか、又物質界の方面から見ればどうであるか、實業經濟殖産興業の諸問題に就て見るも一として満足は出来ぬではありませぬか、其外倫理道德の方面から見て現在の日本國民は果して仁義を守り果して法律に柔順なる國民と稱せらるゝであろうか、又果して一般の品行が正しきに歸して居るのであるか、果して一般の風儀が善良に基つて居るのであるか、どうも覺束ない點が頗る多いではありませぬか、肉體の健康を圖る上から見ても衛生状態が果して完全であるや否や、斯様に人生の現狀に就て仔細に觀察を下して見たならば、我が國目下の状態より吾人の位地境遇其他百般の事項は甚だ以て不完全にして偽

醜惡の充滿して居ることを自覺するであらう、此の不完全なのが則ち苦痛の源であります、否な不完全そのものが苦中の苦であります、又一面御互の一身上から眺めて見たならばどうであらう、吾々の心は甚だ穢れ易く動き易い、否な穢れても居れば動き易うしに動いても居る、而して善には移り難く惡には流れ易い、偶々教育制裁の力を借りて精神の改善を謀ると云ふても猶ほ動もすれば塵埃に走り易く、形式一方に走り易く精神そのもの、奥底には完全に一大清潔法を實行する事頗る難いのです、

烟管さへ心のやにをば掃除せず雁首ばかり磨く世の中

實に其通りではありませぬか、又御互の身體に缺點の多いことは説明する迄も無い、かく御互は油断の出来ない最も危険の身を持って、而して不完全なる世の中に立て居るのでございます、我國の現在の國狀の如きも前述の如くどうしても一種の悲觀を起さざるを得ない、併し此の悲觀は絶望の意味では無い、世の缺點を悲しみて速に完全なる理想の實現を圖るのです、所謂慷慨悲憤して大勇氣を鼓し拳を握り心血を洒ぎ以て國家の發展進歩を努めねばならぬ、是れが佛陀の願行です、ソコデ斯くの如き不完全にして苦痛ある人生は何に因て現はれたのであるかと云ふに佛教に於ては總て業力所變と説てある、乃ち過去世に於ける善惡の業力に依て受けたる果報である、所謂自業自得で自身の業に依て自身が其果報を招き、又自作自受で自分で作つて自分で受けるのであります、尤も此事は充分委しき説明を致さねば種々の疑問を生ずることじやが、ツマリ一切の苦惱は業力の招く所であるから、更に善業力を作つて善果報を求むるやうにせねばなりません、吾々に若し不養生と云ふ業があると必ず病氣と云ふやうな苦痛を感ずる、れ金を使ひ過すと云ふ業があると其結果は貧乏と云ふ苦痛を受けなければならぬのである、悲しむべき人生厭ふべき世界と見るも、樂しき人生慕はしき世界と觀るのも皆な業力のしわざであります、

恐ろしき地獄の鬼をたづねれば邪見の人の胸にこそあれ

火の車つくる大工はなげらねど己が作りて己が乗りゆく

極樂も地獄も盡く業力の所變じや、しで見ると今日我が國の狀態が未だ完全無缺と云ふべき程の立派な業力が成立して居らぬからマダ々々多くの不完全ある點があるのである。故に現在に満足せぬと同時に理想的國家を實現する丈の大善業力を奮起せねばなりません。之を吾々一身上に就て申せば今日のれ互が意に満たざる粗末な身體を受けて来た、又智徳に於て缺點多き精神を受けて来たと思ふたならば、自ら宿業の非なるを恨むべきである、親が怨めしい、御先祖が怨めしい、天道様が怨めしい、坏と思ふのは佛教の三世因果の鏡に掛けて見たならば自業自得の理を知らざる一種の愚痴である、縦ひ親が悪い爲めに親の氣質を遺傳して子も悪いと云ふけれど、それは道理の半面です、親は一の助縁たるに過ぎぬ、根本の原因は自分にある、悪原因のあるものが悪結果を招く様な人と親子の關係を結ぶ、是れは同業吸引の理に依るのである、若し現在の果報が氣に入らんならば將來は十分氣に入るやうな所謂理想的なる果報を受け得られるだけの善業力を實行してゆくが宜しいでは無いか、業と云へばなんだか悪い事にのみ名けたやうに思ふ人もあれど、前申した通りツマリ作業といふことであるから善にも惡にも通ずるのじや、次に惑とはまごふと訓じて迷ひのことです、これには理に迷ふの惑と事に迷ふの惑との二種がある、事物の相に迷ふのが事の惑です、其の多くは色聲の二つより起る、或は人の姿や金銀杯を見て迷ひ心を發す

あいみでののちの心にくらぶれば昔はものを思はざりけり

とあるが如くじや、或は苦聲樂聲善聲惡聲に依りて種々の迷ひを發す、其他香味觸等總て事物の相狀に依て發する所の煩惱である、次に理の惑とは知識明ならずして邪智に流れ眞正の道理を知る事能はざるをいふのです、儒道でも大學の道の第一には「明德を明にするに在り」と云ふが其の明德が却て暗くなつて公明正大なる道理に迷ふのであります、若し此惑執が無かつたならば人心は健全になり作業は誠實になりて立派な文明國を建築する事が出来やうと思ふ、歐米各國の中には中々驚はしき文明國がある

さうで有りますが、英國杯の話を開ても米國あたりの話を開ても各々一長一短はあるけれども或點に於ては我國の模範とすべきものも少くないが、尤も或點に於ては却て恐るべく忌むべき所もあるからして玉石混交せぬやうにせねばならぬことは勿論です、其文明なる立派な國家は畢竟何に依て得らるか云ふと即ち國民の惑障を離れて公平にして且つ正義に基づける國家的事業をドン々々發達させるか一般の教育を完全に進めて行くとか都て道理に合ひ實際に合ふた所の事を實踐躬行し参いつたツマリ國民善業力の結果であります、獨逸が會て佛蘭西と戰爭をして大敗をとつた獨逸の天子は我が兵は既に力を失ひ盡して最早望みは絶はてた此上は精神の力を以て復讐をするより外は無いと云はれた、それより上下一致して國民の教育に全力を注ぎ精神的文明の發達に努められた、其の結果が普佛戰爭に於て大々的勝利を得て到頭佛國の巴里に侵入して城下の盟ひをなさしめるに至つたのである、始めは精神の上若しくは物質の上に於て關點があつたから佛蘭西の爲めに大失敗を取つたが、それから後大いに奮勵して教育はいふに及ばず商工業を始めとして其他所有事業に熱注して猛烈なる善業力を發した結果、最後の大勝利を得たのは、所謂不完全なる邪業惡業を變じて完全なる正業善業となし、不完全なる精神を變じて完全な精神を開展した爲めに、前の失敗とは九で反對の結果を現はしたのである、此等の事蹟から云へば感業苦が變じて徳業樂といふ反對の結果になる、乃ち惑が徳となり道となりて善業を造作し遂に樂を得るの結果を現はするのである、佛法で云へば惑が變じて悟になつたのである、所謂斷惑證理で惑を斷じて理を証る、その理に契ふて活動した業が自づと樂を招き文明の國を造ることとなる、して見ると今日の人生に苦しみありと見るは夙業の惡しきに依るのである、佛教で常に前世の宿業力といふことを申すのはそれです、宿業と云つても生れぬ以前といふやうな遠方の事のみではない、今日の苦しみは昨日の業力に依り、今年の苦痛は昨年の業力に因る、老年の苦しみは青年時代の業力に因る、既往の業が現在の報ひを作り、現在の業が將來の苦しみを招くのである、故に必ず前世といふやうな遠い事のみと思ふ

てはなりません、其苦痛又は不完全なるものは何に依て受くるやと云ふと、前にも御話した通り精神の働き若しくは行為の欠點が原因と成るのである、佛教に於ては此不完全な苦しみの方の多き欠點ある方面に就て世の中は厭ふべきである、人生は淺ましいものであるといふ悲觀的説明をしたのである、故に吾々の身の上は實に罪惡の凝りかたまりであると觀じて、自ら自分の身を悲しみ、自己を怨んで行くやうに教へるのは、唯だ自分の缺點を自覺せしむる爲めなのである、そうして此苦しみを離れて樂ならしめ、不完全なる所を完全ならしめて、人生の欠陥を補なひ導いて行くのである、乃ち此人生は少しも安心の出來ない、喜ぶことの出來ない世であるから、是を改良して善良なる世にしてゆかねばならんと云ふ向ふに遠大なる希望を立て、厭世思想を起すのである、是が佛教に於ける人生の觀察法で有り、若し之れに反して此の世の中は苦しい恐しい世であるからイツツ死んでしまはうといふやうな、自暴自棄をしてはそれは花も實も無い事になる、恰も火を恐れて水に投ずる様なものです、信仰の上には必ず一大活力の發するものである、故に將來に必ず一道の光明を認めて居る、今の吾々は罪惡の凡夫であるが一大信念の力に依て前途に輝やき涉つて居る遍照法界の大光明に接觸して古今不易の大道を成就せんとの物々たる威氣がなければならぬ、此の大信念を發しなすれば人生萬事が皆な吾を勵ます良師友となるものじや、元來此の世の中のでの狀態が吾々の業力に依て現はるるものです、其業力は不同であるから此世界觀も同一では無い、犬が見れば犬に相應するだけの世界しか見られぬ、猫が見れば猫に相應しただけの世界しか見られぬ、人間の中でも私なら私だけの世界を見て行く、皆さんは亦皆さん方の業力相應の世界だけに見らるゝのじや、此の世界を廣く見て大きく使ふ人もあれば、狭く見て小さく使ふ人もある、昔の日本左衛門と云ふ泥棒は廣い世界が狭くなつて終には身の置き處もなくなりて

世の中が四尺五寸になりけり五尺のからだ置き所なし
と讀んだといふ、廣い天地も五尺の身體の置き處が無い程になつてしまふ、是れ世界に大小廣狭あるに

非ず、皆自ら招くのである、又佛教では人生無常と説く、人生は實に無常である、吾々凡夫は常に無常の嵐に誘はれて苦しみより苦しみの方へと吹き流されて居る、元來無常とは人生變化の狀態に名けたのである、此の無常も名の付けやうで進化ともいはれるし、退化ともいはれる、何れも無常の相である、或は進化し或は退化し、或は生じ或は滅し、變化常なきが世の狀態であります、凡夫は之れが爲めに益々苦しみ、佛菩薩は之れが爲めに神通妙用を現はし給ふのである、昔し菅原道真公は議者の唇に依て筑紫に流罪の身となり涙と共に都を出で、明石の浦へ船繋りして居られた時分に、明石の驛長が來り見に餘りのれいとしさに涙を流して慰むる語も出でなだ時、菅公は

驛長莫驚時變改。一榮一落是春秋。

の二句を示された、驛長よ左様に心配してくれな、世の中は變遷常なきが當相じや、一榮一落は草木も亦た免れぬ、一たびは春の如くに榮ゆ、一たびは秋の如くに衰へる、一年の氣候のうらちさへ花が開きもすれば葉が散りもするではないか、況や人生五十年、その間に榮枯盛衰の交も々々來るは浮世の常である、誰をか恨まん、誰をか咎めん、幸にして我に運命の存するものあらば再び花吹く時もあると云ふて示されました、筑紫へ往かれてから毎日御赦免の御沙汰を待ち居られた甲斐も無く、草滋く露深き太宰府に於て遂に終りを遂げられました、菅公最後の詩に

病追衰老到。愁逐謫居來。此賊遁無路。觀音念一廻。

とある、取る年波に病も發し易い、謫居の身と思ひば涙の乾く時もない、併し是れも矢張り一種の愚痴の煩惱じや、此の煩惱の賊は遁るゝに路なき程時々刻々に遁るのであるが、斯かる時こそ觀音念ずること一廻するのであるといふ意です、大慈大悲の觀世音菩薩を念じ奉つる時は此の信仰力に依て心中一切の苦痛を免がるといふが菅公の御信仰じや、吾々も亦た人生の苦痛の厭ふべきを知りたらんには急ぎて解脱の道を求めねばならぬ、吾々が若し佛様のやうな完全圓滿なる境界であるならば佛様方の御苦勞に

預るにも及ばぬげれど、佛ならざる吾々は是非共佛様の力を仰で今日の果報に現はれたる一大欠点を補
 充せずんばあるべからずと云ふのが佛の誓願力にたよりゆく信仰の目的です、前々より繰返していふた
 通り人生の苦樂は皆その人に依て見る所を異にする、

手を打てば下女は茶を汲む鳥は立つ魚はよりくる猿澤の池

之が人生の差別状態です、猿澤の池の邊りへ来て手をバンと打ちますと、茶屋の姉さんは客
 が呼んだと思ふて茶を汲んで来る、其音を聞て鳥は恐れて飛んでゆく、所が池の鯉や鮒は何にか好い物
 を呉れるのであるかと思ふてそばへ寄ってくる、同じバンと打ち鳴らす手の音でもそれを聞いて、そ
 れが爲めに苦痛を感じて逃げ出すものもあれば、それが爲めに喜んで近寄るものもあり、夫れが爲めに
 れ茶代になると思ふて働く者もある、故に承陽大師は

善惡は法なり、法は善惡に非ず、善惡は時なり、時は善惡に非ず、

と仰せられてある、善惡は必ず法に依て生ずる、一の法が存すればその法を借りて善と惡との名前がつ
 く、本来無一物であるならば善惡の名は付かん、併し法其物には善惡の自性は無い、例へば互の身體
 といふものがある、これは法じや、此法に依て善人惡人の名前が付く、併し身體其物は善とも惡とも定
 むべきものではない、五指を集めて一拳となす、これ則ち握り拳である、之を斯う出して(拳を示して)
 是れは善なるか惡なるかと云つたら善とも惡とも云へないが、此の握り拳を以て人の頭でも叩きつける
 と直ぐ夫れが惡といふ名が出来て、法律上又道徳上一種の罪惡となる、若し此握り拳を以て親の肩でも
 叩いて御覽なさい、直ぐ親孝行といふ名がつく、畢竟握り拳に依て善惡の名は付くが、握り拳その物は
 善惡を飛び超へて居る、此の善惡超絶と云ふ所に大安心を決定してゆく之が坐禪であります、信仰と云
 ふ上から申しても矢張りさうである、吾々の精神が佛様の御慈悲の光明に接觸して唯だ有り難いと云ふ
 信仰の一念以外には何にも無い、吾れ我れを忘れ盡してたゞ有り難いといふ信心歡喜の一念に歸する、

云、に至つては信仰と禪とは一如である、故に信仰の無い禪は眞の禪で無いと云ふ事は前章に委しく御
 話した通りであります、元來此人生といふものも其自性は善惡を飛び超へて居るのである、たゞ用ひ方、
 使ひ方の如何に依りて善惡が分かれる、所謂心の力と業の作用とに依て此世が文明界にもなれば野蠻國
 にもなる、故に私共の理想は唯だ此の世界を佛陀の世界にしたい、解り易く云ふと完全なる佛敎的世界
 即ち智徳圓滿の世界にしたいと思ふのである、佛様といふては名が可笑しいと思ふなら神様でも宜い、
 聖人でも宜い、乃ち圓滿なる慈悲と完全なる智慧と、完全なる信仰とが相一致した人生で有つたならば
 始て樂天主義の世界が實現するのである、此の人生の全部をして眞實の樂天世界にする迄には中々五十
 六億七千萬歳もかゝるかもしらん……西洋の一等文明國は吾々の理想から見れば未だ一等國では無い
 佛様の御淨土から見ると未だ何十等百等位の國である、ドンな立派な國でも、軍艦を造り兵士を養ひ、
 劍戟銃砲の音が絶ゆると直ぐ外國の侮りを來たす、又國內の状況はドウかといふと人民を保護する警察
 といふが設けてある、是非曲直を判別して下さる、裁判所も設けてある、蟻の道へ出る隙間も無い程、
 法律の機關は夫々備へてあるにも拘らず罪惡は後からとやつて来る、丁度秋の雁の如しだ、後から
 もといふ風に出て来る、一日も油斷の出来るものではない、又今日でも尙ほ警察官は未だ警察法が
 行き届かんと云ふ、政治家は政治が行き届かんと云ふ、宗教家は宗教が行き届かんと云ふ、教育家は教
 育が行き届かんと云ふ、經濟家は經濟が行き届かんと云ふ、衛生家は衛生が行き届かんと云ふ、日本全
 體が行き届かんと云ふ三字の中へ皆な入れられて居る、其不行き届きをして行き届くやうに至らしむるの
 が官民全體に通ずる本分の務めである、私共宗教家も其責任の一部を分擔すべき天職を持って居るから、
 かうして皆さんの前で面白くも無い御話もするので有ります、之を要するに我が禪門即ち佛敎に於ける
 人生觀といふものは、先づ人生に對して厭世的觀察を下して此世は實に苦痛の世界不完全なる世界であ
 るから飽く迄も道徳の力を以て人道の發達を圖り、宗教の力に依て佛陀の救済を仰ぎ、宗教道徳の力が

相一致し、さうして人生の根本的大解脱を圖つてゆくといふのが禪の人生觀である、其の解脱の標準を定め、それに向つて修養し奮進するのが宗教心の向上であり、又宗教心の發達である、又之れが宗教的大信念の活力であります、吾々の現在に僅かに修養の端緒を開いた位に過ぎない、併し吾々の大信念の開けた眼所謂善とか惡とかにくゞられない超脱した大無我とも謂つべき根本真理の眼から天地宇宙を眺めて見たならば如何であらうか、さう苦しい苦しいといふて煩悶のみして居てはならぬ、今日厭ふべき人生の中に在つても大に信仰の力は其儘解脱することが出来る、それは吾々を慰めて下さる一大光明があるからじや、此頃の田野を見ると農業に就事する人は毎日田の中へ這入つて働いて居る、田の中へ這入つてをると汚くて頗る苦しいが、それを濟もふて家に飯つて見れば、清々として以前の苦しみに増した楽しみがある、寧ろ田の中に働かぬ人の味ふことの出来ない楽しみを感ぜらるゝに違いない、斯く一面には非常に苦しい事柄があるけれども亦他面には云ふにいはれぬ一つの楽しみと妙味がある、それだから吾々は人生に厭ふべき苦惱の根本たる煩悩を断ち切つて樂しき菩提の行願を爲し、所謂罪惡を轉じ離れて立派な道德的行爲とするのです、宗教上から曰へば信仰的生活で此の人生を誘導扶掖し立派なる理想世界に進歩せしめて行くを願ふのです、即ち宇宙の大真理を悟り天地の大徳に一致せられたる佛様には無限の大慈悲光明があり無限の大智慧がある、その無限の光明無限の大智慧に向つて精神の信仰力を集注したならば縦ひ如何に苦しき不完全なる人生でも吾々の全身が既に佛様の大慈悲光明大智慧の懷に這入つて温かに悠々自適する大安心が出来るからです、斯かるときは生死の中が即ち佛じや、苦しみの世界に自ら極樂がある、承陽大師が

峯の色谷の響もみなながら釋迦牟尼佛の聲と姿と

と御詠みなされたが、此の歌を能く能く玩味して見ると之れが禪門の極意である、亦信仰上最終の皈依點である、此の罪惡を造る色身も菩提の道を行へば其儘に皆釋迦牟尼佛の聲となり姿となる、禪宗で申

せば無心無心で何んにも思はぬといふ心の全體其儘が、マウ既に佛の御救ひを受けて佛になつて居る、茲に至つて始めて苦痛の中にありながら非常な喜びを感ずる、是れが苦痛を解脱する法門です、人生社會即淨土じや、之れを眞諦俗諦の一致といふのである、宗教の眞面目眞意義は結局此にあるのです、雀はチウ／＼鳥はカア／＼是れ皆法性眞如の響であるなどと能く申すが、そんなことは皆理論である、さういふ人には涙がない、畢竟一隻眼たることを免れぬ、乞食を見ると左に缺げ椀を持ち右に囊を携ひて戸毎に立て人に憐を乞ふて居るでは無いか、之れが眞如法性の姿であるなどといふて居つてはトラモ社會の救濟なんといふ事は出来ぬ、雀や鳥は皆畜生の衆生じや、彼等は何に依て斯様な淺ましい動物に生れて居るか、皆惑と業と苦の結果である、佛様の精神から見たらば一羽の雀や鳥も皆憐むべき衆生じやと自づから慈愛の涙を注がれる、然るに彼等が法性眞如の姿である杯と禪宗一面の見識其儘を丸る呑みにして無暗に濫用しちやいかん、彼等も亦た我等の同類なりと思ふて中心より同情を表はし之を利濟するの心が發つて來ねばならぬ、ツマリ吾々佛敎家は信仰心の賜物として此の有爲辛らひ人生の中に於て佛様同等の樂みが得られる、之を「水中の鷺、乳中の酪」ともいふのじや、恰も鵝は水中に魚を捕る時に悪い水は飲まない、唯だ魚のみを飲む、又牛乳から酪味を採る如くじや、吾々も一旦は世の中の苦痛を感ずれば自ら堅固なる信仰心が起る、苦しみと感ずる心が無ければ佛様にすがつて救濟を仰ぐといふ信仰心が起らぬ、一度は世の厭ふべきを知りて世の罪惡を離れ、それから佛の大光明を人生の全面を輝かしてゆくのである、是れぞ「大死一番大活現成」といふ端的です、乃ち御互の妄心を殺してしまい、人生の厭ふべき不潔分子を排除してしまつて、それから向上より眺め直して見ると、今迄厭ふてをつたものが、そつくり愛すべき物となつて來るのである、古歌に

盗人を捕へて見れば吾子なり

といひ、又面山和尚の歌にも

あしきとてただ一筋に捨つるなよ、澁柿を見よ甘干となる」
と詠まれた、澁いから食べられぬといふて厭ふてその柿を捨て、はならぬ、澁味其儘がやがて甘干となるのじや、吾々が若し此の人生は苦痛であるといふてそれを厭ふの餘り、世を捨てたり身を捨てたりするのは澁柿をソツクリ捨て、しもうのものと同じ事だ、それでは甘干を得ることは出来ぬ、澁柿其儘を十分にほして熟せしむれば今度は奇麗な巻繪のね重箱の中へ入れて上等の御客様の前にも出せる様な結構な物になる、人生も其の通り澁柿の様なシブイ感と業と苦みにククラれんとする苦痛な澁柿の人生を干し乾かす所の神精を修養して大信心を堅うすれば自ら智徳圓滿なる甘干の樂しき人生に漸次改善して行くことが出来る、之れが佛教の目的であります、未だ充分に盡くしませぬが、先づ大畧我が禪門に於ける實踐上より見たる人生觀の大體の旨趣は斯様であると思ひます、

第五章 禪の倫理觀

是れから禪の倫理觀に就ての御話を致します、この倫理觀も古今東西に於ける幾多の學者が主張せられたる學說を列らね比較して御話するのが宜いかも知れませぬが、今は其餘地も無いから煩はしく申し述べません、併し是等の學說を大別すると三説に歸する様であります、第一は自己を中心として立て、居る倫理觀、即ち自己中心説です、故に此説は總て己れの幸福を進め自己の快樂を求むるを天性として居る、従つて利他的道徳を説くことあるも利己の變形に過ぎない、乃ち自己を利する上の必要上利他的行動を取るのであると説くのです、第二は社會若しくは國家を中心として立て居る倫理觀、即ち社會中心若しくは國家中心説です、第三は前二説を折衷した倫理觀、自己と社會とは相待て離るべからざるものであるといふので利己と利他との併行調和を倫理の原則として居る、是を假りに名けて折衷説と云ふて置きます、以上は倫理の基礎に就ての説であるが、凡て人としての倫理の目的は如何で有るか云ふ問題に

對しても種々な説が有ります、大綱を擧げてみると二つに歸するやうに思ふ、一は快樂主義乃ち快樂を得るを目的とする、是にも箇人的快樂説と社會國家的快樂説とがある、一は合理主義乃ち道理に合するを目的とするの説である、道の爲めには自己の快樂をも犠牲にする、自己の幸福をも顧みない場合がある、夫が倫理の目的であると云ふ様であります、此外細かに詮議すれば倫理上多種多様に學說が分れて来る、殊に倫理學は一の獨立した専門科に成て居るのみならず、數多の學科が之れに關係を持て居る、社會學、心理學、生理學、教育學、宗教學、哲學等皆な直接又は間接に關係を有して居りますから、随分緻密な研究を要するのである、併し此等の説明を致す餘地も無いから直ちに禪宗としての倫理觀について御話致します、

禪宗では自己と社會又は國家と云ふことを峻別せぬ、乃ち自他一如と云ふ處に根據を置いてある、自分と他人との隔てをつけぬ、即ち自他平等である、自己だけの社會だけの國家だのと云ふ様な事は元來枝葉の議論で倫理の根底では無い、吾々の世界と云ふものは畢竟何に依て出来たかと云ふと四大の所造と説きます、又吾々の肉體も無論四大の所造である、四大とは地水火風の四つである、これに空大を加へて五大ともいふて居る、大とは周遍の義と申して地水火風空ともに法界に周遍して居るから大といふのです、例へば水瓶は地でもつて全體が出来て居るが、此の全體に水の性が充ちて居る、又火の性も充ちて居る、火が無かつたならば、地大が壞れる、水が無かつたならば土と土とが連結して居らん、而して全體に動く方の風性が籠つて居る、世界も亦たその通りで、世界の全體が地なり水なり火なり風なりである、尤も地水火風と申しても吾々の目に見ゆるやうな形相でなくて其本性である、乃ち堅固なる性が地大、濕へる性が水大、暖かいといふ性が火大、動くといふ性が風大です、之を堅濕煖動といふのである、天地萬象一として此四大を有せざるは無い、佛の身體も此四大を離れず、吾々の身體も亦此四大を離れない、他人の身體も亦此四大を離れず、草木も山川も同じく四大の所成ならざるはない、此の四大

が萬物の原質である、今日の實驗科學の上から申せば、所謂分子と分子の化合作用に依て色々の姿が現はれて居るのである、或は二箇の分子が相合して居る物もあらうし、或は三箇の分子が抱合して出来て居る物もあらうし、萬象萬物はツマリ分子の集團である、佛教は固より理學や化學ではないが、佛教では地水火風の四大は天地に充滿して一微物でも盡く四大を具へて居ると観る、即ち芥子粒一粒の中にも此四大はチャンと具つて居る、して見ると吾身と世界とは平等一種である、ひとり人と人が平等である計りでなく、一切萬物が皆同體である、萬物同體の原則からして、他を見る事猶ほ己の如く、我れと人との間に隔てを見ぬ、この平等一如の理が土臺となつて倫理觀が出来て居る、故に佛様が法界平等利益と云はれて怨親平等に利益せらるゝは天地自然の妙徳が現はれたのである、抑も吾々の精神の根底には慈悲と孝順との二大徳が自然に具つて居る、梵網經には之を佛教の慈悲心孝順心と云ふてあります、慈悲心とは下に向つて樂を與へ、苦を抜くの働らき、孝順心とは上に向つて隨順するの働き即ち勢力の大なるものには自から順がひ、威徳の強いものには自から服してゆくのが孝順心である、之に反して勢力の微なるもの、威徳の薄いもの、乃ち自己に及ばざるもの、足らざるものを扶け護つてゆくのが慈悲心であります、例へば溪河の水の如きは、涓々として断へず流れて居るが、其の流域に接する田畑や草木を自然に濕ほして行く、又大陽は常に萬物を照して生存繁殖せしめて居る、萬物相関で互に其長所の徳を以て他の短處を補ふ扶くるが天地間に在ける自然の慈悲作用である、それから孝順の方から申せば、例へば俗に云ふ日廻り花と云ふものは大陽の光線のさす方へ花が廻つて行くが如く固より無意識の作用では有るが、自然と威力の大なる光明の存する方に順ふの姿である、又風が吹き來ると草が頭を下げるのも孝順の相です、其他火力が大なれば水力は影を藏し、水力が大なれば火力は消に失せて了ふ、衆星は自づと北斗に向ひ、百川は自づと大海に歸する類は皆な小は大に順かひ、弱は強に服する天地自然の孝順作用である、斯く天地萬物は皆天然に慈悲と孝順との作用を有して居る、之を佛性の徳といふ、

されば子が親に向つて孝養を盡し、臣が君に向つて忠節を守るのも人為的とはいふものゝ其本は天理に發して居るのである、吾々にこゝにいふ本性の徳を具へて居る、唯だ訓練陶冶の巧を借らなければ性徳が潜在して居つて顯現せぬから今日は教育とか宗教とかいふものが一層必要を感じて來た、教育宗教の力は本性の發達を資けて一層其の美を現はすの力がある、米國の植物改良家某氏の説に野生の果樹と自分が改良を加へて手入れをしたる果樹とを比較してみると、其手入れの方がヌツト味が宜い、又樹木の成長に就ても、野生に任かして置くと二十八年間に一丈の高さに一尺の太さになる樹が、人工を加へると僅か十三年間に其の七倍即ち七丈の高さになると云つて居る、其の外農事の改良、蠶業の改良皆な同一の結果を生ずるに相違ない、總て此等自然物でも之に加ふるに人工を以てせば自然の發達力を助けて神速に且つ完全ならしむる事になる、是れが人間に教育の必要なる所以です、故に私は教育の發達を切望すると同時に我が國民全體が教育の御勸語を以て唯一の寶典とし我國の御經文として平常に之を讀み之を思ひ之を實行したいと思ふのです、教育勸語のことは私が申し上げるよりも、皆さんの方が十分御研究が出来て居ることであらうと思ひますが、忠孝を以て道德の根底と定め給ひ、其細目に於ては孝友和信を初め都合十五點の徳目を示されてあるが、御勸語全體を大別して見ると自己に對すると他に對するとの二大道德となる、乃ち自分が自分に對するの道德、自分が他人に對するの道德であるから、此の自己は一應の説明であつて其の究竟する所は自己一如に歸するのである、併し一應の説明として之を假りに對自的、對他的と名を附けて御話を致さうと思ふ、對自的とは自分が自分に對するの義務である、對他的とは自分が他人に對する義務である、人といふものは自分で自分を制裁し教育して自分が自分を鼓舞し獎勵するの能力を持つて居る、佛教で云ふ即ち自覺である、之を世の倫理學者の説を借りて申せば自己の本務を三種に分つことが出来る、即ち自制と自護と自訓とである、

第一、自制 とは自ら己れを制する事で、乃ち克己とか制情とかといふことになる、教育勸語を拜

讀し奉りますると道德の標準を孝友和信等の十五點に分けて御示し下されてある、ソコで此自製の本務を假に御勸語に配すれば恭儉己を持しと云ふに當る、自ら我儘な心を制すれば自づと己を持することが恭儉となる、恭儉の本は全く自制力にあります、昔し二宮尊徳翁が常に不動様の軸物を掛て居られた、或人が貴公は觀音様や御釋迦様を祭らるゝのは如何なる思召なるやと尋ねた、すると翁の答に、是は私の理想の本尊である、不動尊とは讀み方によりては動かざるを尊ぶといふことになる、兎角人心は動き易く變じ易い、故に私は常に志操を堅持して如何なる困難に處しても寸毫も動かざるの勇氣を持たねばならんと思ふ、殊に不動様は堅い岩石の上に坐し、背後に火を擔ふて自ら苦痛に耐へ、左右の手には劍と索を持つて私情を截斷し、動念を堅く縛つてござる、是れ實に吾が精神を修め鍛鍊するの標準であるから常に本尊と爲すと云はれたさうです。二宮翁は曹洞宗の檀家に生れた人で、幼年の頃菩提寺に往きて觀音經の訓讀を聞き大に感じて自分の安心を得たと云ふ位の人です、故に翁の精神には、立派な信仰が在たに相違ない、併し佛教を十分に研究する程の余地が無つたろうと思ふから佛教の學者とは固より申されぬが、兎に角自制力には富んで居たに相違ない、此の自製は佛教に云ふ三學に配すれば戒になり、第二、自護 とは自ら己れを護るのであります、吾々の身に危険の無い様に、又吾々の身が立派な目的を達することの出来る様に十分に保護を加へて行くの務めです、人間は自分の身を大切にしていれば、事を毀傷せじ又忽諸にせぬ様親切に保護してゆかねばならん、自分の身だけは何處へ行ても自分を離れる事はないから之を護る上にも油斷があつてはなりません、尤も事によると自分で自分の身に離れることがあるかも知れん、支那の魯と云ふ國の殿様が聖人孔子に向つて我が領地はに恐しい健忘性の者がある、河西より河東へ家移りをした際に、自分の女房を忘れていつた、向ふへ往きてからハテ何にやら物足らん様な心地がすると思ふて能く考ひてみると、自分の女房を忘れて来た、ソコで元の處へ行つて、女房を連れて来たとは呆れた者では無いかといはれますると、孔子様は別に驚きもなさらん、さやうであります。

第三、自訓、これが又頗る重要で、自分の腸の中に色々な妄想が起つた場合に自ら己れを教訓します、がモット世の中にはひどい者がありますと曰はれた、魯の殿様は驚いた、それはどんな奴かと問はれた、孔子様は古へ夏の桀王殷の紂王といはれた御方は、一天萬乘の君でありながら女房を忘れる所じやない、自分の身をさへ忘れられましたといはれた、是れ實に有り難き教訓です、此の自ら護るの本務を御勸語には學を修め業を習ひと仰せ下されてあります、而して佛教の上から申すと正しく一分の禪定であります。

第三、自訓、これが又頗る重要で、自分の腸の中に色々な妄想が起つた場合に自ら己れを教訓してソコナ妄想を起しちやいかん、さう云ふ煩惱を出してはならんと自ら親切に訓へ諭すのである、人の心といふものは使ひ別けが出来ぬものじや、獨りで小言を云ふ方の側に立つたり、又小言を云はれる方の側になつたりする、元來吾々の精神は種々無量の種子の集團したる活動體であるから、勘平も居れば定九郎も居る、佛様もござれば鬼も居る、故に自分で自分の敵き打ちも出来れば自分で自分を教育する事も出来る、自訓を勸語に配すれば智能を啓發し徳器を成就すと御示しになつた所に當ります、之を三學に配すれば智慧に當るのである、以上は對自的であります。

次に對他の、を家族、國家、社會の三つに區分する、吾々は本來宇宙間の一員であるから自分が自分で其身を大切に保護し發達すべき責任がある、故に佛教では自殺することも一種の罪惡であると仰せられたのである、自他に關する義務的觀念から云へば寧ろ罪惡中の大罪惡である、此の自己に對する本務を擴張したのである、それから血族の關係としては兄弟もある、成人すれば妻もあれば子もある、其親子兄弟妻子が大綱となつて茲に一個の家庭が出来ると、之れに主従とか叔伯とかと云ふ枝葉が生ずる、之を總稱して家族といふ、其家族相互の關係を以て對他的道義の根本目標とするのが家庭道徳です、之を勸語に配すれば父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和すと云ふ三點に當ります、次に國家と云ふ上から見れば、吾

セ〇

々は國家組織の一分子である、家庭の多數相集まつた上に其主腦となるべき君主を戴いて國家といふものが成り立つ、その國家の大威力に依て互は安心に世に處してゆく事が出来る、殊に我國の國家は君臣一致忠孝一體である、吾々の祖先は八百萬の神々で建國以來皇祖皇宗の臣下である、中には外國から歸化した者もありませうが、大體に於ては皆な皇祖皇宗に先天的深縁ある臣民であります、我國は開國以來今日に至る迄一貫して一系聯綿たる皇室を中心とし且つ主權として吾々は祖先以來一貫した臣下である、一國の總本家が皇室であつて、吾々の祖先は皆な其分家である、してみると一面には君臣の關係を有し、一面には本家分家、又は親子と云ふ關係を持つて居る、天皇陛下と吾々臣民との間柄は開國以來の親子も同然である、だから 天皇陛下は全く慈父の位地に御立ち遊ばされ、一視同仁誰れ彼れの差別なく常に仁愛の光りを與へ下されてある、これが我が國體の基礎となり、我が國民道徳の大本ともなつて居る、又これが我國の世界に比類なき所以であつて、忠勇に富みたる日本魂もまた是れより生じて來るのです、故に時としては自分の一身一家族を犠牲に供しても國家の爲めには盡さねばなりません、斯く國家に盡すのが即ち家族に盡す事になる、支那などではそうでない、其の皇室に對して民とは云はれるが、残らず臣下とは云はれない、治者被治者の關係で君民の權利義務が出来て居るので君臣とか親子とかといふ關係は殆んど無いから支那では親子間の道は深く説いてあるが、君臣間の道徳は決して日本流にはいかぬ、何れも易姓革命の國民であるからです、山崎闇齋先生であつたと思ふが兎に角儒教一本館の先生に或人が支那の孟子は周の武王が殷の紂王を弑した事を論じて紂王は人民の心を失て居るから既に國王たるの資格がない故に武王が之を殺したのは一個人の紂といへる者を殺したのじや、乃ち匹夫の紂を殺したのだといふてをるが、さう云ふ筆法でもつて、支那の孔子や孟子と云ふ様な大聖人大賢人が先陣に立て若し我國を攻めに來たら如何なさるか云ふことを問へました、今日から見ると實につまらぬ問題であるが、其實時は儒道が盛でありましたから、天地間に孔子や孟子ほど有り難い者は無いと

いふ程に思ふて居つた時分ですから岡ふた、すると闇齋先生答へた、其時には吾々は共に忠勇を抽て劍戟を磨して之れに對ひ、縱ひ孔子孟子と雖とも悉く討伐を加へるに躊躇しないと云つたそうじや、我國は斯くの如く君臣親子の關係を以て等しく國體を擁護して行く是れが我國の世界列國に對して誇るべき唯一の寶であります、ソレデ吾々臣民たる者は國家の大恩に對して盡すべき本務とする處は何に有るか云ふに之を御勸語に配すれば「國憲を重じ國法に遵ひ一旦緩急あれば義勇公に率じ以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし」と仰せられてある、此の國憲を尊重すること、國法を遵守すること、義勇公に率することの三點が直接對國家的報恩の行持であります、之れを佛教に所謂四恩と云ふ上から申すと、家族といふのが父母の恩、國家と云ふのが國王の恩、次の社會といふのが衆生の恩に當る、之れに三寶の恩を加へて四恩と云ふて居ります、吾々は國家の一員たると同時に社會の一員です、故に社會に對する義務を盡さねばなりません、勸語の上に「朋友相信じ」「博愛衆に及ぼし」とあり又「公益を廣め世務を開き」と御示し下されてあるのが社會に對する義務であります、ツマツ教育勸語に御示し下された十五點の徳目は畢竟對自他の道徳上の標準を御示し下されたのである、此の十五點は共に相依り相補ふの關係を有して居ります、即ち恭儉己れを持すとか智能を啓發すとかいふ所謂文明の教育を受けて其身に恭儉の徳を守り且つ天分の知能を啓發する所の此の自己に對する義務が出来ないやうな者はどうしても親に對する孝行や、君に對する忠義といふ義務は完全に出来無い、それであるから吾々互は、他に對する義務即ち家族、國家、社會に對する義務を盡さんには先づ以て自己に對する義務を全ふしていかなばならん、自己に對する義務が行はれてこそ始めて他に對する義務が盡されます、故に自といひ他といふても決して相離るゝとは出来ぬものです、

斯様に理論の上から云ふても實際の上から云ふても、自他は一如であります、夫れ故佛教に於ては自他平等といふを倫理上の根本原理として居ります、而して倫理の實行に關する標準を示されたものは佛教

に八萬の法門がありますが、其等を最も適切に概括したのは禪宗の戒法であります。戒法も一切經の三分の一を占めて居る程であります。併し禪宗に於ては其等を十六ヶ條に總括してをります。尙ほ之を大別して三つに立ててあります。第一に信仰門の戒法、第二に誓願門の戒法、第三に實行門の戒法、之を信願行の三大門と云ひます。信は歸依三寶戒、願は三聚淨戒、行は十重禁戒であります。ツマリ此三大門は吾々の信仰上の標準三と、目的上の標準三と、實行上の標準三とで合せて十六ヶ條となる、之を十六ヶ條の佛戒とも、又は一心戒とも稱へてをります。實は之を一條一條毎に説明いたしたないのであるが、どうも今回は其れ丈の時間が無いから極簡単に説きます。斯う申すと大變むつかしい様に思はれるが決して無理な規律や及び難い苦行を説かれたのではない、苟くも人道を實行せんとする者、佛教に隨順せんと欲する者は是非守らざるを得ざる戒法です。梵網戒經には十重禁戒と四十八輕戒との二つに別けて戒法を示されてあるが、禪門では其の十重戒の中へ四十八輕戒を攝して居るのです。故に重といふ義は輕重の意味に見るよりも重要又は貴重なる戒法と見る方が宜いのです。凡て佛教道徳の原則は此十六ヶ條の戒法に網羅してある、通俗的戒法としては十善戒を説きますが、マウ一步進めたのが十重禁戒である、依て此の中には十善戒も盡く收めてある。

先づ初めの歸依三寶戒は前の禪門の信仰の章に演べた佛法僧の三寶に歸依する戒法です。次に三聚淨戒とは第一は攝律儀戒、第二は攝善法戒、第三が攝衆生戒である、此三條が誓願の戒です。此三條の目的を立てるのが佛菩薩である、之を解り易く申せば第一の戒は正惡の願である、乃ち諸の惡しきことは誓て爲すまじといふ大願心起すのである、第二の戒は作善の願である、乃ち諸の善きことは誓て行ふべしといふ大願心起すのである、第三の戒は利生の願である、一切の衆生は誓て之を濟度せん、獨り人間のみならず諸の動植物までも必ず慈悲を施し、恩恵を敷きて、之を愛護し、之を救濟せんとの大願を起すのです、以上を三聚淨戒と名けます、是れは佛心の根本であります、誠に簡單なもので

す、悪い事は誓てせまい善い事は誓てしよう、人間及び動植物皆誓て助けようといふ、此の三大目的を標準として是れから一切の心念行動を産出して行くのが禪の戒法、即ち實踐道徳の根底であります、誓願と申すは此目的を遂ぐる爲めに艱難辛苦を辭せず、且つ生き替り死に替り生々世々を盡くして必ず致しますと佛様に御約束をして必ず是れ丈の事を仕遂げやうといふ決心を起したのが誓願である、次に十重禁戒といふは乃ち

- 第一、不殺生戒、 生き物を殺すなよ、
- 第二、不偷盜戒、 他人の物を盗むなよ、
- 第三、不邪淫戒、 間夫姦通等の邪淫を犯すなよ、
- 第四、不妄語戒、 虚言をいふなよ、
- 第五、不酤酒戒、 酒を飲んで精神を亂すなよ、
- 第六、不說過戒、 他人の過や惡口を説くなよ、
- 第七、不自讚毀他戒、 自分を讚め他を毀りて高慢するなよ、
- 第八、不慳法財戒、 義の爲め法の爲め國の爲めには財産を慳むなよ、
- 第九、不瞋恚戒、 腹を立てるなよ、
- 第十、不謗三寶戒、 前に申した佛法僧の三寶を謗らず、常に正しき信仰に安心を定めよ、

之れが十ヶ條の禁戒です、之を細かに説明すると此の中の一ヶ條でも人道佛道の大綱を盡くし吾々の終身の寶となるべき甚深の意義を有する戒法であります。其中の一例をあぐれば、第四番目の不妄語戒乃ち妄語を云ふなよと云ふ一戒を持つ丈でも成佛の基礎を確立する程の廣大な功徳がある、梵網戒經に口の上の妄語を戒めてあるのみならず、心身の妄語をも誠められてある、乃ち心の偽り身の偽りです、第一に心の虚妄を云ふなよ、人を欺かんと欲するやうな心を起すなよ、神佛を欺くやうな了簡を起すなよ、

又自分の精神を欺くやうなことをするなよ、神佛を欺き、己れの精神を欺き、人を欺く、是等を心の三不實ともいふて何れも心の妄語である、次には身體で人々を欺くなよ、身體で人を迷はすなよ、彼の偽者商賈をして居る者坏は私は妄語を云ふのが商賈でありますと云ふ金看板を出して居るやうなものであるから罪は軽い、其虚妄の看板を見て喜んでだまされに行く者があるから世は様々です、近頃はまた虚妄が段々と増して来た、廣告のうそ、約束のうそ、それは種々無量である、元來凡夫世界のありさまは物事が轉倒して居る、馬鹿のくせに利口な振りをしたがつたり、金が無くても金持の振りをしたがつたり、奉公人のくせにさうでない風をしたがつたりするから忠實を缺き易いじや、トルストイ伯は女中を使ふにひや、あかぎれのある女中を一番愛すると云ふ、女中は女中丈の風をして居るのがそれが却て立派なのである、僅かな給金を貰うて居る女中が、タツタ一年一返の祭りの爲めに一年中の給金を着物にして丁うなんと云ふ馬鹿らしい虚栄心の者もある、是等は皆な身體のなりふりで威張つて見たがるのじや、私が東京の駒込に修學中友人の中に時計を持たぬ者が在つた、尤も明治二十三年の頃であるから學生で時計を持つた人坏はイクラモ無かつた、特に貧乏書生の吾々などは買うべき資力もなかつたから友人は淺草の仲見世で二錢八厘の時計の鎖を一つ買ふて来て帯にさげ、さも時計を持つて居る様なふうをして居つた、所が鎖だけぶら下つてをつたから終に其の化の皮がむけてきて體裁が悪い、ソコデ先生は大に困つて天保錢一つを鎖りにクツ附けて居た、サア今度は時間は何時かと聞かれると口があかぬ、イツでも八時の天保錢であるから、それを見付けられて、トウ、八時和尙と云ふ名前をとつた、先生くやしがつたと見へ、今度は更に文久錢を一つくつ附けて私の時計も今日からは八時十五分になつたといふて大笑ひしたことがある、それであるから吾々ね互が若し身體で人を欺くと云ふ事をすれば此身體はすぐ虚妄の看板を出したやうなものである、支那あたりの人間と商法の取引をみると、始めの見本は立派でも、彌々注文が濟むとその次からは同一のものを送らぬ、一段悪い物を送つて來ると云ふ惡

習慣がある、又西洋あたりの話しを聞くと、日本人は動もすると見本通りの物を送らぬことがあるといふ、始め一返だけはダマされても仕方が無いと諦めをつけても、もう二度目三度目になると中々油断ならじと思ふ所から、後には取引もしない様になる、之れに反して見本よりも一層確實な品を送る程に勉強すれば信用は益々厚くなるに相違ない、故に若し見本は立派でも實際の品物に虚妄が有るに於ては、ツマリ信用上非常な損害を來たし、欲の爲めにして欲の目的をも得ることが出ぬことになり、是等は身の妄語に屬する、それから口の妄語、これは別段説明する迄も無い、私共が皆さんに向つて斯ういふ宗教上精神上の御話をすると若し故らに誤謬の見解、私曲の意を挾むことがありて、それを皆さんが信ずることならば私共は精神界の邪説を主張して多數の人心を迷はす事になるから是等を妄語と稱して非常な大罪になります、斯様に十戒ともに皆な身と口と意との三業を清淨にいたすのである、即ち退いては三業の罪過を解脱し、進んでは三業の徳用を現はすのである、凡そ此世の苦樂淨穢の多くは觀念の如何によるものであつて、同じ月を見ても、悲しみの目を以て見る時はさねわたる奇麗な月影も亦た愁の種となる、又悦びの心を以て之を見る時は此上もなく愉快に眺められる、花の色鳥の聲も皆なさうです、故に心に信仰のある人は、此世に處し乍らも非常に愉快な、歡喜心を以て世を渡る、之が信仰の徳である、信仰の念感謝の情は萬事萬行を樂しく有りがたく且つ愉快に務めてゆく事が出来る、要するに我が禪門の戒法は第一に歸依三寶戒で、三寶に向つて最も眞正なる信仰を起し、次に三種の大誓願を起し、其上に佛事佛行を實行する、其實行の標準が十重禁戒である、此十戒を三大誓願に依りて應用する時は上は國家の感恩に報ひ、下は一身一家の調和を全ふし、退ては自己本來の面目を發揮し、自己本有の道徳を完全に發表し得るのである、之れが我が禪門の倫理の原則であり、又其の標準であります、而して其本源は法界平等自他一如の妙理より發するのである、換言すれば本性の慈悲の發現である、それ故に一切衆生を憐むとは必ずしも人間及び生物のみには限らん、吾々の精神の底から發して公平に湧

き出す所の慈愛の泉は天地萬物の上に遍なく行き渉りて器物一箇でも親切に之を取扱かひ他人の物でも大切に之を取扱ふやうになる、儉約と吝嗇との間の區別は一髪の動機に依て分れる、自分の物だから無暗と大切にする、他人の物なら幾等減つても使ふても構はぬといふ量簡があれば吝嗇となる、然らずして自他一如の上に物を惜むのは儉約の本です、本當の誠心誠意から他物に對して之を惜み之を保護するは慈悲孝順の徳性が現はれたのである、一杯の水一器の食も自他一體の觀念よりすれば我身の如く謹惜せねばならぬ、眞宗中興の蓮如上人は途中に米一粒、糸きれが一本あつても勿體ないとして押し戴いて拾ひ上げられたと云ふが、一塵一芥に迄も同情慈愛の念を施してゆくと云ふ人になりてこそ、始めて天下の人に向つて平等に佛様の様な大慈悲心を運用することが出来る、それでは自分の物も他人の物も無茶苦茶になつて悪平等に陥りはせんかと云ふ人もありませうが、決してさうでない、例へばランプの火の光線は公平である、公平ではあるが自然に近きより遠きに及ぼして居る、彼處の隅は嫌ひだ、此處の机は好きだなどと云ふ分別は無いが、天然自然に一間四方とか二間四方とか自分の力に應ずる範圍に於て輝いて居る、吾々人間の道徳慈悲もまづ以て君父に對して忠孝を勵み、夫婦兄弟に對して和順友愛の道を盡し、それより向ふ三軒兩隣と云ふ風に、漸々に自分の慈徳を擴張して行くから自から秩序が正しくなつて来るです、吾々は前にも云ふた通り天地の心をも具ひて居る其天地の心が同情慈愛の誠心となつて、自他平等と云ふ佛教道徳の原理を現はしてくる、茲に於てか世間道徳も佛教道徳も相一致し、佛教道徳は之れが主腦となり、世間道徳は之れが四肢となり、互に相依つて佛陀の徳を全ふする事になります。

第六章 禪の實踐

此に禪の實踐といふ事に付て御話する考であります、禪の實踐とは禪門の佛祖の教ふる所に依て禪門

の根本法門たる坐禪を實地に行つてゆく心得、及び方式であるから禪門に於いては最も大切な御話であります、即ち坐禪を實踐することを參禪ともいひます、尤も臨濟宗では參禪といへば重もに師家の室に入つて親しく提撕を蒙り點檢を受くることに名けてあるが、曹洞宗では坐禪そのものを參禪といひます、而して師家の室に入つて鉗錘を受くることを獨參と稱ひて居ります、それらの事も一通り御話をしなくては必要があらうと思ひますが、併し本當に實踐するには僧堂又は禪堂といふ坐禪をする專門道場に入つて自分を引立て、親しく提携して呉れる師家の指導を受けねばなりません、師家とはツマリ禪の教師で即ち僧堂の教育主任であります、此師家の指道を受けなければ實踐上十分に了解の出来難い場合があります、例へば食堂に於て御飯を食する時の儀式の如きもさうで有る、若し此壇上に於て支那料理を食べるには斯うしてねあがりなさい、日本の料理を食べるには斯うしてねあがりなさいと云ふて、私共其の禮式作法の御話を申したからとて、仲々實際の場合に臨むと聞た位では本當には勝手が分らんと云ふ様なものです、それ故に此に到底完全に御話し盡くす事は不可能の事であり、併し皆さんの内には御自分の御宅に居りて坐禪を實行して見たいと云ふ御方もございませうから私は出來得る限り皆さんの御宅で坐禪を實行して頂きたいと希望いたします、そこで只今は此等の方々を中心として極めて簡易なる方法に依りて坐禪の儀則を御話する考である、元來坐禪の儀則を示されたものには坐禪儀と云ふ書物がある、之れも曹洞宗に於いて用うる普勸坐禪儀と臨濟宗に於いて多く用うる坐儀との二種があります、何れも大同小異である、併し曹洞宗の普勸坐禪儀は宗祖承陽大師の御著述であつて、坐禪儀の完璧なるものです、それには坐禪の精神、本領、佛教の目的等を極めて親切に御示し下され、又坐禪の功德及應用に關する委しき御開示も有ります、此点に於ては古今東西に比類の無い程の完全なる坐禪儀と申しても宜い、字数は僅かである、又臨濟宗で主にも用ひて居る坐禪儀は、著者が不明であるが、四部録と云ふ書物の中の一になつて居る、これが臨濟宗の坐禪の模範に成つて居ります、之れも極めて

簡單にして能く盡くしてある、只だ承陽大師の坐禪儀に較べて見ると、何にか物足らん點が有るやうに思はるゝ、何れに於いても大體は一致して居ります、ソコで坐禪を實行する方法を述ぶるに就て、便宜上、三縁三調に分けて御話を致しませう、三縁とは三ヶ條の縁であります、縁とは助縁の儀で、ツマリ坐禪を確實に實行し得るに要する準備である、其三縁とは

第一に喧擾を遠くる事、成るべく騒がしき所を遠ざけて、静かな場所を撰ぶ、印度でも支那でも同じであるが、古は坐禪修行をする僧房は、凡そ一牛鳴の處に建てる、一牛鳴とは牛の鳴き聲の聞へぬ位の地をいふので、人家を距る事約八町程に建てるのです、皆さんが自分の家で坐禪をしようといふにはそんな準備は到底出来ないであります、又禪院にしても今日では成るべく人家に接近して建立し以て布教傳道を盛にせねばならぬと云ふ時勢でありますから、現今の世に於て坐禪を修するには、一牛鳴と云つて居られませぬ、本山とか特別の専門道場等を除くの外は先づ簡易法に依らねばならぬ、それではどうすれば宜いかと云ふに、先づ一家の内に於て比較的閑静な處心の静まり易い室を撰ぶのです、或は佛間とか離れ座敷とか又は一室も無い處ならば壁に向ふとかすれば自づと喧擾中に在りても喧擾を離るゝことが出来るものです、

第二には縁務を息むる事、坐禪をする時は總ての縁務を一時休息するのである、「坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て」一坏と云ふは坐禪の境界に熟練した後の話である、初心の人には先づ精神の妄動を静めると云ふ事が必要である、算盤を持って居る人は算盤を捨てる、筆を持って居る人は筆を放す、さうして一切の事務を一時休息せねばなりません、

第三には知識に就く事、乃ち相當の師家に依ることです、女子大學を卒業したと云ふ生徒でも愈々家庭の實務に就くと云ふ場合には實地の見習ひと云ふものが必要なが如く、固より教外別傳の坐禪の奥義を究めるには或點迄は書物や説明の上でも知れやうが、夫れ以上になると是非とも師匠ごりしてその提

携を受くる事が必要です、所が自分の家へ師家を頼んで置くこと云ふ事は出来ませんから、坐禪に關する指導者又は相談相手を一人なり二人なり定めて置いて時々手引をして貰ふが宜しい、例へば地方寺院の中、禪學に通曉した人に就て、坐禪の話を聞いたり方式に付て指南を受けたりすることが肝要です、自分が何か發明する所があつても能々點檢を被むらぬと邪見に落ちたり、又は増上慢になるの恐れがあるのでございます、

次に三調、とは乃ち身を調ひ、息を調ひ、心を調ふるの三つで直接の坐禪法であります、釋尊が佛の御位に上らせられた時、釋尊の徳を讃歎して色々の徳號を附して、如來とか應供とか世尊とか申し上げて、それか十號といふて十通りある、其の中の一つを調御士といふ、實に吾々の心といふものは亂れ易くして治まり難い、吾々の社會と云ふものも紊亂し易くして整理し難い、其紊亂し易い社會を能く治め、亂れ易い人心を救ひあげて調へ行くこと、丁度牛や馬を御する御者が自由自在に牛馬を調へるに同じいと云ふ所から調御士と申し上げた、又料理をするを調理とも云ふ、乃ち味を調へるからです、種々反對した物を集めて其味を調和させる、即ち砂糖をもつてくる、鹽をもつてくる、鹽と砂糖との味は丸で反對であるが、其から鹽と甘い砂糖とが能く調和が出来ると砂糖の味は鹽の味を助け、鹽は又砂糖の味を助け、互に相助け合つて中庸を得た立派な味が出てくる、今日吾々の精神もその通りじや、煩惱を全然捨てしまつたなら菩提と云ふ妙味も出て來ない、吾々の煩惱心は惜しい、欲しい、惡くい可愛といふことから種々の罪惡を造る、それでは惜しくもない、欲しいもない、可成り事も惜しい事もない、と云ふ様に全然無感覺に成つたなら、人間では無くて丸で死人である、其欲しい惜しいと云ふ心を充分に調へて行くのが坐禪の上の調へ方である、換言すれば修養である、例へば竹や絲の様な物を集めて樂器を作つて、音樂の音色を調へ出す、所謂音律なるものが能く調和してゆきますと、天地をも動かし鬼神をも泣かしむる程の音調が現はれる、吾々の心息を調へ、身を調へると云ふも亦之れに同じい、故に調へる

といふことが最も主要の點であります。

第一は調身、即ち身を調ふる事です。これは身體に關する坐禪の儀式作法であります。坐禪をするには主として坐法即ち坐はり方が必要である、坐はるには敷物丈は充分厚く敷かねばならぬ、皆さんの自宅に於て三十分や四十分間坐はる位ならどうでも宜いが一時間以上二時間も三時間も坐禪をする場合は、是非とも坐蒲と稱する敷物が入要である、坐蒲は圓く製し、直径一尺二寸、周圍が三尺六寸、中にはパンヤの様なものを入れ、成るべくふんわりするやうに柔かにつくるのです、さうして坐はる時には、脊髓の下と思ふ所へ坐蒲を當てるやうに敷き、身體の全部を支ふるのやうに、後の半身を支へる迄で、兩足は坐蒲の外に組むのである、次には結跏趺坐と云て儀式に依りて兩足を組み合せます、幸に我が國は天然の座禪國ともいふべき國柄であるから、足の組み方は違ふにしても座を習ふには頗る適當して居る、尤も只今では學校とか役所といふ様な所では、皆椅子に掛つて居られますけれども、日本全國の大部分は座はる方が十中の七八であります、又椅子に掛かる人でも、御宅に御歸りになると大概御座はりになつてござる、殊に日本の座方は支那や朝鮮の座方よりは餘程宜いやうである、支那や朝鮮の座はり方は稍座禪の形に似よつて居るが、所謂似て非なるものである、精神を安靜にするに云ふ點に於てはどちらか云ふと日本の座法の方が適して居る様であります、夫れ故に座禪の儀式どうりに本當の足の組方の出来ないと云ふ人、例へば婦人とか極く肥満した人等は假りに日本の坐法で以て稽古なされても宜い、尤も其時は兩足を左右に開いて臀部を直接蒲團につけるやうにするが宜いと思ふ、これでも坐禪の幾分の代用が出来る、先づ坐禪の坐はり方を説明の便宜上禪坐と名け、普通の坐り方を平坐と稱して説明して見やうと思ふ、禪坐に二通りある、結跏趺坐と半跏趺坐とであります、結跏趺坐と云ふは兩方の足を組合すので、是れが正則の禪坐であります、先づ右の足を以て左の股の上に安ずと云ふて、右の方の足を曲げて左の股の上にあげるのである、それから次には左の足を以て右の股の上に安ずと云ふて、左の方の足

を曲げて右の股の上にあげるのであります、慣れない内は随分足の痛いものですが、段々慣れるに従て痛くない様になります、後には普通の平坐より却て安樂になります、所が序ながら一寸注意をして置きたいのは、此の結跏趺坐の組み方と反對の坐法がある即ち右の足と左の足の組み合せの順序が前後反對にするのであります、佛様の御姿を御覽になると左の足を先きに組んで、右の御足を左の御足の上にしてござる、ソコデ、古來よりして坐禪の法に降魔坐、吉祥座と云ふ二つの名稱がある、之は餘計な説明でありますけれども、序でだから申して置く、降魔座と云ふは吾々の精神上的の惡魔即ち妄想煩惱を降伏するので、精神上的の惡魔ばかりでない、天地間に有らゆる一切の惡魔をも降伏する時の座法であります、最早大悟徹底して智徳圓滿の佛境界になると惡魔は退散して跡をどこのぬやうになる、ソコデ佛様の座法を吉祥座と云ふてある、吉祥とは佛様の大徳を稱揚した御名です、此、右足と左足を動靜の二つに分けますれば右は陽にして動である、左は陰にして靜である、吾々の精神は煩惱のために動き易いから、右の動に屬する陽の足を先に安住し、靜陰の足を以て動陽の足を抑へる、ツマリ靜かなるものを以て、動くものを抑止するの形ちです、乃ち散亂妄動の念を離れて靜寂無爲の佛境界に進んで行くこと云ふ向上的修行の意味になるから降魔座と云ふ、尤も此の事は私は禪門の本義として御話をするのじや無い、唯だ佛様の禪座法は吾々の禪座法と違つて居るでは無いかと云ふ疑問があつてはならんから申し上げて置くまで、ある、然るに佛様になるとマウ立派に大悟成道遊ばされて大寂靜の境界であるから其の大寂靜より起つて縁に應じて動き以て衆生濟度の大活用を現はさるのであるから靜の足を下にして動の足を上にしてをいでのです、これが吉祥座である、所が禪宗の本意としては此二種の形ちに拘泥はしません、當り前は先刻申した通り、右の足を下にし左の足を上にして組むのであります、座禪が久ふして疲勞を感じた時は足を組替ひても宜い、右と左とを轉換して吉祥座式にしてもよいとは天童如淨禪師が寶慶記の中に御示し下された直傳であります、次に半跏趺座と云ふのは、結跏趺座では足が痛く

てやりきれん、特に極肥満した人や、極瘠せた方にでもなると始めより結跏することが出来にくい、痛いと思ふて居ては工夫も何にも出来ませんから、さう云ふ場合に此の半跏跏座の法に依るのであります、乃ち右の足を曲げて左の股の上に安ずるのみであるから、半跏跏座と稱するのである、それから手の組み方は先づ右の掌を上に向けて左りの足の上に置き、次に左の掌を上に向けて右の掌の上に載せ、兩方の大指は相向へて指端が相狂ふやうにする、之を定印と稱して一種の印象であります、かく兩手を組み合せて一心に自己の精神を落ち着け来る時はその心が自づから其手の重ね合はした所へ止まるやうになる、乃ち全身の注意力を此處に集中するのである、サアさうなるとマウ他の妄念妄想は起らぬやうになる、眼に見る色も少しも邪魔にならず、耳に聞く聲も心を煩はすこと無い、一心が不動の状態になれば此世界中の萬物が悉く手の上に纏めらる様な心持にあるから、之を委しくは法界定印とも云ふ、法界を收めて掌の裏に歸するのである、之が兩手の組方です、斯く御話をすれば如何にも面倒なやうじやが實地を御覽になれば直ぐに覺ゆられます、うれから身體の姿勢は、成るべく厳正にして胸を前の方へ突き出す様にし、脊骨を真直にして壁立萬仞の勢を持つのです、座禪の専門道場へでも行て見れば随分姿勢は嚴格で百億の魔鬼も近づき難き程の儀相に見ゆるのです、能く師家が小言をいふてグニャグニャしちやいかん脊梁骨は天を衝き抜く程にせよ、全身に氣力を充滿させよなぞと云ふて示すのです、次には眼は常に開いて居ると云ふのが正則であるが、餘り張てもいかず、細め過ぎてもならず、丁度張らず細めずと云ふ中庸を得た目の開け方にするのです、座禪には幾分か反り身になつて居るから前方は五六尺位の所を見る位が丁度宜い、以上は調身の大綱であります、

第二は調息、即ち息を調へる方法であります、世間では強肺術などと申して肺を強くするの要術として呼吸を調へる方法がある、乃ち深呼吸の類である、凡て息を調へると云ふ事は吾々の身體機關に重大なる關係あるのみならず、心理上にも多大の關係あるものと見ゆます、東京の大久保に私の知己の長谷

川といふ禪僧がある、此人常に腸胃を患へ、加之肺炎を一度病んでから頗る肺部の健康を害して居る、先日私の處へ來られて、近來同師の創立せる全龍寺の正法會員なる軍人の大佐から教へられた深呼吸法を毎日行ふて居るが、大層身體の具合が宜い、其呼吸法は普通の深呼吸に類して居る、本より悟る爲めの禪的調息では無く、肺を強くする爲めの衛生的調息法である、其仕方は呼吸とも鼻よりする、さうして下腹をズツト前に突き出し、腹を十分に膨らして息を静かに出す、息を吸ふ時には下腹を引く心持で腹を十分に引きしめて息を吸ふ、腹部の扱ひが丁度普通の遣り方と反對です、それを毎朝十五分間位行ふやうにこの教でありましたが自分は五分から十分位迄を行つて居ると申されましたが、是等は直接座禪に關した事では有りませんが、多少の参考にもと思ひ御話した次第であります、されど座禪の時分の調息法は、長き呼吸は長きに任せ、短き呼吸は短きに任せ、ツマリ心を費さず、自然に任かせて調のである、別段腹を膨らかすとか引きしめるとか云ふ考を起さず氣をモマサ、心をアセらず、自然に任する時は自づと調ふものです、吾々の息と心とは相離れざる關係がありますから、息が調ふてゆけば心も從て静かになる、息の長短は其人の身體に依て必ず一定せない、息を調へやうと思ふて其方へのみ心を配ると、却て調ふると云ふ目的を達する事が出来ないやうになり易い、だから息は必ずしも長い短いを論せず唯だ我が精神を打ち静め、身體を安らかに且つ穩かにすれば宜い、それから是れは調身の方にも關してをるが座禪をする際に座禪儀に示されてある通り座り込んだ時此軀を幾分か、左右に搖振するので、即ち右と左に少しづつ、軀を動かすこと七八度するのである、之れは筋肉の不調和の爲め足が痛んだり、筋が締つて居つたりしては自然に痺がきたり、座に堪へなかつたりするの恐れがあるから、其等を豫防する爲めに軀を格別目につかぬ位の程度で七八返位動かし充分身體の各部を整理してから座はり込むと、一層身體が調ふて參る、その際に欠氣一息すといふて溜息をフーと呼吸するので、之れは座禪をするに當り手を組んだり、足を組んだりする際に、吾々の呼吸が多少滞りを來す氣味がある、

それを伸やかにする爲めに溜息をします。之が調息の方法であります。座禪の實行法に關する御話
 は至つて面白くないやうでありますも之れが一番大切なことです。又息が充分調ふて居りませんと種々
 の妄覺幻覺とか錯覺といふやうなものが起るのです。例へば二十分間か三十分間も熱心に座禪をして居
 ると身體が何んとなく重くなつて化石でもしたかと思ふ様な心持が致したり、或は軽くなつて今にも飛
 び去りはしまいかと思ふ様な感じがしたりする様な事もある、總て吾々が萬縁を放捨し有らゆる人事上
 の關係を離れ専ら一心を落ち着くる事に熱注して居る中には色々精神の上に變つた現象をも呈する事が
 あります。是等は皆な息の調はない結果である、依て此の調息法は至極大切な事でありませぬ。

第三は調心、是れは心を調へる法で、最も緊要なる法です。此の調心法を承陽大師の普勸座禪儀には

「箇の不思議底を思量せよ、不思議底如何んが思量せん、非思量、是れ則ち座禪の要術なり」

と御示しになつてをる、不思議とは思ひ量る事の出来ないことです、座禪をして何にを思量するかとい
 ふに思ふ事も考へる事も出来ないものを工夫する、乃ち研究の出来ないものを研究する、大變六ヶ敷い
 注文です、然らばどう研究したものであるかといふに非思量と御示しなされた、即ち非思量になれ、是
 れ座禪の要術だと教へなされてある、是れは何んだか一向に譯が解らんやうな六ヶ敷い道理だが、此が
 一大事です、吾々が或は煩惱を断じやうと思つたり、或は精神を調へ様と思つたりする所の吾々の心意
 作用を思量といふのである、而して非といふは物をハチ除けることをいふのでは無い、解り易くいはば
 脱落といふ意味だ、禪宗にては「參禪は身心脱落なるべし」といひます、此の脱落といふ字が面白い、
 脱は解脱の意で今迄籠の中へ這入りて居た鳥が籠の外へ脱け出して中空を飛び廻るといふやうな形です
 吾々が迷悟凡聖の名に迷ひ、實に迷ひ、それらの束縛を受けて自ら妄想執着の窮屈な籠の中に居つたの
 が斷然其の束縛を離れたのが脱の義である、落とは洒落と續いて身體に塵や垢が附て汚れて居たのを、
 スツかりと洗ひ落してしまつた形であります、即ち吾々の一身上境遇上何等の穢れを留めざることであ

る、要するに吾々の心にも毫末の束縛なく、支障なく、汚染なきをいふのである、凡夫は此身の爲めに
 苦しみ、此身の爲めに悩む、それが脱落の境に至れば心も邪魔にならず、身も邪魔にならず、心身共に
 自由安穩になつたのが非思量であります、吾々の身心などは實に妙なもので、れ互が極めて健康である
 と、手でも足でもチヨット邪魔にはならん、夜分寝て居ても手は何處に在るだらう、足は何處にあるだ
 らうといふことも忘れて居る、又うんな考も起さない、乃ち健康状態の時には自分の身を自分で忘れて
 居る、吾々の心も極めて平穩なる時は心が心を忘れて居て少しも邪魔にならん、所が少し身體でも悪い
 所があると、さあ邪魔になつてならぬ、例へば眼が悪いと暇さへあれば眼の處へ手をやる、頭が重くな
 ると間がありさへすれば頭に手をやる、足でも膝でも痛みがあれば其處に手をやらんければ承知しない、
 何處か一つ缺點があつても邪魔になる、指が邪魔になる、悪い所が邪魔の存する所で
 ある、それが達者な時分にはどんな大きな身體でもすつかり忘れて居るが、少しでも健康を害しますと
 と忘れる所でない、思ひ出す位じやない、それが氣になつて、何事も手につかぬ、それが苦になつて睡
 る事さへ出来ん、れ互の精神状態も亦た是の如く精神の源泉が澄淨（きんじやう）に復し健全になつてゆくと、此世の
 中にありて活動して居り乍ら、少しも身にも心にも煩悶、苦痛、束縛はない、朝から晩迄心機が運轉し
 て居ても其運動が少しも邪魔にならん、是れを無礙（むがい）の往來といふのである、所がさう云ふ様に穩かな
 る精神状態になると云ふ事は頗る六ヶ敷い、併し座禪三昧に入り端身正座し出入の息を調へ不思議底を
 思量し去る時は自然に身心兩つながら平和安穩になる、之が段々日を重ね月を積んで、此の不思議底
 の工夫を繼續し去る時は自づと鐵石の如き膽力を養成し、遂には妄想分別以外に、一種絶対の愉快を感じ
 て来て、身心のそのま、が自から天地の大道と一致すると云ふ所迄進んでゆく、之れが禪定の功徳であ
 ります、所が此非思量に達することは容易のものでは無い、或る人が自分も座禪と云ふものを一つ行つ
 て見やうと思ふて、頻りに座禪をして居たが更に何等の功も現はれない、七日間も座禪をした結果、漸

く七年前に貸した金を思ひ出し、成程座禪は功徳利益があると申したと云ふ話がある、無理に心を静めやうと思ふて心配すると却て様々の煩惱が湧出て、終には魔窟に陥る事があります、昔し或る禪僧が趙州狗子の話と云ふ公案を工夫して居つた、此公案は或る僧が趙州和尚に「狗子に却て佛性ありや又無しや」と問ひますと、趙州は「無」と答へられた、之を趙州無の字の公案と云ふて禪門では喧ましく云ふて居る六ヶ敷い公案です、趙州何に依て無と云ふ、是れ有無の無にあらず、空無の無に非ず、畢竟如何と、頻りに工夫して居りました、所が或る晩座禪をして居りますと、真暗い晩であるのに自分の目の前が俄に明かるくなつた、驚て目を見張て見ると凡そ一間四面位もあろうといふ大きな犬の頭が現はれ口を開けて向ふて居る、ソコで此の坊さんが驚いたの驚かないのといふてマウ恐くてたまらん、其晩には他の所の室へ逃げ込んで泊りました、翌晩には御経を讀んだり佛様を念じたりして居ると、夜中に至つてまたもや大きな犬の頭が現はれて来た、それから直ぐに方丈へ行ってしかん、其模様を語つて師匠に其の譯を尋ねました、すると、方丈が云はるゝには汝は大分うまい事を云ふぞ、工夫の力強きによりてその様な者が現はれたのだ、そりや甚だ結構だ、畢竟汝が熱心の致す所である、それは狗子が汝を濟度して呉れるのだと云はれた、(僧)馬鹿らしい、ろんな犬の頭に濟度して貰うなどは、人間が動物に濟度されるとはサツパリ有り難くない、全體どうすればあれを退ける事が出来ませうか、(師)一體其犬はどんな顔をして居つたか、(僧)それは頭ばかりで、大きな口を開いて私に喰ひかゝらうとして居りました、(師)然らば今晚も出て来るだらうが若し出て来たら其犬の口の中へ汝の頭を突込め、(僧)ソリヤいけません、あんな大きな犬に噛まれたら大變です、犬の口に頭を入れるなんて云ふ事は命に拘はります、(師)イヤ安心をせい、山僧が請合てやる、大丈夫だからと云はれた、其坊さんは其晩も一心に座禪工夫もこらして居りますと、其の眞夜中頃に至りて亦も大きな、犬の頭が口を開いて、凄じい勢を示して現はれた、其時は彼の坊さんは覺悟をした、マウ吾は一命を擲つて佛道修行をしやうと思ふ

たのだから、寧ろ此場で道の爲めに命を捨つべしと觀念して忽ち犬の口の中へ自分の頭を突き込んだ、すると頭がカチリと何物にかブツツカツタ大きな音が致し大層痛みを覺けた、それから能く之を落着いて見ると、今迄犬と思つたのは犬では無く函櫃と云ふて座禪の床に在る道具や臥具を入れる押入の様な物がある、其中へ頭を突き込んだのである、此の坊さんは其の時忽然として省悟したといふことである、餘り一心に狗子佛性の公案を工夫した所から、終に一種の幻覺を起して犬の形を見たのである、是等は皆な神經の作用であるが、座禪中に自分の妄想でもつて色々の幻覺を起したり又は一種の變體なる感覺を引き起したり、或は空中に花を見、或は闇の中に光明を認めるなどと云ふ事は熱心の結果往々ある事でありますが、ソコに腰を落ち付けず更に向上一番し去る時は本來無物に歸して何等の幻影もない様になる、吾々が此非思量を望んで無暗に悟らうと思ふと却て益々悟に遠ざかるやうなことになる、迷いまいと思ふて氣をもむと却て益々迷が湧きあがつて来て、種々な現象があらはれる、此等の閑妄想を打破し去るには時として公案を授くるの必要がある、尤も公案を授けるは參禪上大悟徹底せしむる方便であるから、必ず授けねばならぬと云ふ譯ではない、禪宗では臨機應變の手段として之を授ける、參禪の方便としては餘程効果ある手段です、其得失是非は師家の腕力と學人の精力に依るので、ナラ公案とは公府の案牘と云ふ事で例へば政府の法律が既に議會の決議を経て、天皇陛下の御裁可を蒙りて、マウ立派な決定案となり、天下に布告しても差支ない様になつて總理大臣の案頭に上つた案書の意である、かく決定した公案は一たび之を公布すれば全天下は盡く之れに服従せざるを得ざるものである、それと同じく、昔の大善知識が佛祖單傳の宗旨に關する訓示及び問答の如きを公案と申します、是れば決して私案では無い、佛祖の堂奥を打開した公案であるから萬世の模範天下の龜鑑となすべきものです、故に此案書は一度之を世の中へ出すと千年万年を通じて變易なき最も大切な宇宙の大法律である、即ち禪道の典型であります、吾々は此公案を拈提して之れに向つて工夫をこらせば自から佛祖の妙心に歸

するのですからして遂に大悟徹底の境界に達することが出来る、されば必ずしも佛祖の言教ばかりをいふのでは無い、ツマリ萬古不變の真理の現はれたものが公案である、故に禪宗の本領から見れば天地萬象は皆な真理の現はれて悟りの姿であるから、一草一木一塵一芥も總て公案といふことが出来る、此一本の扇子も此一瓶の清水もそのまゝが皆天地の大公案であります、此公案なるものは常に天地に充滿して居る、故に承陽大師は佛教といふは森羅萬象なりと仰せられた、或時は大なる響を現はして、吾々に佛陀の大法輪を説て聞かせ、或時は大なる姿を現はして、吾々に佛教真理の形を見せて呉れる、眼を開いて山を見ると、山には自ら清淨法身の徳が現はれて居る、耳を傾ければ、「松は吹く説法度生の聲」で、松吹く風にも大乘佛法の甚深微妙なる響をなして居る、其天地の佛法を聞き、天地の佛體を見るにはどうすれば宜いかと云ふに無限絶對の佛法佛體を一言半句若しくは一棒頭の中に收めて、それを公案と稱して授け、その公案に向つて猛烈に工夫をさせるのである、併し座禪上の工夫は學問上の研究では無いから、論理學上から云へば斯うであるとか心理學上から云へばあゝであるとかといふ様な分別計較は許さぬ、佛性無なら無の公案を提けて徹底無になり切つてしまはねばならぬ、即ち非思量の境界に徹底するの目的である、又その公案なるものは所謂教外別傳であるから筆にも寫されず、舌にも説かれず文辭の及ばざる所の真理其儘を直覺させるのである、故に沒滋味の語と云ふて意味も趣味も無い那一句を授けて公案とするのである、意味なし趣味なしといふは妄想分別の杜絶した端的を指すのであるから其の無い所に眞の大滋味があるのです、例へば水を飲で甘いと云ふてもどんな味かと問はれば説明はできぬ、矢張り米は米の味ひ、水は水の味ひであるより外はいはれぬ、其の處に妙味が存するのである、私の知人に一升餅をも食盡すと云ふ、大變餅の好きな人がある、其人は一升の餅を食べるのにも何にも外の物を附けない、砂糖とか、アンとか、キナコとかいふ餅に附ける物が傍に在てもそれを附けぬ、若し外の物を附けたり何にかすると大變な餅の味が消れると云ふてを、それじや餅の味はどんなかと云

ふと、餅は矢張り餅の味がすると云ふて居る、味が在て無い、無くてある、ツマリ有るとも無いとも、説明し盡すことが出来ぬ、ソコが眞の妙味です、それが沒滋味、若くは沒可把とも云ひます、沒可把とは把るべき無しと云ふので、摘み所の無いことです、上に申した趙州の無の字の公案の如き、是れです、これに向つて如何々々と工夫を下します、サア其の無を捕へて見よ、無を働らかしてみよ、無を喰へて見よ、無の中にはどんな味がある、無の中にはどんな響があるか、そんな物は總て無い、彼れの此れのと名を附けたなら無ではない、名の附かぬ名が有るだらう、道理の判断を超へた道理があるだらう、其道理をひとつ研究してみよ、無理な話のやうだがソレが眞理の所在じや、又臨濟門下には能く隻手の聲を聞けといふことを申す、是れ亦た一の公案です、兩手の聲は誰でも聞くが隻手の聲を聞けなぞと云ふと尤で謎の様に思はるゝが、決してそうでは無い、片手の聲を聞く耳がなければ禪味は解せられぬ、禪宗の問答には妙な語が古より澤山あります、尾張の黄泉和尚と云ふは近代に於ける名高い禪宗の大知識であつた、所が或禪僧が尾張の黄泉と云へば天下に名高い高德であるから、どの位な力量があるか一つ參得して見やうといふ見識で、黄泉和尚の所へ行きて問答を始めた、久しく黄泉と聞く未審し麥香煎か米香煎か」と問ふた、黄泉の名は聞て居るが麥か米か凡夫か佛か、高く止つて居るか、低く構へて居るか、絶對か待對か、世間的であるか、出世間的であるか、斯ふ云ふ問ひである、すると黄泉和尚は「試みに喫却して看よ」と答へられた、サア試みに食へてみよ、人に聞ては解らんぞ、麥の味か米の味か自ら喫却してみよ、自ら食へて見た佛法で無ければ役に立たぬ、繪に書いた餅は空腹の者には半文の價も無い、聞くより食へて見よ、スルト其禪僧も仲々シツかりして居る、忽ち「喝」と一喝を下した、試みに食へて見よと、曰はれたが、食べるの喰へないのといふやうでは二見に落ちて居る、そんな議論に涉る、佛法は何にもならぬ、喰へなけりや解からぬなど曰はれるはトボケてござる、佛法は食へ物とは違ふ、眞實禪門の活眼を開いて居るならば食へない中に其味を知り、聞かない中に其聲を悟つてゆかねばなら

ぬ、それに喰べて見よなんと云ふ此和尚頗る毫録して居りはせぬかなと云ふので大喝一聲ドナリ付けた大變な見幕です、併し惜い哉未だ悟り嗅い、味噌の味噌嗅きは上味噌で無い、黄泉和尚はニッコリ笑て「ア、むせたなむせたな」と曰はれた、實に學問をするに學問に咽せる、高き位地に上ると位地に咽せる、悟を開くと悟に咽せる、公案を工夫すれば工夫に咽せる、昔し乞食桃水和尚が天津の町で草鞋造りをし居られた時、和尚に歸依厚き立派な僧侶が錦の袈裟を掛け輿に乗りて通りか、り和尚を見て相見した時、桃水和尚其人の手を把て、貴様は諸侯に可愛がられて居るやうじや、多數の僧侶は皆大名酒に酔つて其本心を失ひ、徒らに名利の奴隷となるが多い、吾れはマウ再び此世に於て貴様の顔を見る事はできんかも知れぬから、今逢ふたを幸に遺言をして置く、どんなに出世をしても、必ず大名酒に酔ふなよと云はれたといふ話がある、實に貴き教訓です、立派な名僧になりましたも、吾は諸侯の信用を得て出世することの出来たのは一身の榮譽であるなぞと思ふは既に皆大名酒に泥酔したのです、所謂諸侯に咽せてしまつたのです、金銀を貯へると金銀に咽せる、名譽を得れば名譽に咽せる、慈善を行ふ人は慈善に咽せる、凡夫の生涯は見る物、聞く物に咽せ、作すこと爲ることに酔ふて居るのである、此禪座の正當時眞實非思量の境界に達したならば如何なる事物に接するとも寸毫の束縛を受けず、一步も動着もしない、所謂捕まへ所の無い、又味ひの無い公案に對する工夫の効果が現はれて自然に本性の智徳が現前して来るからであります。

彼の劍道と禪機とに於て名高かりし明治維新の功臣たる山岡鐵舟居士の取つて儘きの話と云ふのがある夫れは駿河國の額長の長四郎の話です、此者は性來額が長かつたから人之を呼んで額長の長四郎と云つてをつた、此者は元は泥棒であつた、厄介な額長が在つたものです、それが常に二三百人の子分をもつて駿遠參の三箇國に涉つて始終悪い事を働らいて暴れ廻つて居つた、或時一人の禪僧が京都から江戸へ參らうと云ふので沼津の宿へ泊りました、其の泊る日に途中の茶屋で長四郎と一緒になつた、處が彼の

僧は江戸表の役所の僧と見へ禪僧にも似合はず金がありそうに見れた、ソコで長四郎は、私も江戸近くへ參る者でありますから、旅は道連れとやら、これより御伴いたしませうなどと云ふて、トウ／＼同行の約束が出来て其晩は沼津で同宿する事になつた、處が同宿して居て盗んでは露現をするの恐れがあるから、熊と其晩は他所へ出掛ることに決心し、宿へつくさ長四郎が明日は正七ツに戻つて来ますが、是から一里計りある田舎へ要用があつて往きて參りますと云ふて旅店を立つ出でた、固より其道には巧みなる奴であるから、時刻をはかり直ぐ引き返へして宿屋の高欄を乗り越、庭の小蔭に身を潜めて、夜の深けるのを待つて居た、追々と夜も更けて下や二階の様子を窺ふに、最早や寂々寥々として誰も起きて居る者は無いやうなやうす、マウしめたと思つて座敷の前に至りソツト障子を開けて中を窺ひ見ると、ボンヤリと行燈の火がとぼつて居る、蒲團は敷て有るが和尚の姿は見へぬ、和尚が居らんのみならず、凡そ三四尺もあらうと思ふ程の栢の樹が一本蒲團の真中に突き立つて居る、之を見た長四郎は非常に驚いた、之はどうしたことであらうと、恐る／＼坐敷へ這入らうと思ふと、今迄栢の木と思ふたのがハツト思ふ間に直ぐ禪僧の姿に成つて端然として坐禪して居る、さすがの長四郎もこれには恐れ入つた、(禪僧)此前は大層早く歸つて来たがマウ用事は済んだのか、ハイ濟みましたとは云ふたが、餘りの不思議に却て自分の方が恐くなつてそのまゝに臥床に就いた、其翌日に成つて長四郎は考へた、どうも此和尚は魔法使ひではあるまいか、豪い奇術を覺て居る、昔の大蛇丸は蛇に成つた、自來也は墓に成つたと云ふが、蛇や墓は動物だから人に殺されるの恐れがある、栢の木なら大丈夫である、泥棒でも栢の木に化ける秘傳を知つて居たらそんな所へ這入ても恐ろしくはない、是は面白い魔法だわい、幾十人に圍まれても庭の隅で栢木に化けてしまつたら是れ程大丈夫なことはない、泥棒としては第一等の遁身術である、よし一つ此和尚をダマして秘密の方術を授つてやらうと思ひ、翌日箱根の絶頂へ往き、和尚さん向ふの林の中で休んで行きませうと勤めて人なき處へ這て行き、時に和尚さん前さんは一體何に者か、私し

は出家じゃ、虚言を云つて居なさる、出家があんな物に化けるなぞと云ふ事があるものか、坊主の化けものなると云ふは聞へた事が無い、お前さんは化者か、魔法使ひか、一體私を何んと思ふて居なさる、貴様は人間だ、人間は當り前であるが、私の商買は何んだと思ひなさる、貴様の商買は何にか知らんが、額が長くて、目附がチットキヨロづいて居るが、まさか泥棒じや有るまいな、所が私は泥棒も泥棒、金看板の泥棒だ、今日迄は恐いと思つた事は無いが、昨夕お前さんが栢の木に化けたには私も驚いた、併しお前さん旨い事を知て居るね、どうか幾等でもお金はあがるからあの化け方を教へて下さい、否など云ふならお前さんの命を貰いますぞと、長四郎一生懸命に強硬談判を始めた、和尚は考へて大に悟る所があつたから、さう云はれちや仕方が無い打明けて云ふが、實は己れも泥棒なんだ、之を聞いた長四郎どうもさうだらうと思つた、さうすりや矢張ね仲間じや、どうか是非私に教へて下さい、いや教へてはやるがチット六ヶしいぞ、縦ひ六ヶしくつてもやりませう、それを覺けたらマウ私は石川五右衛門以上になれますから、どうぞ教へて貰ひたい、それじや教へてやらうが、昨夜お前は禪宗の公案と云ふものを工夫したのだ、昔し趙州和尚といへる名僧に或る僧が如何なるか是れ祖師西來意と問ふた、すると趙州和尚は、庭前の栢樹子と答へた、これは昔し達磨大師が西の方の天竺から支那へ來られたが、其達磨大師の悟りとはどんなものかと問ふたのだ、然るに趙州は庭の前の栢の樹じやと答へた、昨夜自分は其庭前の栢樹子と云ふ公案を、ウント工夫して居た、それで私は栢の樹に成つたのだ、貴様も庭前の栢樹子と云ふ公案に向つて坐禪をして工夫をすれば、必ず栢の樹に化けられる、工夫の仕方はこれくゞであるぞ教へられた、長四郎は煙にまかれて、これはどうも中々六ヶしいからできるか知らん、なんの六ヶしいとはいふもの、昔の自來也杯も皆なこう云ふ行をして、墓にも大蛇にもなる事を覺けたのであろう、若し之を工夫しても貴様が栢の樹に化ける事が出来ななら、私は何時でも首でも何でも渡してやる、其代り之が出来たら私の弟子になるんだぞ、私は大泥棒だから己れが子分にしてやる、(長)こ

れは永くかゝりませうか、(僧)さうだ早く二年遅くて三年、さうして此の行は晝夜機まらずやらねばならぬぞ、どうもさう永くかゝつては困る、モット輕便な方法は有りますまいか、(僧)馬鹿を云へ手前は未だ二十だいらう、若いものが、二年や三年の修行は何んの事だ、(長)栢の木になることを覺た大泥棒となつて天下に名を揚げやうと云ふ長四郎はドウやら決心した、そこで坐禪の方法を傳へて下さいと云ふので箱根の絶頂に於て工夫の仕方を教へて貰ひ、それからと云ふものは、足の痛いのを我慢して庭前の栢樹子を一生懸命に工夫して居た、其中に悟りは容易に開ける筈もないが、心は段々と平穩になつて來た、心が落ち着いてくると同時に天性に具せる良心の光りが現はれて來た、悟りの方は一向五里霧中に彷徨する有様じやが、精神が靜まるに従つて、噫今の吾が身は恥かしいことである、今迄の量見は實に悪るかつた妄りに他人の金銭を貪り、人に迷惑を掛け、人を苦しめて以て自ら一時の快樂を貪はるとは何たる悪業ぞや、ア、誠に濟まん事であつたと云ふ懺悔心が忽然として現はれて來た、それから自分が益々濟まないくゞと徹底悔悟し、しかも自分から其心が起つたのであるから、遂には數百人の子分共を集めて、貴様達も今までの悪事を止めて是れから正業に就て呉れよと云ふて、有金其他の財産は悉皆子分の者共に配布して遣り、自分はマウ殆ど無一物の身となり、以前の罪滅しと云ふ心で今度は俠客と成り、人を助け、人を濟ひ、自分の身は生れ代つた様な好人物になつて、世間からは義人として尊敬せられるやうになつた、此處に於て江戸に至りて自分の師たる彼の和尚さんを尋ねたら芝の金地院と云ふ臨濟宗の御寺に居る和尚であつた、それから直ぐに其弟子と成り、俗人の姿では有るが、圓元に於て生涯坐禪を修し、しまいに餘程禪定力も進み、六十餘歳で立派な往生を遂げた、其長四郎が死に際に至り子分の者共が來りて毎日くゞ看護をして居つたが、マウ息を引きとらうと云ふ時に、一同の者に告げて云ふには、人は死に際に念佛を申すと、佛の導きを頂くとやら、人は死に際の信心と誓願とが大事だと云ふが、私は今日迄此邊邊にマダ多くの罪の借金がある、大勢の人を苦しめた罪業の借金

はその利息も高いさうな、一粒萬倍の罪の利息を拂ふのは中々容易で無い若しや地獄へでも生れた時は借金なしが出来ない、最後の念願として、私はマウ一度此世へ生れて来て佛様の行持を修行しやうと思ふがね前途も精々善行を修めて今迄の罪滅しをするがよい、自分は再び此願長で生れ替つて来たいから、御念佛の代りにごうか願長の長四郎と唱ひてくれ、一同も變だと思つたが當人の頼みであるから、一同が聲を揃へて願長の長四郎くくくと唱ひた、長四郎自身も之を唱ひつゝ歡喜の顔にて手を合せ笑を含み眠るが如くで往生を遂げたさうであります、之を山岡鐵舟居士が、御得意の話として屢ば聞かされた事があります、今日の吾々は修養の力に依りて人格は随分改造する事も出来やうが、此身が直ぐに庭前の栢の木になると云ふ様な事は是は特別であらう、併し一たび此没滋味なる公案に向つて專一に工夫する時は、自然と己れが我れがと云ふ我見は無くなる、修行して息まざれば徹底無我大解脱の境界にも進み、此身の全體が公案になり切つてしまふことが出来る、隻手の聲などは何でも無い、未だ隻手を出さざる以前に、天地に震ひ渡る程の響のある事を聴取するのであらう、若し師家が隻手の聲は如何じやなぞと云つたら、其手を一つ叩きつけるが宜い、吾々は空劫以前、即ち此世界の出来な以前から此聲は聞いて居る、今になつて隻手の聲なぞは何の閑妄想であると、師家を取て投げる位な勇氣を鼓して猛烈に工夫して見なさい、斯く精神を込めて參禪せば自然に庭前の栢樹子と云ふ意味も分かれれば又非思量と云ふ境界にも爲れる、さうして自分の精神が始終寂靜不動の地に安住して花街柳巷に在ること深山幽谷の如くである、そこに於て始めて「坐禪せば四條五條の橋の上、往き來の人を深山木に見て」と云ふ境界になれる、

彼の有名なる東阜心越禪師は、水戸黄門光圀卿の御歸依を受けられた人であつた、中々大徳な御方であつて、殊に豪邁なる膽力があつたは全く禪に依りて鍛鍊せられたものに相違ない、或日黄門卿は心越和尚を招き、チア今日は無禮講で、二人限り水入らずに樂まうじやないか、(和尚)有り難うございます、(光圀

卿)今日は愉快に山雲海月の情を語り暮さうといひ乍ら大盃を擧げチア手が手づから酌をしてあげよう、心越禪師は多少酒を用ゐられたものと見ゆ、それじや有り難く頂戴いたしませうといふ中にかれこれ一合以上も入らうと思はれる程の盃に近侍の者が溢る、計りに酒を注ぎました、和尚は夫れを手許に引きよせて、今や飲まんとする一刹那、耳元に於てドーンと大砲を打つた、恰も百雷の一時に落つるが如く、實に凄しい音響を發した、定めしこれには和尚も驚くだらう、手元が狂つて酒でも溢しはせぬかと、豫て水戸卿が膽力試験の意で巧まれたことであるから、ジツト見てござつた、所が心越禪師一向知らん顔、丸で雙の様である、公もサツパリ張り合が無い、夫れ程な大音響もチツトも感ぜないやうじや、卿の曰はれるにはイヤ和尚サツ驚いたらう、併し武士たる者として城中の習ひだから氣にかけられるな、今太平の御世とは云ひながら、治に居つて亂を忘るべからず、依て常に戦争時代の如く大砲術を訓練せしめて居るのだ、和尚は平氣なもの、ハ、ア左様でござるかといふたまゝ、驚いたとも驚かぬとも何とも云はない、恐れながら只今戴きし御盃謹んで御前に呈します、和尚は前酌をして呉れるか、今日は私が酌を致しませうと云ふと注いだ、氣に入つた和尚の盃であるから、光圀卿も悦んで注いでもらい、今や此方へ手を引かうとすると和尚は「喝」……と大喝を下した、さうするとさすが天下の豪傑と云はれた光圀卿も出し抜けの一喝にブルブルと手元が振い酒がバラバラとこぼれた、(卿)和尚そりや何んだい、(和尚)ハイ是れは禪僧のならひ悪からず御思召下て置かれるやうにと云つて直ぐ返報をされた、それから水戸卿は心越禪師に一層厚く歸依を致されたと云ふが、斯の如き膽力こそ實に不動の大勇とも謂ふべきもので中々一朝一夕に得られるものでない、ごうか吾々御互も常に精神を鍛鍊して、坐禪をする時斗りてなく、平常の一擧手一投足の上にも禪的觀念を以て、非思量の心地即ち大無我の境界に進むの修養がありがたいものです、坐禪を實行するには決して時と處とを擇ばぬ、前に三縁と申したのは、正則に修行する所を示したのです、忙がしい方杯は平常に心をかけなされ、多少心の動いた機會

が却て宜い、腹の立つた時、非常に脳を使つた時、心配事のあつた時、極悲しい時、などが寧ろ好機會です、れ宅の佛間の様な少し静かな所で、縦ひ二十分間でも三十分間でも坐はり込んでごらんなさるが宜い、時としては坐禪の儀式によらず平坐のまゝでもよいから、深呼吸的に調息することは必要であらう、夜分なれば、寝る前に蒲團の上に坐はる、二十分間でも三十分間でも宜い、之は決して禪宗の信者となつた人ばかりに勤めるのではない、眞理の信者になつて坐禪をするのであります、モツと適切にいへば自分の本心の信者になつて坐禪をする、自分の身體の信者になつて坐禪するのであります、之だけは是非實行して貰ひたいものであります、併し此禪の効果を奏するには平素の心得即ち平常の修養が最も大事であるから、次に於いては修養上に就て話を致す積りであります、

第七章 修養の標準

茲に最後に修養の標準と云ふ事に付て話を申し上げてをきまします、此修養と云ふ語は今日の流行の辭であるが、佛教に於ては古來より之を修行とも、行持とも、操行とも稱して居ります、修行と云ふも、修養と云ふも、別に變りはないので有りますが、併し此修養と云ふ語が最も面白い、意味の強い熟字である、申す迄も無く修といふ文字の本義はホジシ乃ち乾した肉と云ふ義であります、肉を乾し固めますには、先づ肉の腐敗分子は悉く之を取り捨て、純潔なる肉だけを十分に乾し固めますれば、縦ひ三ヶ月たとうが五ヶ月たとうが立派に保存して置く事が出来る、今日の吾々の修行も亦其通り吾々の精神を腐らす所の私情私欲、煩惱妄想の腐敗分子は悉く切り捨て、しまふのです、詞を換へて申せば從前の性癖を矯正する、即ち悪い癖を改める、所謂己に克つて私を制するのです、そうして充分に鍛鍊を加へて心を中正の處に落ちつけて健全に固めてしまふ、之が修と云ふ文字の意味で有ります、次に養と云ふ字は云ふ迄も無く培養すること、總ての物は皆な養育の力に依て健全に成長致します、田畑に於ける穀類庭園に於

ける草木の如きも養ひ其宜しきを得る時は忽ち繁茂するのです、養ひ其宜しきを得ざる時は忽ち枯れ凋んでしまふ、況や人の此世に生るゝや必ず養育の力を借りて以て始めて成長の功を現はすことは萬物の中最も甚しい方である、養育にも身と心の二つがある、肉體に於ける養ひの必要はいふまでも無いが、精神上に於いては一層養育の助けを要するのである、それで教育の事を教養とも申す、即ち教育の力に依て、智識を養ひ、道徳性を養ひ益々之を健全に發達せしむるのであります、之をやまと詞で申すと「まよ」と云ふことに當ります、昔は子供に乳を飲まして養育する、唯今の乳母の事を「まよ、母」と申したさうです、即ち養ひの母であるからです、今日では繼母のことをまよと稱へる、又他人の子を賣つて我子として育てるものを「まよ子」と云ふ、それで今日では「まよ」と云ふ辭が、何んとなう情愛が親しからぬやうに聞へます、乃ちまよしいなどと申すと一種の厭味を帯びた語のやうな意味がするが、本來はまよと云ふ語は養ひの義であるから、最も親しい情愛を含んだ語です、吾々の肉體を直接に養ふていく食物中最も主たる物は無論米である、故に其れ米の事を「まよ」と稱して居る、矢張り養ふと云ふ意味なのです、人は養育の力に依て次第に體軀も成長して遂に一人前の者になるのであります、ソコで修養と云ふ語は甚だ範圍が廣いです、併し今は精神の修養に重きを置いて御話する積りである、修養の第一は吾々の性癖や悪習慣を矯正して本然の智徳を發達せしむるのであります、依て其の精神若くは肉體に於ける有らゆる缺點或は悪習慣を切り捨て、極純潔なる正しい精神を發揮いたし、其性能を益々鍛鍊して、圓熟の境に進ましめて行くのが之れ修養の意味であらうと思ひます、して見ると禪の修養と云ても別に變つたことをするのでは無い、ツマリ禪定又は禪門の行持を修養の土臺とし、之れに依て智識を啓發し、道徳を精鍊して以て其の性能を現はし、其の人格を向上せしめてゆく、之れが禪の修養であります、さうして見ると、先づ以て禪門に於ける修養上最も確實なる標準を開示し之れに依て修養の歩を進めて行く様にせねばなりません、尤も禪門の標準といへば禪定そのものが標準では

ありますが、それでは初心の者にはチョツと方針が立ち惜いから禪を根底としたる具體的に適切なる標準を示すの必要があらうと思ふ、依て此にそれを話し申したのである、是は吾人の日用に履踐すべき極めて着實なる問題で有りますから、十分御開取りを願ひたい、昨日は禪の實踐法即ち禪を實踐する上に於ての儀式及び心得を申しあげましたが、ソナラ禪を實行さへすれば直ちに大悟の功果を奏するかと云ふに、中々そうはいかん、故に禪を實踐して完全圓滿なる成巧を見やうと云ふには平常の修養が殊に大事である、よしんば座禪三昧に入るにしても、平常の修養が無いと動もすれば病的の禪に陥るのです、尤も平常の修養を重んずることは單に禪計りには限らんけれども、各宗各派等に涉りて、れ話をして居る餘地が有りませんから、今は専ら禪門を中心としての修養談をするのであります、併し此修養談がやがて他の宗派の説く所と一致する点があらうと思ひます。

(一) 修養の四病

先づ修養の最初は心の病を治するか、又は其の病を防ぐにありませう、其の病とは圓覺經の中に作と止と任と滅との四病を説いてあります、凡て禪を修する以前より以後に涉りて動もすると此四つの病に罹る、これは、修養が足らぬ所から起る病です、

第一、作病、此の作病といふは作は作爲と熟字して總て妄想心を以て作爲して止まざるをいふ、乃ち常にいふ己見、若しくは我見のことです、自分の丁簡を先きに立て、種々の經營を爲すものは皆な一の妄想たるを免れぬ、之れが作病であります、縦ひ坐禪をして大悟の味が知れたといふても、若し一點私心の存するあらば其の悟といふものも奮きに依て名利の奴隷となり易いじや、元來人間といふものは大概一種の性癖がありてそれに執着したがつてならぬ、例へば氣の短い人であると、巧運は拙速に如かずなぞといふて、妄りに早くすることを貴ぶ、禪僧には事に依ると有り勝な癖である、野菜物一つ切つても手ツ取り早く亂暴な切り方でもしてあると、此の切り方には禪機があるなどといふ、併し是等を禪的

であるなどといふのは甚だありがたからぬ禪的のです、どんな人でも性癖又は習慣的癖執はあり勝なもの、叡山には慈圓僧正といふ有名な高德のれ方があつた、此僧正が歌道に大變熱心で古今の達人でありました、其時分は戀歌が非常に盛であつたです、人情を緻密に寫すには戀歌が最も適切であるといふので、戀歌には最も力を注いだものである、室々たる比叡山の僧正でありながら、時としては戀歌杯をも作て居られる、そこで或人が非常に慨嘆して僧正には近頃流行る戀歌を非常に御作りになります、歌人ならば兎に角苟くも人天の導師として模範ともなるべき僧正が、狂言綺語に類する歌の様な飾り辭を愛して、それに耽つていふ事なるといふ事は甚だ宜しくないから、速に歌を作ること杯は、今後止め下さる様にと云ふて忠告をした、其忠告は喜んで請けられたが、其御返答に

人ごとにひとつ癖はあるものよ我れにはゆるせ敷島の道

といふ歌を詠みて送られた、即ち人には必ず一つの癖はあるものと聞く、吾れには和歌の道だけは止め難い癖であるから、勘忍して呉れよと云ふ意味であります、又或所に立派な人ではあるが誠に品の悪い癖を持つて居る人がありました、即ち何物を見ても必ず價値を附ける癖がある、場所によつては甚だ失禮になる、餘所へ行く茶が出る、その茶を一口飲むと、ハア結構です失禮ながら是は二圓位の茶ですなア、人が羽織の新しいのでも着て居ると、貴公の羽織は幾圓、其紐は幾十錢、此れ酒は幾十錢此煙草は幾らと一々品評して値を附ける、實に品の悪い癖じや、或る友人が親切に忠告をした、君は立派な人間であるが、唯一つの悪い癖がある、他所へ行きて到る所の品物に價段を附けると云ふことは甚だ無禮である、君にして此癖があるといふは實に遺憾な次第であるから、今迄の様な價段附けは全廢せにやならんといふて聞かせた、彼は熱心に其忠告の辭を聞き成程自分の癖は自分には知れぬもの、君の忠告に依て始めて自分にさういふ癖のあるといふ事を認めた、大に慚愧致した、君なればこそ親切にいふて呉れる、君の唯今の忠告は實に千兩の價値があると申したさうです、矢張り其の癖が出た、實に癖といふ

ものは容易に改めにくいものであります。思はず餘談に渡りましたが前に申せし如く、自分の性癖を矯正するを主として修養するには、何所迄も心を中正の方に導かねばならん、其中道の正しきを得ず、萬事万端妄想を先きに立て、ゆくのが作病であります。

第二、止病、此れは昏沈に陥つて一切の活動を停止するのである。刈萱道心杯が深山の中に入り、人世に遠ざかり、夫婦親子の恩愛をも断ち切つた、これらはなんとなく高尚純潔ではあるが、佛教の本義より申すと、此の活動すべき人生の中に在りながら、強ちに其の活動を停止して、山の中に逃げ込むといふ様な事は是れまた一の病である、尤も或る修養の目的の爲めに一時の方便を以て修養上山中に遁る、といふならば決して悪くはない、丁度學生が家庭を離れて學校に入ると同じ事です、自分が修學の目的を達せん爲め親兄弟の膝下を離れて學校へ入學するは少しも悪くは無い、併し學校が一番安心じやからといふて卒業しても學校の寄宿舎を離れぬといふては丸で修學の目的に反する、人もその如く人生を離るゝは再び人生に返へりて救済するが目的じや、若し社會を捨てしまつては折角社會救済の爲めに修行をした甲斐も無い事になる、昔はこういふ人が禪門の高僧に澤山あつた、山を下らざる數十年など、いふ崇高なる方も少くない、これらは修行の力よりいへば貴び行ひといはれねばならんが、抑も佛教の目的は衆生濟度即ち濟世利民に在るのであるから、唯だ獨り解脱し得てそれに止まつて居つたならば是れも亦一の病的であります、之を止病と申します。

第三、任病、任病とは所謂放任主義に流れるのです、何事も因縁に打任せ成り行きに打ち任せて毫も心思を施さぬ、所謂高等なる自然主義じや、どうでも成るやうに成るものじやと諦らめて、世の中を無造作に平氣で送て居る、一休和對などといふ様な御方の事を悪く真似ると此放任主義になつてしまふ、

面かけの變らば變はれ年も取れ無病息災死なばこつくり
何にも頓着するな、好きな物は喰べるが宜い、見たい物は見るが宜い、聞きたい物は聞くが宜い、雀は

チウ／＼鳥はカア／＼皆なそのまゝの佛法じや、死ぬるもよし、生るもよし、飢いたれば飯を喫し、困じたれば眠る、是れがそのまゝの實相だ杯と香氣に構へて居るが悟りじやといふのは矢張り禪病です、支那の三國時代に世間から好し好し先生と云はれた司馬徽といふ大學者があつた、人が何をいふて來ても好し好しといふのが癖であつた、先生昨夜向に火事があつたそうです、好し／＼、彼方の内へ泥棒が這入つたそうです、好し／＼。近所に子が生れたそうです、好し好し、隣の亭主が驅て來て、先生貴公がいつも可愛つて下された私の可愛い子供が唯今死にましておきます……さうかよし／＼、隣の人は呆れかへつて厭な顔をして歸てしまつた、後で女房は氣の毒に思ふて、どうも檀那樣貴公はなんばよし／＼が御自分の專賣特許でも、人が不幸を訴へて泣顔して來たものにはよし／＼は餘りひどいと云ふものです、モ一少し御挨拶の仕様もあるじやございませんかといふと、如何にもさうだ其方がいふ事もよし／＼といふさうである、之れは極端なる放任主義の例です、絶對界に安心の根據を据へた眼より見れば人生の盛衰興廢も夢幻の如く見ゆるから、コンなふうになるのである、ソコで禪宗の僧侶中にも向上の眼を以て人世を洞觀し、人生は空華の如く夢幻に似たり、何をか執着し何にか迷はん、徒らに人間の力を以て左右せんとするは自ら其苦しみを招くに過ぎず、天真即佛法なりといふ様な見知から、此の放任病に採りつかれてしまふ事がある、禪宗の僧侶は比較的磊落だといふがある、之にも長所はあると同時に短所もあつて随分病的のものがあつて、一面から見ると形式に拘はらず人事に屈托せざるは頗る立派なやうであるが、佛教綿密の道德眼より見る時は是れ亦一種の病である、何物が來るとも少しも驚かぬごんな不幸に遭遇しても泰然自若として動かず、火は上ばるもの、水は流れるもの、夏は暑いもの、冬は寒いもの、大概が定まりの世の光景、是れ實に天然に定つた姿の妙相だ、一心生ぜざれば萬法皆なし、その萬法の相に迷ふには及ばん、そのまゝに打任せて、少しも動着せぬといふは自己の大解脱を得ることありとするも慈悲哀憐の徳用は發せられぬ、活眼より見る時は僅かに一隻眼の人たることを

免れませぬ、
 第四、滅病、此の滅は寂滅の滅です、寂滅とは從來の煩惱をスツカリ断ち切つてしまつて、九で薪盡きて火滅するの狀態になるのである、コ、ニ腰を据へると滅病になる、併し此境界にまで達することは容易で無いが、一切の煩惱を断じ盡くして大死人の如くになつてしまつては、所謂百尺竿頭の死漢である、大死一番の後再び蘇生する力が無ければ活作用を現はすの分は無、故に之を滅病といふ、優婆塞戒經に

諸の煩惱業は即ち是れ菩薩道莊嚴の伴なり

とありますが面白い御示しであります、菩薩道とは菩薩の學ぶ道である、ツマリ佛の道のことです、煩惱業は佛の道を莊嚴に飾つてくれる道具である、又好同伴である、人には其天性として欲しい情しいといふ心がある、それが貪欲となる、情いといふ心がある、それが瞋恚といふ、煩惱になる、又可愛いといふ心がある、それが愚癡になる、此等の情しい、欲しい、情い、可愛いといふ心を捨て、しまつて、惜しくも無い、欲しくも無い、憎くも無い、可愛くもない、……斯うなつてしまひば全くの寂滅である、それは絶對界に歸したのであるから立派です、立派ではあるがそれでは佛様の身體の飾りが無くなつてしまふ、何せかといふと自分の法身即ち精神だけは立派な佛様であつても、其身に福徳慈愛の光明が無い、世の中を照す力が無い、それは法身といふて働らさの無い佛様じや、元來吾々の修行といふものは自己が自己を制し、自己を啓導し、自己を運用するの法である、故に煩惱を憎まずして之を利用し善用してゆくのが、佛様の大智慧である、唯だ煩惱を断じ盡すのが、佛陀の本領だと思ふと大變な間違を生じます、換言すれば佛法の修養は煩惱を断じて無心の状態になりさるので無く、煩惱を巧みに使用し調御して行く處に在る、例へば、學校の先生が子供を教育してゆく様なものじや、子供は皆幼稚にして分別に乏しい、其子供の中には往々先生の教へに反對する行動を取る者も有る、又一向に規律を守ら

ぬ者もありませう、或は騒がしい五月蠅い子供もありませう、併し其の騒しかつたり、不規律であつたり、言ふことを聞かなかつたりする所の、多数の子供を憎んで、夫を盡く退けてしまつたでは教育は出来るものでない、種々様々なる面倒な子供をば殘らず此の教場に收容して、今迄騒しかつた子供をば程かにさせる、不規律であつた者に規律を守らしむる様に教へ導いてゆくのが教育の實である、即ち子供を調御し啓誘するのである、吾々の精神上に於ける煩惱の意業も亦た是くの如く捨て、置けばそれが即ち罪惡の源となるのである、其罪惡の源ともなるべき煩惱を巧みに制御し調和して、悪い方に向けぬ様にし、善い方へ〜と進めて行くのじや、さうすると今迄欲しい〜と思ふて妄りに欲情を發した心が一變して、最も氣高い、最も確實なる大希望大目的に向て不屈不撓に奮進して行く大願力となるのである、是れ吾々の欲情を巧に利用し善用するのであつて、やがて従前の煩惱が直に佛陀の道を裝飾する道具となる、言ひ換れば一の美德となるのです、其裝飾の中に神聖なる威嚴を存する意味から、莊嚴と申したのであります、又惜しい〜といふた心が、物事を亂雑にせず、能く自他を保護するの徳と成る、此徳を佛の三徳に配すれば智徳となります、又情い〜といふた心を巧に御して行く時には決斷の徳を現はす、情いといふ心は物に反抗して行く、即ち反撥性の現はれであるから、己れやれといふ勇氣を起すじや、この勇氣あればこそ惡魔をも降し、迷執をも断じ殺すといふやうな靈機を發するじや、禪宗には随分佛を殺し祖を殺すといふやうな亂暴な辭があるがこれは總ての執着を截断するの勇氣です、之を生ずるが多い、人の姿に迷ひ、又は親子の愛着に繫かれ、爲めに、自分の守るべき天職をも空うするといふ事にもなるが、それを巧みに調御する時は、其可愛い〜といふがそのまゝ同情慈悲の働きとなる、夫が進でゆけば社界の人類を救済するといふ、最も高尚優美なる慈悲仁愛の作用となる、可愛い〜といふ一念が段々發達して始めて光明嚇々として而も温かき佛國土が出来てくるのである、之を佛の三徳

に配すれば恩徳となる、所が此調御法を知らずして、唯むやみに煩惱を恐れ、業作用を恐れて玉石ともに滅却するに至るのは滅病で何等の働きのないことになりす。

(二) 功勳五位の徳

然らば吾々が禪門の教訓に基づきて眞の修養を積むにはどういふふうにしてゆけば宜いかといふと、これに關する古今の教訓が澤山ありますが、中に就き達磨大師十一代の祖師洞山大師の御示し下された功勳五位といふがあつて實に千古の大典型でありますから今それを以て話し致さうと思ひます、サテ功勳とは修養の意味と同一です、吾々が修養を積む時には一歩一歩に成績が現はれて来る、それが功勳です、その功勳の差等を五段に分かつたのが五位であります、即ち第一が向の位、第二が奉の位、第三が功の位、第四が共功の位、第五は功功の位です、尤も此の五位の理を委しく御話いたせば一回や二回では充分盡くすことは出来ませぬにより今此には唯だ大意だけを申し上げて諸君の修養の標準に資することと致します。

第一、向の位、向とは則ち自己の向ふ所を確定することである、志を發して目的を定むる位である、れ互の修養上最初に必要なるは立志である、「志を立つるは事業の尖なり」と西哲もいふて居る、確固不拔なる志を立てるへすれば既に事業の半ばを成就した様なものです、如何となれば志にして堅固なれば所謂精神一到何事か成らざらんで、キツと其目的は達せられます、凡そ人間の思想なるものは、或る機會に於て突然に起つたものが遂には永久の習性と成るものじや、人間の精神の發動する状態を宗鏡録等には五心に區別して説かれてある、その五心とは

第一に率爾心 これは率爾といふてヒョコト發生する心である、例へば講習會が開かれたと云ふが、一つ往て聞て見やうじやないか、さうだな往て見やうかなと、突然に起り出す心を率爾心といふ、併しこれはマダ無邪氣な方であるから直ぐ消へてしまふ事がある、此心が一轉すると、第二の尋求心となる、そ

れじや會場は何處か、何日から始まつて、時間はどうかといふやうな事を尋ね求める、それからどうしやう、かうしやうと種々に思考して愈々どうと決定するのが、第三の決定心である、マウ一度決定すると、善とか悪とかといふ一つの看板が懸つてしまふ、それが第四の染淨心です、染とは染り汚られるといふ意味であるから、惡の方になる、淨は清らかにするといふ字であるから善の方になる、一旦心が決定すれば善とか、惡とか、ドチラか一方に定つてしまふ、さうすると、惡なら惡の方に精神が固つて聯續する、善なら善の方に心が相續してそれからそれとその心に相應したる聯續作用を起すのが第五の等流心であります、一たび惡い了簡が起つてそれが固まりますとマウ翌日になつても離れない、チャンと腦裡に潜伏して何等かの機會を待て作用を起す、善い方からいふても其通りの作用を發します、故に縁に觸れる度毎に其善又は惡の心が現行する、若い時分にでも一度何かの機會に於て、佛様は有り難いものぞといふ信仰心が起りますと、久しく信心を忘れて居ても何かの縁に觸れては再び有り難いと云ふ信念が發起するものであります、之れと反對に、一度惡念を起して置くと何回でも其惡念を續出するやうになる、而して其源は第一の率爾心に出づるので、故に率爾心は至つて薄弱の様では有るが中々油斷のならぬ慎しむべき心である、之が地獄極樂の境界を生ずるの源であります、支那の墨子といふ先生は餘程修養の心懸の深い人で、白絲を見ては泣て居つたといふ、人間の心は此白絲の如く、一たび之を染むればマウ元の白絲には歸らぬ、吾々の心も今は白絲の如きものであるが、突然起る率爾心の如何に依て赤くなるか、黄色になるか、善になるか、惡になるか解らんといつて嘆かれたらうじや、吾々の精神も實に白絲の如くであるから常に注意を怠らぬやうにせねばならぬ、此決定心か修養の大目的の上に現はれたのが向の位です、即ち發心位である、此發心乃ち志が起らぬ時はどんな善い事でも之を實行する事は出来ぬ、ね金があつても志が無いと之を利用する事能はず、學問があつても志が無いと之を應用する事は不可能であります、吾々れ互が眞實佛敎の堂奥に進まうと云ふには先づ以て眞面目に且つ

着實に佛教に隨順したる目的を定め、而して其の目的を達する方法を研究して確實なる信念と行願とが確立すれば其人はマウ片足を佛陀の聖域に突き込んだも同様であつて、所謂事業の尖は成功の尖ばであります、即ち古歌に

爲せばなる爲さねはならぬ成るものを成らぬは己が爲さぬなりけり

とあるが實に其通りです、吾々の志だに鐵石の如く堅固であれば、如何なる事も必ず成功するに疑ひない、故に先づ以て目的を確立して之れに向ふの志氣を立つるのが第一の要件である、是れが向の位であります。

第二、奉の位、奉とは遵奉又は奉順の義で一旦志を發して目的に向ふた以上は他迄其志を守り、其目的の道に背かず、從茲至夜無間斷に道に進んでゆくのに、例へば盆栽を作るにしても、梅なら梅と云ふ物を鉢に植へたなら、或は日の當る所へ之を出し、或は日蔭に之を置き、或は風當りのよい所に出し、或は水を注ぎ、様々に手を盡くして始めて美しい花を見る事が出来る、菊の如きは秋に至りて見る花でありながら、春のうちより手入れをして行かねばならぬ、

今日になりて菊作らうと思ひけり

といふ句がある、美しく咲いた花を見てから、それじやあ私も作れば宜かつたといふても間に合はぬ、春から夏の間には手を盡した骨折りがあればこそ秋となりてから無限の樂みを得るのであるこの骨折りが即ち奉の位じや、修養中の修養じや、一日修養すれば必ずそれ丈の効果が現はれるに相違ないと思ふれば骨折が寧ろ快樂である、吉田松陰先生は二十九歳の時、幕府の忌む所となりて縲紲の辱を受け、さうして遂には小塚原の露と消れてしまはれたが、明日は愈々死刑の場所へ引き出さるゝと云ふ迄獄舎の中に於て孟子の講釋をして居られた、門人がどうも先生マウ明日には此首を切られてしまふと云ふ場合、それに今に於て、子の曰くを習ふても仕方が無いじやありませんかと云ふと、愚かなることを申される

な、吾々は道の爲めに身を捧げて居るのである、死ぬる生きるといふものは自から天命の定まる所、復た何をか恨みん、人一日此世に存せば一日の道なかるべからず、縱ひ二日や三日は、喰はず着ずに居ても凌げぬこともないけれど道と云ふものは人生一日も缺ぐべからざるものである、故に予は孟子の章句を講ずるにはあらず、是れ賢き道を談ずるのでと云はれたそうじや、道の爲めに盡すことは縱ひ獄中に在り乍らも毫も平常に異なることなく、泰然として孟子の講義を續けて居られました、流石に吉田松陰先生は大人物である、其刑に臨むや母親の心情を察してさしも大丈夫兒も覺はず涙を流し

親を思ふ心にまゝる親心今日のれとづれ何んときくらん

といふ一首の歌を詠せられた實に天地を動かし鬼神をも泣かしむるの感があります、

身はたとひ武藏の野邊に朽つるもとどめれかまし大和魂

先生の大精神は萬世の後に至るまで決して死んでは居らぬ、永く國家の爲めに護國の靈となつて盡くして居る。縱ひ學は百科の精を極め、文は唐宋の大家を壓するの技倆ありと雖も、若し我が精神が眞實道に奉順し道を守守するの大志が無つたならば、其人は終に書物箱たるを免れぬ、學問の道具たるに過ぎない、學問の有り無しに拘らず専心一意從茲至夜己れの目的に趣向して身命を惜まず、道を守り道を行なひゆくといふのが奉の位であります、

頼山陽が京都に在りて、日本史を著はされた時に、山陽の友人で有名なる太合和尚といふがあつた、眞宗の僧侶で學問もあり、書も出来る、俳諧にも巧みであるといふ餘程多藝な人であつたと見へる、其の太合と親しく交はれる易行院法海と云ふ學僧は、其頃の眞宗の高倉學寮の學長をして居られた、太合和尚も法海上人の後を承けて學長となつたといふことだ、此法海上人は傑出したる人物であつたから、山陽も竊かに其徳を欽慕してどうか一返遇ひたいと思ふて居られる、太合和尚はそれを聞て或日山陽を連れて、易行院法海上人の所を訪ふた、所が易行院といふ人は極單純な飾りもれ世辭も無い方であつたら

しい、太合和尚が今日は有名なる日本外史の著者頼山陽先生を連れ申して参つたと申し入れたが、法海は黙つて見臺に向つて書見をして居る、再び今日は頼山陽先生を連れ申しましたと云ふと、ジツトこう白眼で居たが下手な達摩さんのやうな顔付をして、「何に頼と云ふ人を連れて来たどやハ、ア此頃話しを聞くと、安藝國の儒者に頼久太郎とか云ふ者が京都へ来て、楠公の忠節義勇を後世に傳へたいとやらで楠公の傳記を書き、それに前後の關係を附け加へて、何にやら外史とか云ふものを作つたとか云ふ事を聞いて居つた、所が人々の話しを聞くと、彼れは國元に父が死なれて唯だ一人の母親がある、其母親は深く我子の事を案じ暮して遇ひたがつて居る、然るに母親を國元に置き放しにして三年間も國へ歸らず、自分は京都の立派な宿所に居て、夏になると肌を脱ぎ、胡座をかきつ、楠公の傳記を書いて居るとやら（頼山陽は傍で聞て居る）怪しからん奴だ、忠臣は孝子の門に出づるものじや、頼久太郎の如きは親不孝の者だ、さう云ふ不孝者には恐らくは忠義の心も深くはあるまい、忠義の心薄き者坏は楠公の傳記を書くべき資格は無い筈だ、親不孝な人間に身分の傳記などを書かれるかと思ふたら、恐らく楠公は草葉の蔭で泣いて居られるだらう、そんな、怪しからん奴を連れて來ると云ふ事があるものか、速に歸て下さい、暇潰しなこと邪魔になるわいといふた切り知らん顔して見臺に向つて居る、頼山陽も汗を流したが、案内をした太合和尚も氣の毒でくたたらん、早速其室を立ち出で先生囁れ腹が立つたであります、先生の忠義、先生の御精神誰でも知て居る、然るに人の噂なぞを聞きかちつてよい加減な判断をなし、ムキツケにあんな事を云ふとは無禮きわまつて居る、あ、云ふ頑固な性分でありますからどうも仕方が無い、先生今日の處はどうか堪忍して下さいと云ふと、頼山陽はイヤさうでない、君はさう思はれるか知らんが決して心配下さるな、今法海のいはれた語は全くの眞理である、さすがは本願寺の高倉學僚の長を勤めて居る人だけあつて、また格別じや、日本國中に此の山陽に向つて、あれ程の苦言をいふ者は恐らく他にはあるまい、唯今の小言こそ山陽の身に取り生涯の鹹めである、此胸に針を打

たれる様な感じが致したといふた、ナメガ山陽は大人物です、易行院の一言を非常に感服して、翌朝は直に安藝國へ向け、母親に逢ふ爲めに出立したと云ふ事でありませう、頼山陽とも云はれる程の立派な學者でも、若し其行ひに於て忠孝の二道を固く守るといふ事が無つたならば、どんな名文章を以て忠臣孝子を世に紹介する技倆はありとも、未だ奉とは申されぬ、故に寝ても覺めても自分の志に背かず、目的の道を忘れず何處迄も初志を確守して行くのが、奉の位である、故に奉の一位は吾々の修養上最も必要な事であらうと思ふので有ります、

第三、功の位、此れは一旦確固不拔の志を起したならば、其志を守りてドコ迄も忠實に修行し、忠實に修養を積んだ結果茲に其の成功を見る、即ち、其の目的を達する、之が功である、此功にも一部の功と全部の功との二つがある、一日修養すれば一日丈の効果が擧つて參る、一年の修養を積めば一年だけの効果が現はれる、例へば學校に於て、年毎に學級が昇進するやうな鹽梅で、年一年と修養の効果を奏して參る、それであるから全分の功を奏し盡すと云ふ事は、極めて前途遠遠で有りますが、一部の功は何人でも得られます、其功が次第く發達し圓熟して終には全分の功を得るに至りますが、全分の功を得た境界はどうかといふに、即ち佛陀の聖域です、佛陀の聖域といふは智徳を圓滿した境界をいふのである、修養と云ふても別にかはつたことは無い、矢張り智慧に於て圓滿を得る、徳相に於て圓滿を得るが爲めなのである、眞諦門から申しまして、俗諦門から申しまして、成功したる佛果の内容と云ふと全く智徳の二つに歸するので有ります、大信念を土臺として人生以外に智徳圓滿なる佛陀の聖智妙徳を歸崇し其の佛果位に達するを最大理想となし、我意我見を放擲して其理想に向て信念を増進し、修行を實踐して行くのが眞諦門です、又人生に處して上を敬ひ下を憐れみ善を修め惡を離れ以て人間の道を全ふし佛陀の徳を運用して進で行くのが所謂俗諦門であります、眞諦俗諦其趣異なりと雖も智徳の圓滿を期するに至つては不二である、其智徳の圓滿と云ふのも、ツマリ人々本具の徳性を發揮して宇宙の妙徳、

地の本性と一致して身を以て道とし、心を以て道とし、身を以て徳とし、心を以て徳とし、更に進んで法界平等利益の大慈悲光を顯現したのが智徳の圓滿と稱するのであります。

甲州慧林寺の開山快川和尚は有名なる禪僧である、曾て武田信玄の歸依を受け其請に應じて美濃より甲州に來り大に武田家の國政をも助けられた人であつたが、信玄既に没して武田の勢力日に衰ひ嗣子勝頼は遂に天目山に於て討死をして、さしも名譽ある武田の系統は茲に斷絶したのじや、其後に至ても快川和尚は尙ほ武田家の再興を祈つて居られた、織田信長は和尚の徳を慕ふて再三招かれたが應じない、ソコデ大に立腹致して、慧林寺へ三百人の軍勢を派し暴力を以て和尚を服せんとした、若し今の中に命に服するとあれば宜し、さも無くんば此寺を焼拂つて汝等諸共に焼き殺してしまふぞと嚇した、快川和尚は少しも動かん、命を惜んで志に背くは人間の道に非ず、争で身を惜んで武田の恩顧に反くべけんやといふて、ドウしても應せぬ、短氣の信長大に怒りて寺の本堂に火をかける、快川和尚も火の中に居る譯にゆかんから山門の二階へと登りました、其時相従ふた僧侶殆ど數十名、スルトこんどは山門の下へ薪を山の如くに積で、之れに火をかけた、數十名の僧侶は快川和尚を中央にして何れも二階に於て坐禪をして居る、マウ火焰は渦を巻いて山門の二階に漲り入る、其時に快川和尚は大衆に向つて

諸人者大火燄裡に向つて如何が大法輪を轉せん

といふ釣語を下した、之れは禪宗に於て一同の所見を調べやうと云ふ時の語で之を釣語といふのです、此大火燄の中に於ての佛法はさうじや、安心はさうじや、體中に火が燃ゆ附くと云ふ場合こそ吾々の大安心を決定すべき好箇の機會じや、これが出來んやうな佛法は講釋佛法、口先佛法である、ソナ佛法ではマサかの時の役に立たん、數十名の大衆は九で夢中に成て問答を始めた、其答辭には喝と云つて大喝一聲した者もあつたらう、無と云ふて答へた者も在つたらう、色々の機用を呈したのでありませうが、マウ衣の袖や裳に迄火が燃ゆ附く様になつた、最後に至りまして、快川和尚は大音聲を擧げて

安心何を必ずしも山水を須ひんや、心頭を滅却すれば火も亦滅し

と之れが最後の句であつた、眞箇の安心は高山流水の閑寂の地にのみ在るべきものに非ず、觸處々々の佛法じや、徹底無我解脱の境に達する時は、燄々たる大火も涼しいぞ、其辭の將に了らんとする時、山門の屋根がドット墮ちた、數十人の禪僧達は盡く火燄の中に葬られてしまつた、快川和尚も坐禪をした儘從容として火定に入られたと云ふ事でありませぬ、是等は非常な場合に於て非常な禪機を現はしたものである、快川和尚の如きは平常に於て既に眞箇の大安心を得て居られた人であつたからこそ、斯かる場合に際して壯烈極まる動作が出來たのである、是は決して完全なる成功の手段とすることは出來ぬが、安心不動着の境界を得たのは實に一部の成功としては立派なものです、併し世の中は唯だ自己のみの成功では未だ完全なる成功とは謂はれませぬ、必ず社會一同と共に其の成功の徳を樂しむことにせなければなりません、ソコデ五位に於ては更らに進んで其の功を共にすべき所以たる其功を説きます、

第四、其功の位、實に我國は今日以後益々國家の爲めに忠義を盡さねばならぬといふ御勸語の思想を鼓吹して十分響き渡らしめ、益々愛國心を養成してゆかねばなるまいと思ふ、何せかと云ふと海外の制度文物を輸入して日本の文明を致した結果は自然海外の方へ心が散り易い、殊に國家の發展と與に海外思想は益々發達して參いる、海外思想の發達は甚だ宜い寧ろ益々之を奨勵せねばならぬが、之れと同時に自分の脚下なる國家的觀念が動もすると薄らきはせぬかといふ様な恐れがある、たまけに多數國民の中には利の爲に國家を忘るゝといふ様な者が出來ぬとも保障はされぬ、どうかすると國家のパチルスとも稱すべき賣國奴などが出て來て我が國家の大生命に向つて危害を與ゆる様なことがある、蟻螂が斧を拒むやうなものではあるが、しかし中々油断はならぬです、尤も日清日露の戦役時代よりして、國家的觀念は非常に發達はして來たが、併し此際は一層油断なく、益々此觀念の充實を圖るの必要があらうと思ふ、國家の爲めには身命をも顧みぬといふが大和心の精華であるが、平常無事の日に常にもその精神を

以て國家に盡すやうにせねばならぬ、商工農業ともに國家の爲め社會の爲め人世の爲めといふ道徳的觀念を奮起するは、人道の歸趣、佛法の妙用である、故に此五位の上では功と云ふ外に共功といふ位が必要になる、共は同なり與なりと注して衆生と其の功を與にするの義であります、自分一人丈が佛の道を證して、大解脱を得ると雖も、是れ唯だ一部の成功と謂ふべきである、自分だけが如何程立派な人物に成つたとして我が佛教に於て決して充分の成功とは許さぬ、自覺のみありて覺他を缺くは車の半輪あるが如くじや、例へば此水瓶と云ふ物は何の爲めに必要かと云ふに是は水を容れる器であるから、水さへ容れば宜いと云ふて此口を閉じ蓋を爲したのみでは中に清水が一杯入れてあるといふだけで、何等の役にも立たないのである、一たび水を容れたのは第一段の成功である、その成功した水瓶の口を開いて、自由自在に水を出して使ふて實用に供するのが第二段の成功じや、是に於て、始めて水瓶の作用即ち徳が現はれるのである、吾々も亦た斯くの如く縦ひ釋尊の如き完全なる大聖の位に上るとも、檀特山の山中に在つて、自調解脱を獲得して、獨り自ら其法味を樂まると云ふ事のみであつたならば、吾々は千萬歳の後までも手を合はして信心供養し奉る心も恩徳報謝の觀念も起らるのである、釋尊が六年の間艱難辛苦を遊ばされたのはツマリ一切衆生を濟度利益せらるゝが最終の御目的である、それであるから佛が

今此の三界は皆是れ吾が有なり、其の中の衆生は皆是れ吾が子なり

と仰せられて、此の三千大千世界の全部が我が教化すべき領地である、其の中の衆生は人類は云ふに及ばず其他の生物一切は皆是れ吾子である、といひなされたのじや、實に廣大無邊なる御慈悲心である、吾々も釋尊の如き廣大なる正法眼を聞いて世界の狀況を觀察する時は、一切の男子は我が父なり、一切の女人は我が母なり、吾より幼き者に對しては、吾子と思ひ、吾弟と思ひ、妹と思ひ、吾より長せる人に對しては吾父母とも兄とも姉とも思ひ、五千萬の同胞は眞實の兄弟、世界の人類は眞實の友人と思ひ、常に博愛衆に及ばし、公益を進め世務を開くといふ御勸語を立派に實行して行くで無ければ眞の成功とは

いはれぬです、自分の修養が出来たならば、他の多くの人を啓發誘導して相共に智徳圓滿の境界に達せしめんとする慈悲的活動を無礙自在に現はさしむるのが共功の位である、そこで此の共功の位に進むには誓願といふ事が最も必要である、其の誓願は無數にある中に一切の佛や菩薩方に通ずる誓願が四通りある、乃ち

- (一) 衆生無邊誓願度、
- (二) 煩惱無盡誓願斷、
- (三) 法門無量誓願學、
- (四) 佛道無上誓願成、

である、一切の衆生は無邊なるも、誓て濟度しやう、諸の煩惱は盡くすること無きも、誓て盡断しやう、諸佛の法門は限り無きも、誓て學び盡くさん、佛の道は無上なるも、誓て之を成就せんとの大誓願を確立し、自覺と覺他と併へ行ふて、益々世界の爲め人生の爲めに不惜身命の行持を勵むのを佛教に於ては菩薩行と云ひます、菩薩といへば到底吾々の及ばざる位地の様に思ふ人もあるが、菩薩とは佛弟子の異名です、此方の語に譯すれば覺有情なぞといふ譯語もあるが解り易く云へば大心の人といふ意になる、或は大士とも云ふ、即ち大きな心の人と云ふ事である、大きな心とは寛大なる度量と遠大なる慈悲心とを以て人生を救済し、社會を化度するの謂である、故に自分一人の解脱を圖ると云ふ様な狭い心に住せず、我が生命のあらん限り、我が精力のあらん限りは、分に應じ機に従つて社會の爲めに盡くし、國家の爲めに盡くして行くこと云ふ廣大無邊なる心で未來際を期して化導濟度に從ふ人が菩薩である、誓へて見ると座敷を掃除するの如き、室内が穢いから奇麗にせねばならぬと決心するのが向の位で、斯く決心したならば箒を持て来る、雑巾を持て来る、自分が斯んな姿じや掃除が出来ぬと思ふたら、タスマも掛ける、手巾も締める、裳もかゝげる、裾も端折り、隅から隅まで忠實に掃除をするのが奉の位です、いよいよ坐敷が奇麗になつたのが第三の功の位である、併し坐敷は奇麗にしたが人を入れちやならん、自分獨りで寝て居るのじやといふのみではそれじや何にもならん、唯だ奇麗になつたといふだけだ、既に

奇麗になつたなら自分が未だタヌキを取りはづさないうちにも早や人を其處へ入れて養應もし、接待もする、之が其功の位になる、昔し支那の老子の師匠に常従といふ先生があつた、此の常従が年老いて將に死なんとする時、老子が傍に在りて教を乞ふた、先生はマウを隠れになるであります、どうか吾々門下生に對して最後の教訓を願ひたいといふと、常従は大きく口を開いて我が口中に齒があるかと問はれた、常従の口の中を見ると齒は上下共に一本もない、(丸で齒無しじや)齒はござりません、然らば舌は有るか、舌はござります、其時常従は徐ろに教へを垂れて、汝等も亦能く齒と舌との關係を思ふて見よ、齒は堅きが故に早く落ちる、舌は柔かなるを以て永く存す、處世修道の秘訣は必ずしも之を遠きに求むべからず、れ互の口中に在る齒と舌が能く宇宙の眞理を説明して居る、之を標準とせば以て人智の妙を盡くし處世の秘訣を窺ふ事が出来るであらうと云はれた、齒といふものは頑固なるが故に永續に堪へぬ、舌は柔順なるが故に却て堅いものよりも堅き力がある、さうして舌は亦た吾々の爲めには頗る善良なる教訓を與へて呉れる、第一に舌は極めて寛大の度量を有して居る、如何なる物が來るも忍み嫌ふことなく、朝から晩迄舌に接する物は多種多様である、甘き物もあり、辛き物もあり、冷き物、熱き物、生な物、煮た物、其他色々な物に接して能く之を収め更に撰り嫌ひをせぬ、是れ則ち其功の徳である、然して口中へ御飯が這入れば其御飯が舌の上に未だ滞在して居る中に、後から御汁や漬物杯が這入つて來る、何んでも受込む、舌は全くの佛様です、而して何物が這入て來ても唾液でもつて能く之を調和して味を製する、偶々結構な御馳走にでもなりて特殊な物が入り來るとも盡く調和して其調和した物は少しく己れ自ら貯ふることなく、皆な之を奥座敷の腹の中へ送てしまふ、丸で賽の河原の石を積む様なので、溜ると送り溜ると送りして居る、サテ其奥座敷とは何にを云ふか、即ち天下國家父母祖先社會等である、自分の修養が既に立派に、處世の秘訣を得、世に處して世に容せず、美しい警願力を以て總ての物を自己の願海の中に同化せしむるの大度量を有し、愈々自利自調の徳が成功した結果は己れ自ら其成

功に満足せず、皆な盡く之れを國家の爲め、社界の爲め、父母、祖先の爲めに回らしてゆく、即ち奥座敷へ送るのである、之れを佛教では回向と云ふ、自分の得た智識は皆社會國家に向ける、自分の得た道徳は即ち父母祖先に向ける、己れの功を回らして一切衆生に向けるのが回向である、其の回向の標準は簡單なる三寸の舌一枚の上にもチャンと具はつて居る、故に常従は此舌一枚の上に處世の秘訣人道の妙味は盡く説明されて居るといふ最も適切なる教訓を與へられたのです、されば五位の中の第四位に其功と云ふ事を置かれたのである、併し其功を執して之れを誇るの念があつてはならん、座敷を掃除しましたならば、サアれ這入りなさいといふても、若し己れが掃除して奇麗になつたんだから之を有り難やと思ふて下さいと云ふたなら其一言で今迄の功が皆な俗化してしまひます、所謂「住相の布施は生天の福」といふのは、コ、じや、故に五位の最後に功々といふ一位があります、

第五、功功の位、乃ち功を成すも其功に滯らず、其の上一段の功を積む、マウ出来上つたと云ふて安心するのは第一期の功で、其上更に一步を進め功功邊にも居らぬと云ふが功功です、即ち第二期の功である、之を解り易く云へば無功の功である、どんな立派な人物になつても己れは豪い人物じやと自惚れては、決して立派な人物たることを得ぬ、幕末の大儒安積良齋先生は、極めて容貌の醜い人であつたと云ふ事です、まだ青年の時代に嫁さんを娶つた嫁さんも縁付て來ては見たものゝ如何にも先生が餘りに醜いので丸で化物と同居して居る様な氣かして氣味が悪くてならん、どう〜我慢が出来なかつたものと見へ實家へ逃げ歸つた、さう云ふ時に若し恐癡の深い者であつたなら、必ず其嫁を恨むとか或は精神に狂ひが出るであらうが、先生はさうでない、自分は當り前の手續を以て嫁を貰ひしに、其嫁にさへも嫌はれる程の醜男子であるから殆んど體形上では一人前の資格はない、併し人間と云ふものは容貌計りで世に立つべきものでない、精神、智能及び道徳が大事である、これからは大に奮發して、心を以て世に立たうと云ふ決心を起して郷里を離れ、諸方の學者の門を叩いて非常に勉強し、どう〜立派な大

學者となつた、功成り名遂げて後、床の間に一人の美婦人の畫像を飾つて毎朝御馳走を備へて少しも怠らぬ、或人之を怪みて先生の様を眞面目な御方が、あゝ云ふ婦人の繪を掛けて出でになるのは如何云ふ譯かと尋ねると、是は予が青年時代に貰つた花嫁であるが、予の醜を嫌ふて里方に歸つた、予を嫌ふは人情の自然にして、決して無理はない、予は鏡に向て自ら見るに、嫁に嫌はれるだけの立派な資格を有つて居る、嫁が嫌つて呉れたればこそ予をして今日あるに至らしめた、予が聖人の道を學ぶやうになつたのは全く此の花嫁のね蔭である、故に予は此花嫁に向つて感謝して居るのであると云はれた、普通の者であつたなら生涯忘れぬ程の憎しみを持つであらうが先生は憎い者も憎いと思はず、自分が立身したのは皆此の婦人の賜物として居られたのです、是れ初めを忘れず唯だ己れの性を盡し道を習ふを本分として居られたのです、總て世の中は、上に立つ人や富める人のみを以て快樂を得ることは出来ぬものです、車賃を澤山持て居ても車を挽いて呉れる者が無ければ自分でタクシ歩るくより外は無い、雇人や下女奉公をする者が無ければ、檀那さんが一人で雑巾がけまでせにやならん、奉公する者があればこそ御飯も炊いて呉れる、店の仕事もして呉れる、御給仕もして呉れる、其方面から見ると下女男も皆な我が恩人である、況んや安積良齋先生の如き觀念を有つて居るならば、自分を嫌ひ厭ふた者迄も、自分の身に對する刺激劑なりと思ふてそれが修養を増進するの縁となる、それであるに少し出世でもしたり功勳でも、現はしますると直ぐ自分は豪い者と思ふて自ら誇り、自ら昂ぶより目下の者を輕蔑するやうになる、吾は成功したからと云ふて、高く止つて高慢我慢に陥めると云ふ様な事では未だ自分の功績の至らざるを證明する様なものである、慈善道徳の上でも其通りである、善を行ふて善を忘れ、惡を止めて惡を忘るといふて、其徳行が自然に合ふ時は更に功の跡を留めぬ、御前は親孝行であるといはれても、どう致しまして親孝行どころじやございませぬといふ程の人ならば益々孝道を全ふし、而して道を行ふ事に於て足ることを知らぬやうになる、ソコで益其徳が圓滿になる、是が即ち無功の功である、曹洞宗

の御開山承陽大師が支那の天童山に在りて御修行中の際、丁度此頃の様な極々熱い時分、佛殿の前を御通過になると、大府の用典座と稱する典座職を勤めて居らるゝ六十餘歳計りの老僧が、熱い處に笠も被らず熱心に獨りでキノコを曝して居られた、承陽大師は之を見て非常に氣の毒なと思召した、尤も其時分は承陽大師が未だ二十七八歳の頃です、ソコで其老僧の傍によりて丁寧に禮を爲し、尊公の寮内には行者とか童子とかいふ多くの召し使がある又次役の人も居られば、青年の僧侶も澤山居らるゝ筈じや、故に御自身で此様な骨折りの仕事をなさらんでも、イクラも人を使つて爲さしめられたら宜いでは無いかと云はれると、彼の老僧は「他は是れ吾にあらず」と曰はれた、即ち他人に仕事をさしては自分の勤にはなりません、幸に佛の弟子と成りて法衣を着くる身の上、特に典座の重任に當れる上は、どれ程人が傍に居やうとも、自分の精力のあらん限りは事に當りて盡さねばならん、先年亡くなられた谷干城子の夫人がさう云はれた事がある、自分は毎朝女中を起すに、病氣の時は別段じやが平生は必ず自分が先きに起きて、而して後に下女等を起しますと申されたが、實に名言です、又修養の箴語であります、自分が寢て居つて召使の者を起しても仲々起きるものではない、先づ自分の身を以て模範を示すのが即ち身體の教育と云ふものです、そこで用典座も、「他は是れ吾にあらず」と云はれたのである、大師は大に感心なされたが併しこのやうな暑い日中に致されんでもモット涼しい日に於てするとか、又は日蔭の移つた後になされても宜しいではありませぬかと仰せられましたれば彼老僧は更に「何れの時をか待たん」と答へた、實に今日は熱いから明日にしよう、今は寒いから後刻にしようと云て居たならば、六十歳の歲月を送過せし身、殊に今晚の命も保ち難い無常の世に在りてどうして佛法の行持が勤まる事が出来やうかといふの意味です、承陽大師は此一言を聞かされて總身に寒毛卓立する程感激の情が溢れたぞと仰せられてあります、眞實の佛法の行持は斯うなければならぬ、所が互に少々仕事でもすると、己は斯んなに働いたのに手傳へも仕ないとか、汝等の怠りより此年老いた己れ迄が仕事をせねばならん

ごか、なんとかと云ふて高慢やら不平やらを述べ立つるから折角仕事をした功德は皆な流してしまふのである。依て常に自利利他の修養をはげみながら、少しも其の功に誇るの心ないのが功功である、適切に云ふたならば如何程の大功を奏するも毫も大功と思はず、マウ一段と進み行き、未だ己れが行ひは足らぬと云ふ者を有て居ること、眞實の大功を奏する事が出来るのである、満場の諸君も願はくは斯くの如き心得を以て修養を積み自分の精神を勵まして以て社會の改善を助け、風俗の矯正を圖り、又は教育の普及と發達とに努められたならば、一步一步に眞箇の功績が現はれてくるのであらうと思ひます、斯くしてこそ所謂「行も禪、坐も禪、語默動體安禪」と云ふ禪の活機用が現はれ、日用光中の七顛八倒も皆な坐禪三昧の妙用となります、此間中も申しました通り、禪は禪宗の禪にあらずして佛教の禪であるから、天台眞言の上には念佛の上にも題目の中にも皆な禪はある、加之ならず、大智禪師は「雨竹松風皆説禪」と曰はれた如く宇宙萬象も皆な禪ならざるは無いのですから、能く天地の眞理を悟り其の理を實際に行ふ様に身心を修養なさるのが吾々人間の本務であります、是れ則ち禪的修養の根本義ですか、此に意あつて言足らず未だ充分に説き盡くらない點は澤山ありますなれど最早時間がありませぬから今回の講演は之れにて結了を告げます。

と云ふ、なんぞかと云ふて高慢やら不平やらを述べ立つるから折角仕事をした功德は皆な流してしまふ
ものゝ、依て常に自利利他の修養をはげみながら、少しも其の功に誇るの心ないのが功功である、親切
に云ふならば如何程の大功を奏するも毫も大功と思はず、一ウ一段と進み行き、未だ己れが行ひは足
らぬと云ふ考を有て居ること、眞實の大功を奏する事が出来るのである、満場の諸君も願はくは斯くの
如く心得を以て修養を積み自分の精神を勵まして以て社會の改善を扶け、風俗の矯正を圖り、又は教育
の普及と發達とに努められたならば、一歩一歩に眞箇の功績が現はれてくるのであると思ひます、斯
くしてこそ所謂「行も禪、坐も禪、語默動靜安禪」と云ふ禪の活用法が現はれ、日用中の七倒八倒も
皆な坐禪三昧の妙用となりませう、此間中も申しました通り、禪は禪宗の禪にあらずして佛教の禪である
から、天台眞言の上には念佛の上にも題目の中にも皆な禪はある、加之ならず、大智禪師は「南無妙法
蓮華經」と曰はれた如く宇宙萬象も皆な禪ならざるは無いのですから、能く天地の眞理を悟り其の理
を實際に行ふ様に身心を修養なさるゝのが吾々人間の本務であります、是れ則ち禪的修養の根本義、すか
ら其の標準に依つて自己を修養し、進んで國家社會の爲めを十分に盡すこと、ならんことを希冀いたしませう、
此に意あつて言足らず未だ充分に説き盡さない點は澤山ありますなれど最早時間があつたせいで、今
回の講演は之れにて結了を告げます。

早稻田大學文學士 紹慶密應著 好評噴々

佛教哲學新論

菊版洋裝上製
金縁全壹册
紙數七百餘頁
定價金貳圓

哲學雜誌評曰

本書は佛教の教理思想を現今の哲學思想に見直して立説したるもので、且つ強めて
泰西の哲學説と比較對照して論じてある。(中略)理路も明瞭で文章も能く出來てを
る、著書の苦心して論究したはありあり見ゆる。(中略)佛教の哲理を研究せんとす
る人に多大の參考となる云々

東亞之光評曰

古今佛教に關する著作多からずとせず。而も其多くは唯々徒らに古來の宗派心に驅
られて解釋したる大小乗の範圍に踞踏して其中自ら一貫せる哲理のあるを解せず。
(中略)未だ能く佛教哲學を組織的に研究するの資となるもの無し。而して本書の著
者は乃ち此に慨する所あり(中略)西洋哲學の諸説に照して比較論評す。(中略)成る
べく平易の語句を使ひ、専門語入用の止むを得ざる時は一々解釋を附したるなど、
實に著作の用意周到懇切なり、蓋し稀れに見る所の良書なりと謂ふべし、

其他諸新聞雜誌皆等しく佛學の教理乃至哲理を究むるには是非一讀せざるを得ざる一新福音なる所以を
稱讚せり。大方諸士速かに閱讀して佛教の安身立命を得られよ。

發行所

東京神田區駿河臺一丁目
振替東京口座第貳參壹番

光融館

島根縣簸川郡高松村相圓寺へ購讀申込者には當分の間割引す

324
274

不許
複製

明治四十三年十二月二日印刷
明治四十三年十二月八日發行

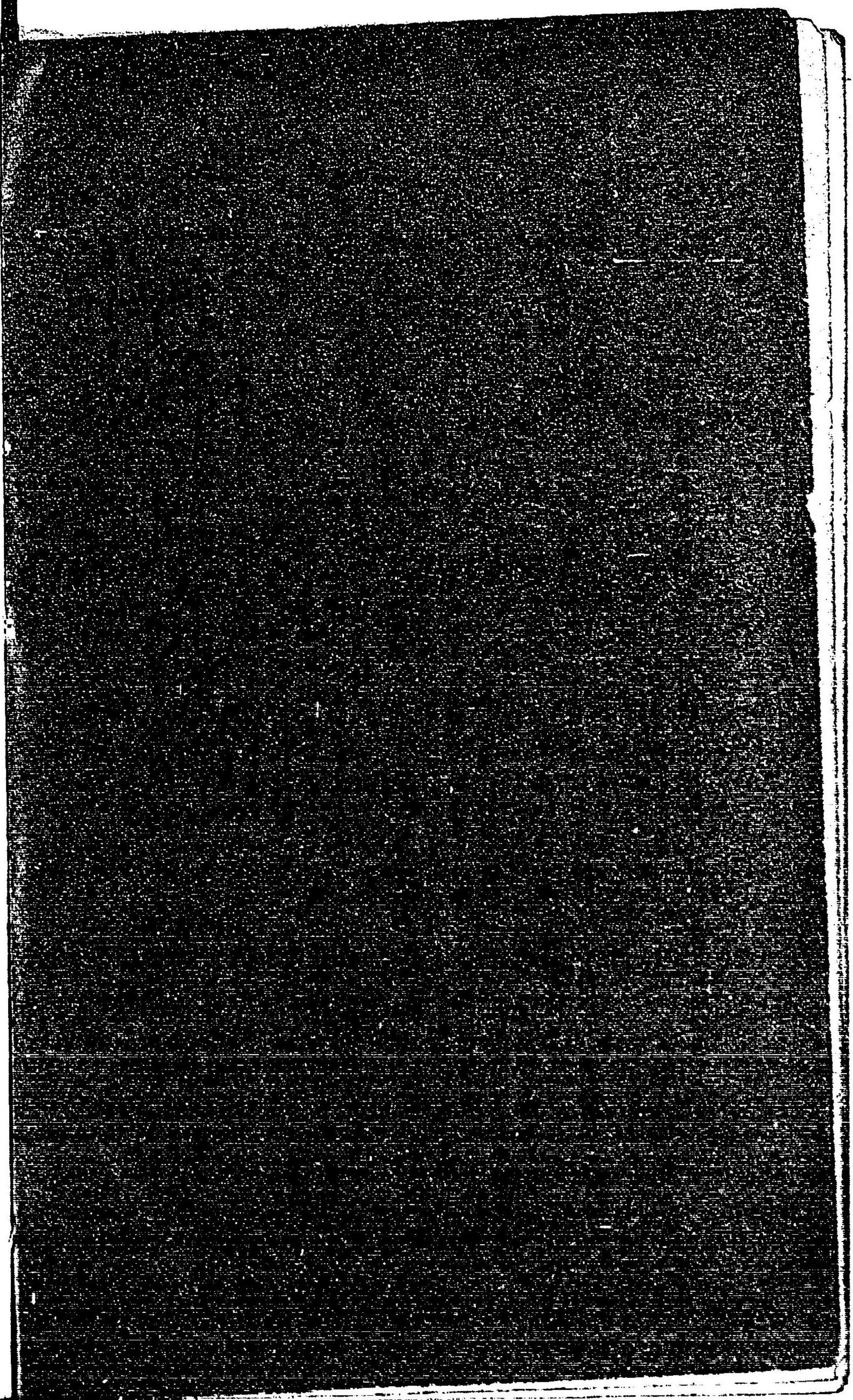
編輯者 兼
發行所 兼
島根縣簸川郡曹洞宗寺院
佛教講習會

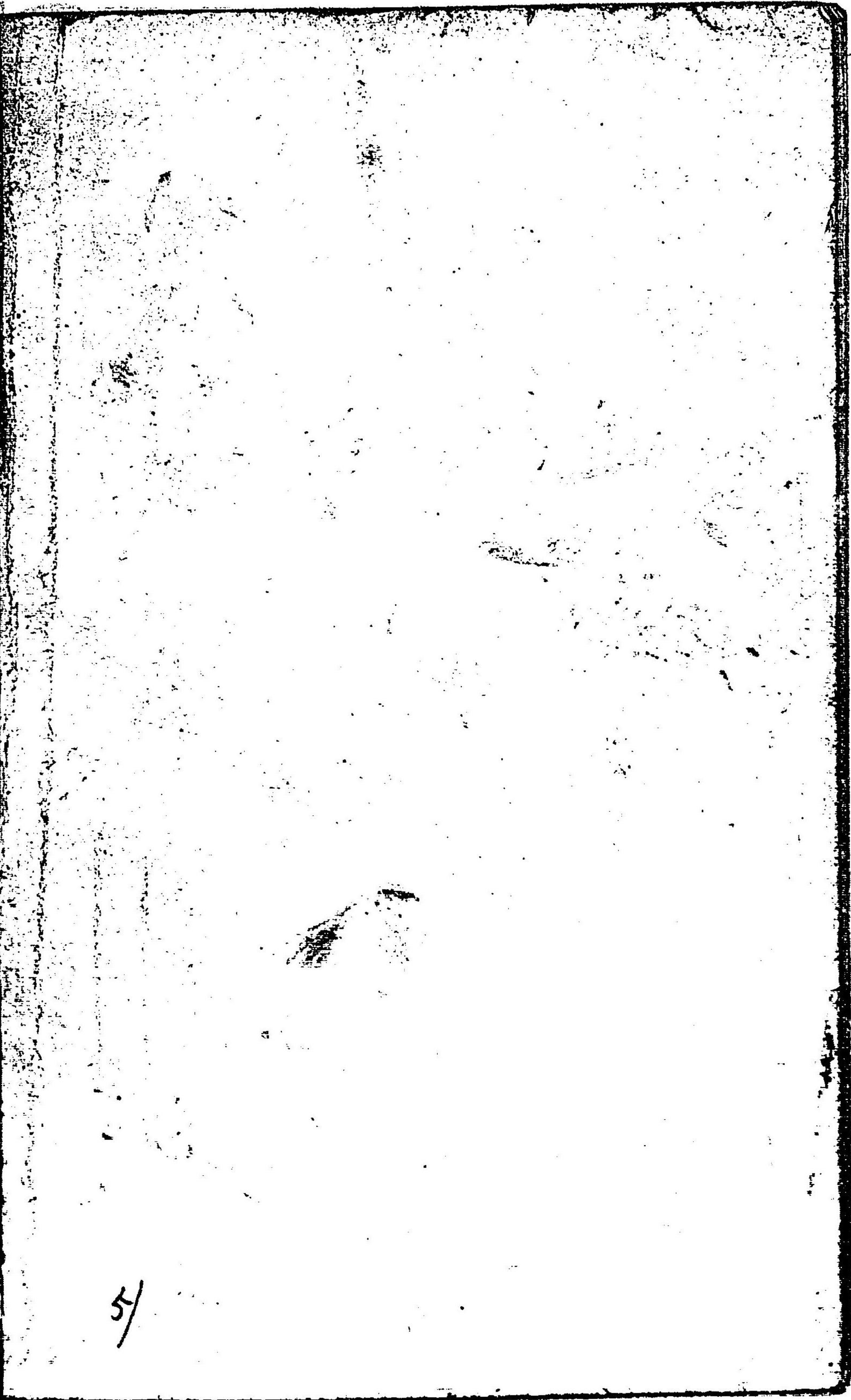
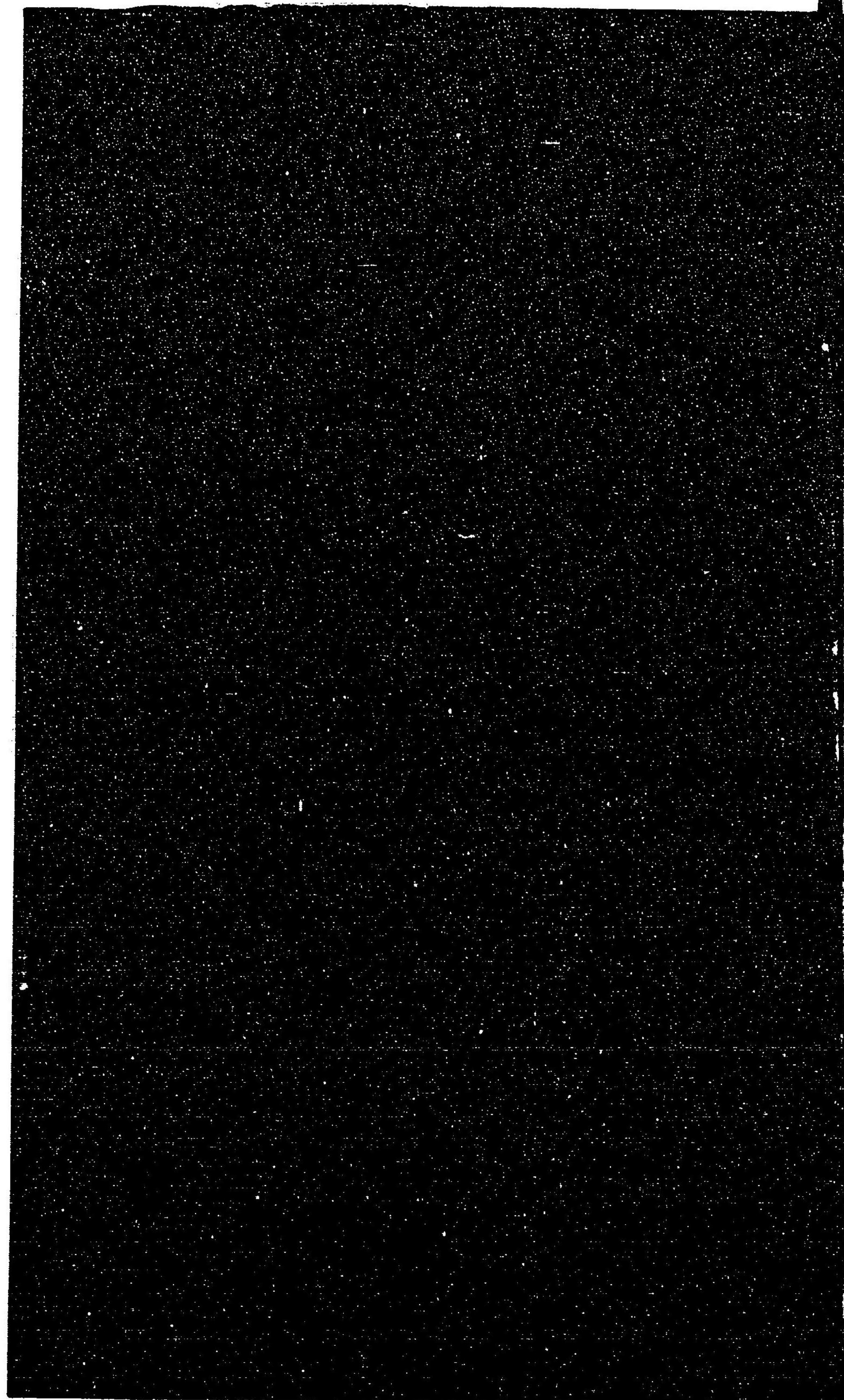
右代表者

印刷者
島根縣簸川郡高松村相圓寺住職
紹慶密應
島根縣松江市天神四拾番地
秦慶之助

發行所
島根縣簸川郡高松村相圓寺內
佛教講習會事務所
印刷兼發兌所
島根縣松江市殿町三百八十三番地
松陽新報社

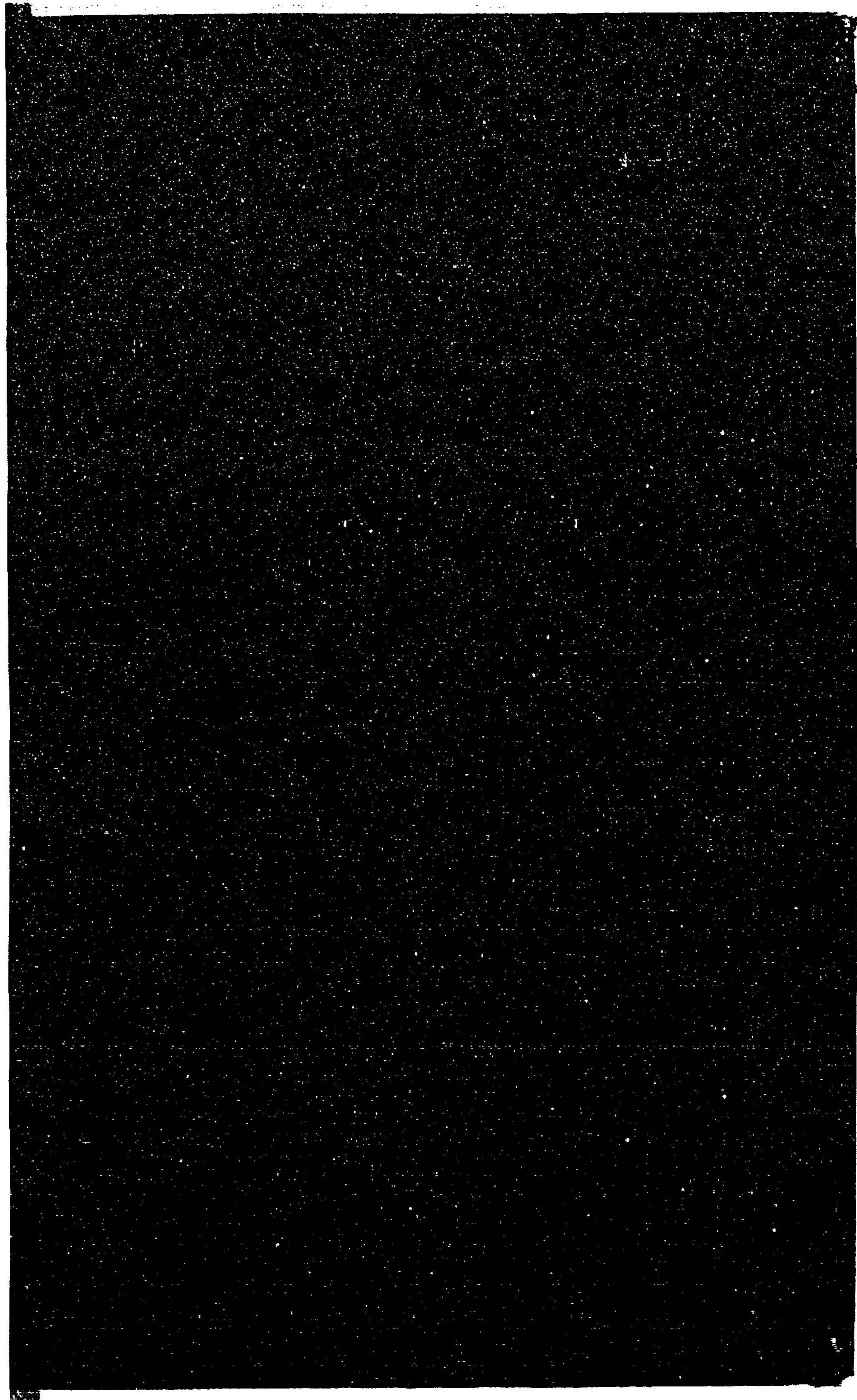
禪學之綱要與附
定價金參拾五錢





5/

324
214



324

214

019607-000-7

324-214

禅学之纲要

新井 石禅/著

M43.12

ABG-0387



